SSN 0918-1334

考古論叢 神奈河

第17集

顔面把手と釣手土器……中村　耕作
　―伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面
　　把手を基点として―

三浦半島における宮ノ台式土器の編年と様相……白石　哲也

若宮大路側溝の再検討……宇都　洋平

平成21年(2009)3月
神奈川県考古学会

考古論叢 神奈川 第17集

平成21年3月

目　次

顔面把手と釣手土器
—伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手を基点として—
…… 中村耕作　1
三浦半島における宮ノ台式土器の編年と様相……白石哲也　19
若宮大路側溝の再検討……宇都洋平　45

神奈川県考古学会

誌名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が文永3年（1266）5月2日に武蔵目代殿あて発給した下文中の「神奈河」に拠るもので、これが地名神奈川の初出文書である。

顔面把手と釣手土器

―伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手を基点として―

中村　耕作

はじめに
1. 三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手　　2. 類似する装飾とその分布
展望：顔面把手と釣手土器

はじめに

有孔鍔付土器・釣手土器・器台。これらは、縄文時代中期の勝坂式土器様式の中で定着した新しい土器形式である。小林達雄（1981・1982）は釣手土器など非飲食用の形式の出現や土器の炉・埋甕・副葬品への転用をもって、「応用の時代」に入る「縄文土器の第二革命」と評価している。

釣手土器はランプと想定されているが、竪穴から出土する例が多く、しばしば火災住居に石棒などを伴って検出され、事例数の少なさもあって、象徴的な儀礼具として位置づけられている（藤森 1965）。また、その分布も限定されており土器形式の中でも特異な位置にある。すなわち、前半期の藤内式期～曽利Ⅰ式期においては、甲信地方から関東西南部に約 40 点が知られているのみであり、曽利Ⅱ式期以降には数を増し形態の上でも地域的なバリエーションを増やしていくものの、分布は関東西部から東海・北陸までに限られる（宮城 1982、綿田 2002、中村 2008b）。動物装飾や顔面装飾がしばしば付されるが、前半期には特にその比率は高い。その出現過程は未だ明らかではないものの、研究の当初より顔面把手[註1]との形態の類似が指摘されている（鳥居 1924）。また、釣手土器の頂部にしばしば見られる顔面装飾は、顔面把手を受け継ぐものとする見解がある（蜂屋 2008）。

顔面把手もまた勝坂様式を特徴付ける要素であり、釣手土器の出現期である藤内式の後半～井戸尻式末期に最盛期を迎える。この間、数の上では顔面把手が圧倒的に多いものの両者は並存し、分布範囲もほぼ重なる。顔面把手の大多数は把手部のみで検出され、器体と異なった取り扱いがなされた可能性が高い（藤森 1968）。また器体を伴う事例は、その多くに底部欠損が認められ、土坑中からの出土が目立つ（渡辺 1995）。

筆者は、こうした象徴性の高い土器形式が地域社会の儀礼の上でいかなる位置づけにあったかについて関心を抱いてきたが（中村 2008a・c）、釣手土器の問題を検討するにあたり、まず器形・装飾の起源と目される顔面把手との具体的な関係性を検討すべきと考えた。しかしなが

ら、バリエーション豊富な顔面把手自体、系統・地域性などはほとんど検討されておらず、体系的な比較検討にはなお時間を要する。そこで本稿では、伊勢原市三之宮比々多(ひびた)神社所蔵の顔面把手の再紹介を兼ねて、ごく一部の類型について装飾・分布の2点から接近を試み、顔面把手と釣手土器の関係の一端を検討していくこととしたい。

1. 三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手

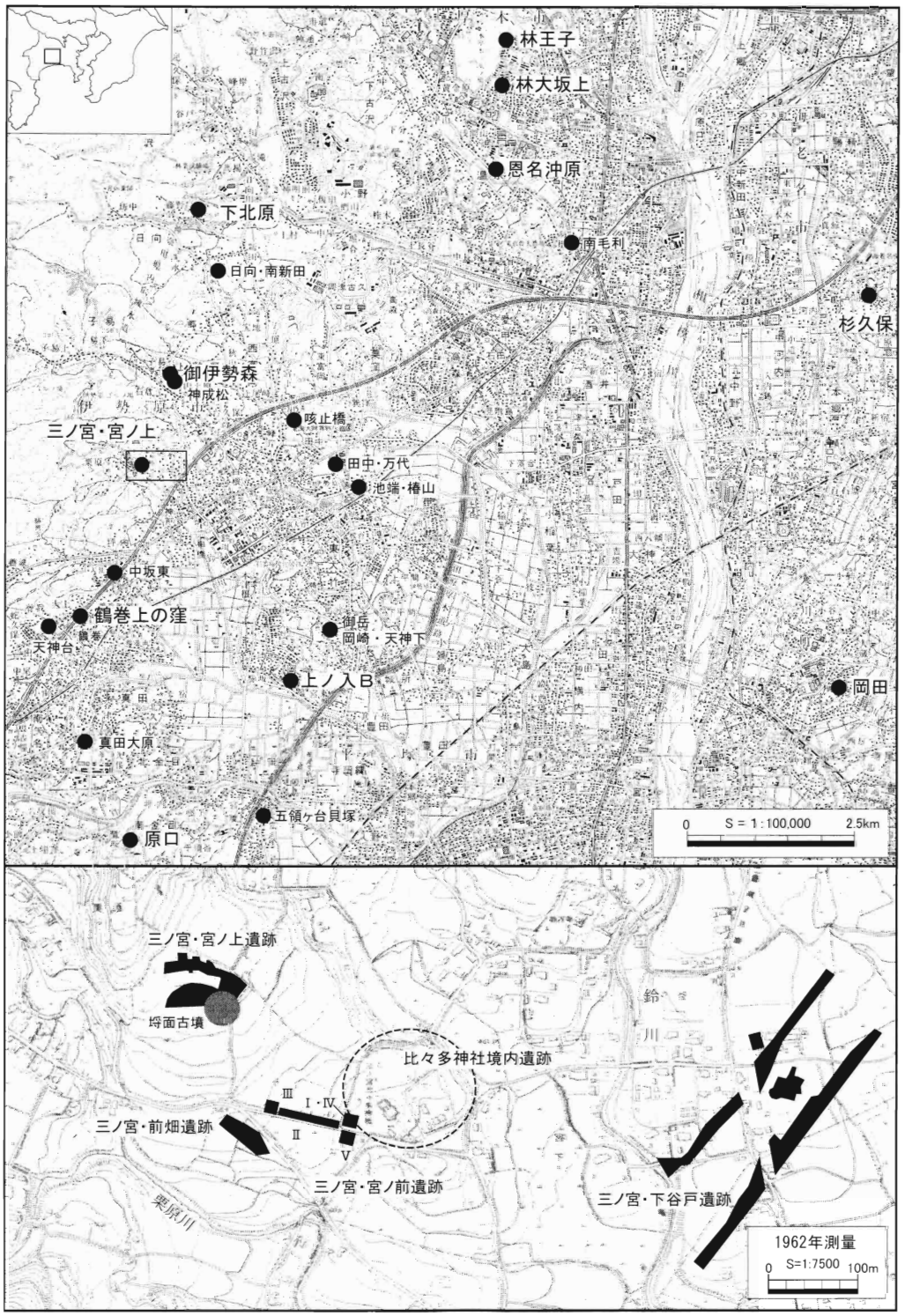
(1) 周辺の遺跡と出土地点

はじめに、神奈川県伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手（以下、本例）を検討する。「昭和七年二月比々多村三宮宮上発見品永井健之輔所蔵」と注記されているとおり、本例は比々多神社社司であった永井健之輔によって1927年に採集されたものであり、跡を継いだ永井参治によって付近の古墳出土品などとともに1953年に開設された宝物殿・三宮郷土博物館（現三之宮郷土博物館）に納められた。これまでに、帝室博物館発行の『石器時代土偶土版絵葉書集』(帝室博物館1930・神林1943(註2))、江坂輝弥の『土偶』(1960)、サントリー美術館の特別展図録『土偶と土面』(1969)、上川名昭の『中期縄文文化論』(1983)、吉本洋子・渡辺誠の「顔面装飾付土器の基礎的研究」(1994) など顔面把手を収めた代表的な論考・図集や、『伊勢原町勢誌』(伊勢原町勢誌編纂委員会1963)、『神奈川県史』(岡本1979) などにも写真が掲載されている。しかし、『土偶』を除きいずれも表面の紹介に留まっており、背面の蛇体装飾については他に『中期縄文文化論』で表面とは別ページにスケッチが示された程度で殆ど知られていない(註3)。しかしながら、本例に限らず、顔面把手の理解には表裏両面をあわせて観察することが重要であると考えるのでここに改めて実測図・写真を示して紹介を行なう。

周辺の遺跡

三之宮比々多神社は大山から続く山地の裾部、鈴川と栗原川に挟まれた段丘の先端標高60～65mの地点に鎮座する。その名のとおり相模国三の宮としての格式を誇る延喜式内社であり、神体とされる「うずらみか」と呼ばれる須恵器（県重文）、関東最古といわれる木造狛犬（市重文）などを伝えている。かつては一段上の段丘の埒面(らちめん)と呼ばれる地点に鎮座していたものが、天正年間に現在地に遷座したという(伊勢原市1996)。現境内およびその背後に広がる緩斜面からは現在も縄文土器（中期・後期）が採集できる。境内からは敷石住居が検出されているほか打製石斧・磨製石斧・石棒などの石器・石製品も採集され、弥生土器や須恵器、天保年間に出土した経筒などとともに比々多神社境内遺跡として知られている（伊勢原町勢誌編纂委員会1963、岡本1979、赤星1979)。

近年、境内南側の道路に沿った5箇所が三ノ宮・宮ノ前(みやのまえ)遺跡として発掘調査された(註4)。第Ⅰ・Ⅳ地点では草創期の微隆起線文土器、中期後半の竪穴住居・後期初頭の敷石住居各1軒、第Ⅱ



第１図　三之宮比々多神社の位置と周辺の遺跡

地点では配石・配石土坑各1基、第Ⅲ地点では敷石住居跡1軒・配石1基（以上、諏訪間1990)、第Ⅴ地点では後期の配石1基（立花1993）が検出されている。

また、宮ノ前遺跡第Ⅴ地点の西側約120ｍの地点では恵泉女学園園芸短期大学の実験研究棟・実習棟の建設に先立ち、三ノ宮・前畑（まえはた）遺跡として調査が行なわれ、槍先形尖頭器1点、縄文時代後期前葉～中葉の住居5件（うち敷石2軒)、加曽利B2式期の土器副葬墓を含む石棺墓9基および勝坂式～加曽利B2式の土器、ならびに弥生時代後期～古墳時代中期の住居、後期古墳の周溝などが検出された（伊勢原市教育委員会2002)。

さらに、比々多神社旧境内地として知られる標高80ｍ前後の高台には恵泉女学園短期大学建設時に銀装太刀・金銅製馬具・乳文鏡などを出土した埒面古墳が存在し（赤星1979、立花2003)、その豊富な副葬品から相武国造墓と推定されている（立花2001)。同所の近接地は近年、三ノ宮・宮ノ上（みやのうえ）遺跡として発掘調査が行なわれ、墳径40ｍという規模が判明したほか、縄文時代中期中葉～末の住居跡12軒（うち敷石2軒)、幅4～8ｍの配石遺構、集石・屋外炉跡、弥生時代後期～古墳時代前期の住居42軒、古代以降の溝中から土坑墓1基・獣骨埋納坑1基などが検出された（林原2002・2003)。詳細は未報告であるが、同遺跡調査団の林原利明氏の教示によると、この中には井戸尻式期の住居4軒が含まれている。また、正確な位置は不明だが、この埒面では先代宮司永井参治が75cmの立石（現在郷土博物館前に移設されている）を伴う敷石住居群を発掘している（西田1976)。

なお、神社の西方約400ｍに位置する三ノ宮・下谷戸（しもやと）遺跡では東名高速道路建設時に後期中葉の敷石住居・環礫方形配石遺構（小出1967）が検出され、神社本殿裏に移築されている（市史跡)。同遺跡では東名拡幅（かながわ考古学財団2000）やコンビニエンスストア建設に先立つ立会い調査[註5]でも同時期の環礫方形配石遺構を含む敷石住居群、配石墓群などが検出されているほか、草創期の有舌尖頭器なども多数出土している。

第1図上には井戸尻式期の遺構が検出されている近隣の遺跡を示した。このうち厚木市林王子、同林大坂上、同恩名沖原、伊勢原市下北原、秦野市鶴巻上ノ窪、平塚市原口、海老名市杉久保、寒川町岡田からは顔面把手が出土している。また、伊勢原市御伊勢森、岡田からは釣手土器（後述)、林王子と平塚市上ノ入Ｂからは人体装飾付有孔鍔付土器が出土している。

出土地点の検討

本例は、県史などで「比々多神社境内遺跡」出土品として知られてきたが具体的にはどの地点を指すのであろうか。手掛かりは過去の調査記録にある。

大場磐雄は研究日誌『楽石雑筆』の1936年11月29日条に比々多神社を訪れた際の記録として「(1）石器時代遺品　（イ）顔面把手二個、比々多村三の宮小字宮の上発見、一個は厚手式の普通のもの、二は小形なれど上に凹部ありて型式を異にするものなり、珍物というべし」と記しており（大場1976：300頁)、当時撮影したガラス乾板2枚が残されている（國學院大學日本

文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト 2005：ob0925・0926、第 3 図-2)。

また、神奈川県立埋蔵文化財センター所蔵の赤星直忠の研究資料（通称：赤星ノート）にもいくつかの資料に本例の記載が認められる（神奈川県立埋蔵文化財センター 1997：整理番号 15029・15047・15065・15073)。神奈川県による大山総合調査[註6]に伴う伊勢原町内の遺跡・遺物調査の一環として当時の宮司である永井参治から聞き取って記録されたものと考えられる。いずれも顔面把手の出土地を神社現境内と区別し、「旧境内」「宮上」と記している。

注記や大場・赤星の記録にある「宮上」「宮の上」の小字は現境内を含む緩斜面から、一段上がった埒面古墳近辺までを範囲とし、どちらも勝坂式土器の出土が知られている。さらに細かい地点を特定する必要があるが、赤星ノート 15029 に「旧境内　本殿あと　手づくね　模造形　冠塚　ラチメン　顔面把手など」と埒面古墳周辺であることが示唆されているほか、遺跡分布図（15050）でも「宮上」は神社北西の埒面の位置に点が打たれている（第 3 図-3)。このことから、本例は埒面古墳に近接する縄文時代中期集落の一角から出土していたと判断することができよう。同所は背後に大山を、正面に相模平野を見晴らす景勝の地である。なお、本稿では近年の調査との混同を避けるため、当面比々多神社所蔵例として記述していくこととする。

（2）顔面把手・蛇体装飾の観察（第 2 図・第 3 図）

本例は高さ 16cm・幅 15cm で、土器器体の口縁部以下約 6cm が遺存しており、土器本体の形状を推定することが可能である。口縁部は内湾し、外面は口縁部直下から縄文（直前段多条の RL）が施されている。これらの特徴から中山真治（2000）の分類によるＡ１類に属するものと判断できる。器体の全容が判明する類例としては八王子市犬目中原遺跡（第 3 図-4:渡辺 1963）があげられよう。

胎土は緻密で 0.2 ～ 0.5mm 程度の黒色粒子、長石、石英が混在する。まず口縁部をつくり、その上に球胴の顔面・後頭部を置く。次いで、頂部および左右の頭髪部（以下、部分名称は中村 1973 による)・耳部を接合していく。これは、頂部および左の頭髪部（本稿での左右は観察者側からの視点による）が顔面との間で破損していることからも明らかである。なお、頂部背面は眼鏡状突起を形成する。さらに背面に横位の隆帯を添付し、それに直交するように蛇体装飾を添付し、下部の眼鏡状突起に接続。さらにその下に隆帯を垂下させる。器面には、内外面ともに丁寧なミガキ（細い工具痕を残す）が施される。焼成は良好で、顔面・背面は極赤褐色（2.5YR2/3)、器体内面は赤褐色～にぶい赤褐色（2.5YR3/3 ～ 3/4）と、全体的に赤褐色を呈し、一部ににぶい褐色（7.5YR6/4）の部分がある。

表　面

顔面部の高さは 6.5cm、幅 7.3cm で、頭髪部を含めると高さ 10.0cm、幅 13.6cm である。顔面

は半球状に突出しており、器体および頭髪部との接合部には工具でなぞった痕が確認される。眉はその上部を削りだすことによって成形されており、両眉の中央に粘土の貼付による鼻が位置する。鼻孔は刺突による。その下部には沈線によって人中が描かれる。目は典型的なアーモンド形に、口は四角く粘土板を切り込んで形づくられている。但し、目の角度が水平に近いのは本例の特徴であろう。なお、側面図で窺えるように顔面はやや上方を向いている。

頭頂部には径約1cmの孔が貫通しており、背面の眼鏡状突起に接続している。円孔の周囲には1条の沈線がめぐる。頭髪部右側では波状の外形に従って、3つの三叉文が連続して施される。これらの三叉文部分は特に深く刻み込まれている。頭頂部円孔・顔面・耳部円孔と一体となって3つの玉抱き三叉文を形づくっているのであろう。これに対し左側上半は欠損しているが、頭頂部脇の三叉文は僅かに確認できる。下部には耳部円孔の上部に沈線による円文とそれを囲む区画文が見える。右側では耳部円孔の上がすぐに波状を呈するのに対し、右側にはそれが認められないことから、頭髪部は左右非対称であった可能性が高い。

背　面

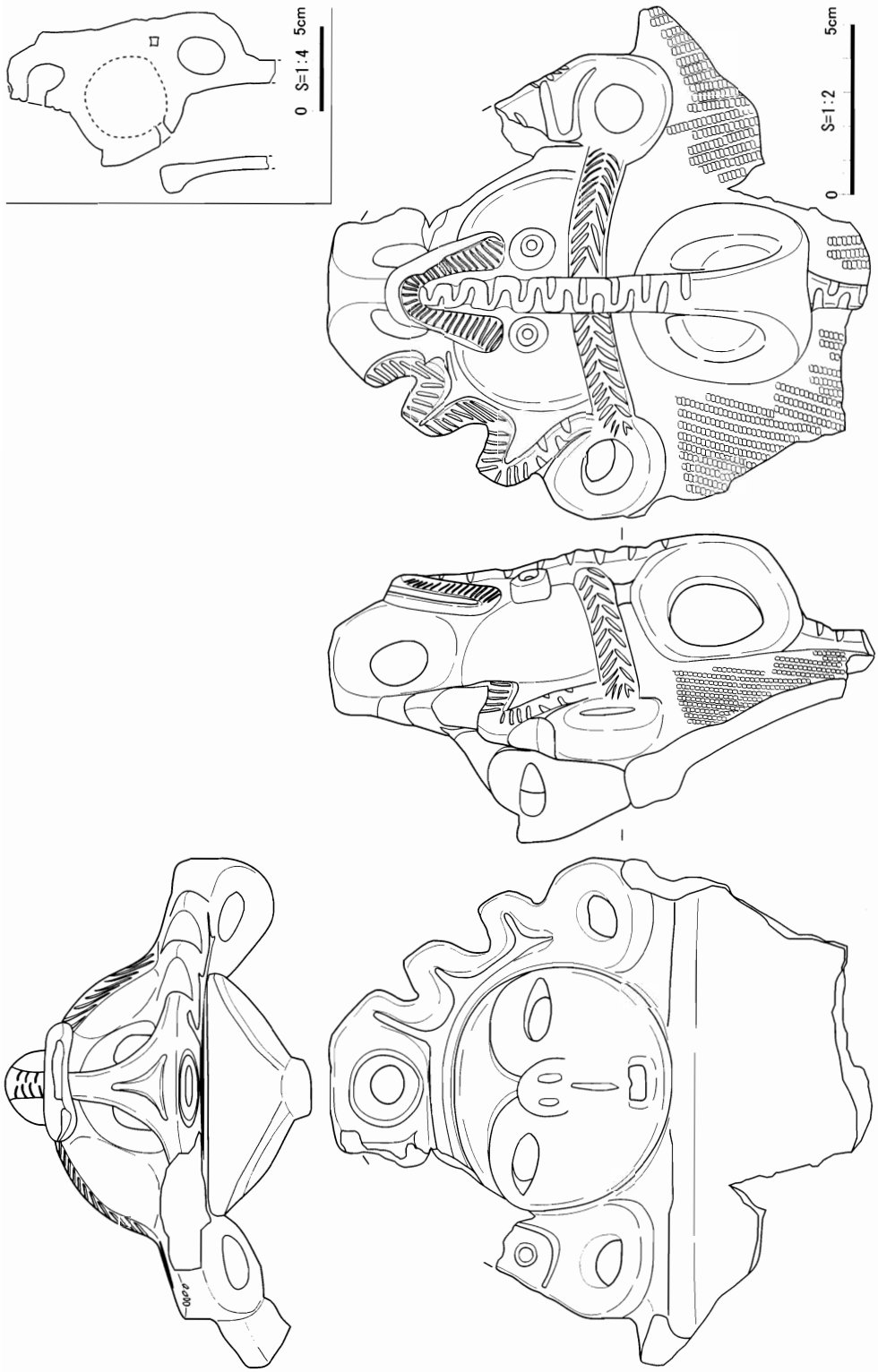
半球状の盛り上がりが形づくられ、その上に頂部の眼鏡状突起が形成される。粘土板と2本の隆帯を組み合わせることで、上面から見ると三角形のくぼみが生じるが、これを丁寧に三叉文として加工している。

中段には、左右の耳部円孔を結ぶ形で隆帯が貼られ、綾杉状の刻みが施される。蛇体装飾はこれらに乗っかる形で造形される。頂部眼鏡状突起の中ほどに、短沈線を充填させた「<」字状の頭部が配置され、その下に粘土紐による目を添付する。体部の隆帯は半球状の盛り上がりから横方向の隆帯を越えて、下部の眼鏡状突起に接続する。体部には交互刺突文が施されている。なお、下部の眼鏡状突起からさらに下方に交互刺突を伴う隆帯が伸びていく。

一方、左側の頭髪部裏面も、隆帯で縁取られており、蛇の頭同様の短沈線が充填され、円孔との接合部付近では交互刺突文に変わる。あるいは、江坂（1960）のいうようにこちらも蛇を表しているのかもしれない。右側は、表面同様の区画文らしい沈線が認められるもののモチーフは不明である。

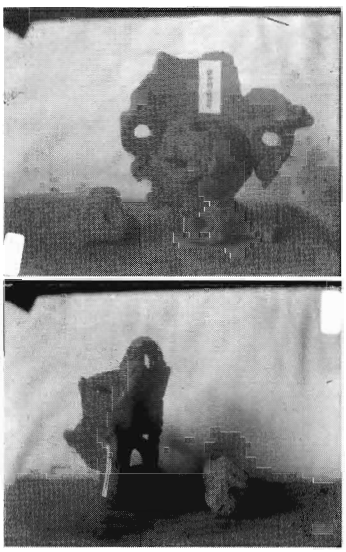
（3）帰属時期

中山真治（2000）は器形・胴部文様の判明する顔面把手35例について器形と顔面装飾を細別し、時期・地域の特徴を検討して、本例の属するA1類が関東西部に多いこと、井戸尻Ⅰ・Ⅱ式期（新地平編年9a・9b期：黒尾ほか1995）に属することを示した。また、顔面装飾の輪郭が丸みを帯びるものを2類、輪郭が蛇行し立体化したものを3類とした上で、2類を藤内Ⅱ式期古・新（8a・8b期）、3類を井戸尻Ⅲ式期（9c期）に位置づけている。本例は、その中間形態として位置づけられよう。

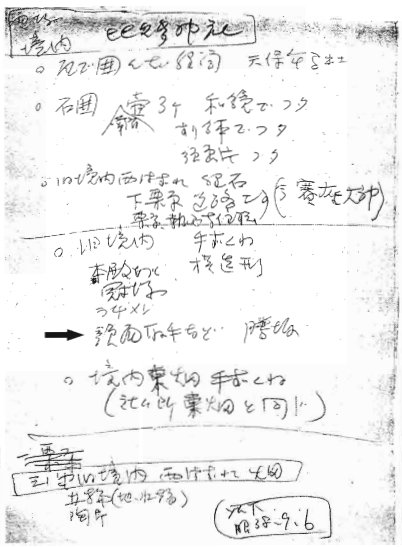


第２図　三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手

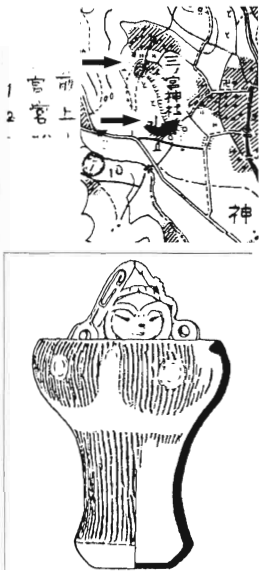
1 三之宮比々多神社所蔵蛇体装飾付顔面把手（縮尺不同）



2 大場磐雄撮影写真
（上：ob0925　下：ob0926）



3 赤星ノートの記載
（左：15029　右：15050）



4 器形参考事例　S=1:8
（八王子市犬目中原遺跡）

第 3 図　三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手（2）

次に蛇体装飾をみてみたい。本例のような頭部が「<」字を呈し、目が独立して形づくられる例は単体の蛇体把手として比較的多くの事例が知られているが（上川名 1983）、時期判断可能な器体を伴うものは少なく、岡谷市榎垣外遺跡出土の顔面把手と反対側の胴部に付された例（岡谷市教育委員会 1991）がある程度である。また、頭部に短沈線が施される例は他に例を見ないようである。中山真治は榎垣外例を藤内Ⅱ式新（8b 期）としているが、体部装飾に交互刺突文と綾杉状文を併用しており、交互刺突文のみの本例より先行する可能性がある。以上の点を踏まえ、本例は井戸尻式の前半段階に属するものとしておきたい。

2. 類似する装飾とその分布

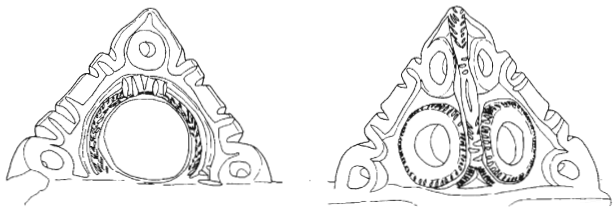
（1）顔面把手の主要モチーフ

冒頭で述べたように、顔面把手は一括して検討されることが多く、形態・装飾の分類やそれをもとにした議論は少なかった。上述した中山真治の研究は、時期差・地域差を指摘する数少ない論考である。こうした中、吉本洋子・渡辺誠（吉本 2003、吉本・渡辺 2004）は「目口鼻を欠く人面装飾」を検討し、それらが目口鼻を欠くという特徴のほか、形態や背面装飾を含めて類似性の強い複数のグループに分けられること、それらが地域でまとまることなどを指摘し、そうした一見特異な表情であっても、サイズ・分布の点で他の顔面把手との差異は認められず、むしろ普遍的な存在であったことを論じた。

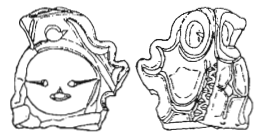
こうした研究を踏まえて、改めて表・背面の装飾を眺めてみると、いくつかの特徴的モチーフを抽出することが可能である。すなわち、表面に関しては、頭頂部の円文・三叉文・渦巻文、背面では、眼鏡状突起・蛇体装飾・円文・渦巻文・十字状文・三（二）本指文・三叉文などである。なお、蛇体装飾については本例のような明瞭なもののほか、抽象化されたものも多く、識別に困難が伴うが、永瀬史人（2006・2007）の研究を参考にここでは刻みの入った隆帯が眼鏡状突起と組み合うものは蛇体装飾として判断した。

（2）本例の類例と空間分布

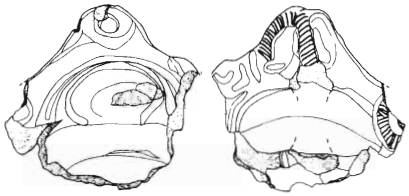
本例は、表面頭頂部は円文、背面は眼鏡状突起・垂直の蛇体装飾というモチーフの組み合わせと理解できる。では、こうした組み合わせをもつ事例は他にどの程度存在するのだろうか。報告・図録などで表裏両面を確認できる資料を検討した結果、平塚市原口遺跡、厚木市林大坂上遺跡、海老名市杉久保遺跡、横浜市上白根おもて遺跡、あきる野市二宮森腰遺跡、武蔵村山市屋敷山遺跡[註7]、甲州市釈迦堂遺跡群野呂原地区、北杜市津金御所前遺跡、富士見町藤内遺跡、岡谷市海戸遺跡の 10 例の類例を見出すことができた（第 4 図）。顔面把手全体の中では僅かな一群であるが、顔面把手を製作する際の流儀の一端は抽出し得たのではないかと考える[註8]。なお、類似した装飾をもつ土偶として、北杜市原町農業高校前遺跡の事例を挙げておきたい（第



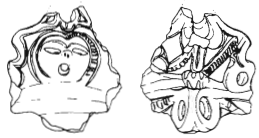
1 平塚市原口



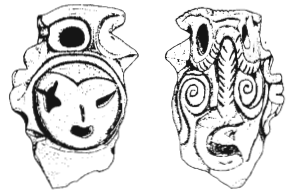
2 厚木市林大坂上



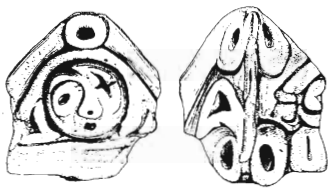
3 海老名市杉久保



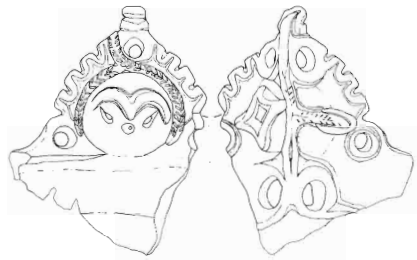
4 横浜市上白根おもて



5 あきる野市二宮森腰

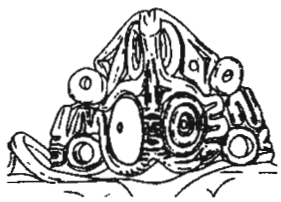


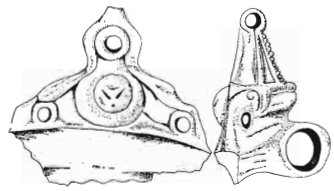
6 武蔵村山市屋敷山



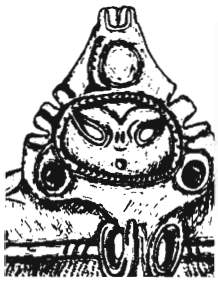
7 甲州市野呂原

8 北杜市津金御所前

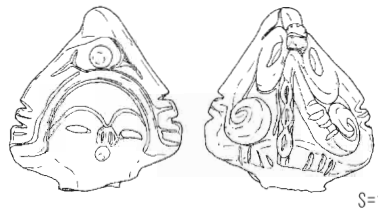




9 富士見町藤内



10 岡谷市海戸



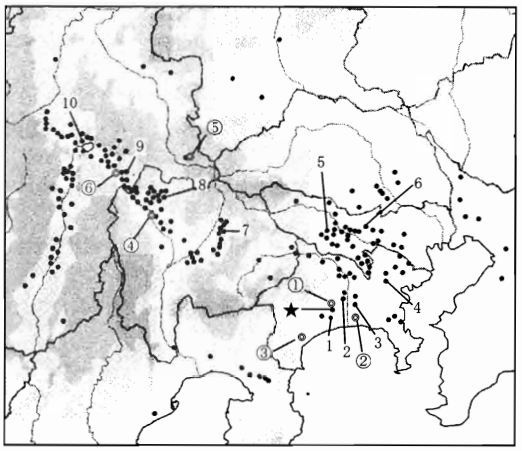
S=1:4

11 北杜市原町農業高校

第4図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手の類例（S=1:6）

4図-11)。

これらのうち二宮森腰例、屋敷山例は「片目に傷の付いた顔面把手」(江坂 1970) であり、原口例、杉久保例は「目口鼻を欠く顔面装飾」(吉本・渡辺 2004) に該当するが、ここで抽出した装飾パターンを持つ事例以外にも認められるものなので本群の特徴とは言えない。野呂原例は、頭頂部まで蛇体装飾が上がってきている点、背面左側に十字状文が施される点で本例と異なっているが、上に伸びる蛇体に直交するもう1体の蛇体の存在は、本例背面の横走する隆帯も蛇を示している可能性を示唆する。なお、林大坂上例・二宮森腰例は上面の三叉文も本例と共通する(註9)。



・★：三之宮比々多神社所蔵例
・1～9は図4の番号と共通
・①～⑥は図6の番号と共通
・背景は小松学(2008) による顔面把手出土遺跡分布図

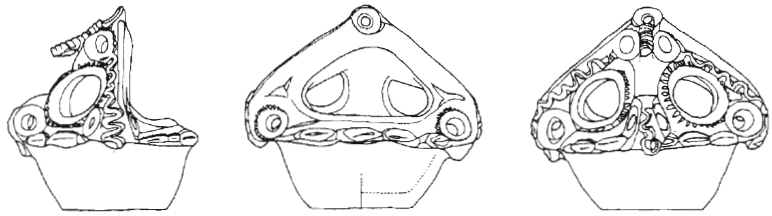
第5図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手と類似する装飾を持つ顔面把手・釣手土器の分布

これらの分布は本例を含めて、東京都・神奈川県の西部に7例、山梨県東部に1例、山梨県西部～長野県諏訪周辺に3例となる。顔面把手全体を見ると伊那谷や松本平にも多数分布するのに対し、これらの一群の分布範囲は限定的であり、分布の密度を考慮すると関東南西部に特徴的な様相を示している（第5図）(註10)。特に、本例・原口・林大坂上の3例は、分布の上でも隣接している（第1図)。

(3) 釣手土器における類似の装飾

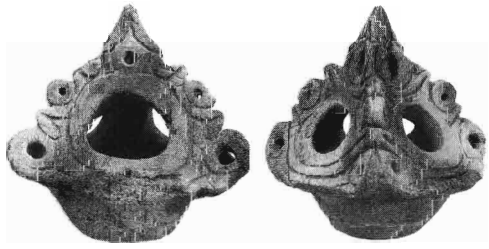
ここで目を釣手土器に転じてみたい。藤内式・井戸尻式期の釣手土器の装飾について同様の検討を行った結果、抽出されたのは伊勢原市御伊勢森遺跡例、寒川町岡田遺跡例、川上村大深山遺跡例、富士見町曽利遺跡例である（第6図)。

御伊勢森遺跡は、三ノ宮・宮ノ上遺跡の北方1.5㎞に位置し、本例と最も近い釣手土器となる。裏面が一部欠損しているものの、一見して、表面頭頂部が円文、背面は眼鏡状突起・蛇体装飾というモチーフの組み合わせを持つことを知ることができよう。隆帯は交互刺突文ではなく、刻みで装飾されているが、上下にうねる形態は蛇を示している。頭髪部は波打っていないが、背面の蛇行隆帯はその名残と考えられる。岡田遺跡も宮ノ上遺跡から相模川を隔てた南西11㎞の近距離に位置する。顔面把手の頭髪部にあたる部分に、円文が加えられていること、頭頂部円文の上に三叉文が施されているのが特徴である。後者は顔面把手の上面に見られた三叉文と関連するものであろうか。大深山遺跡例は円文が増加し、その背面に縄文が施されている。頭髪部分の円文とともに頭頂部円文上の三叉文の点でも岡田例と共通する。曽利遺跡例は既に

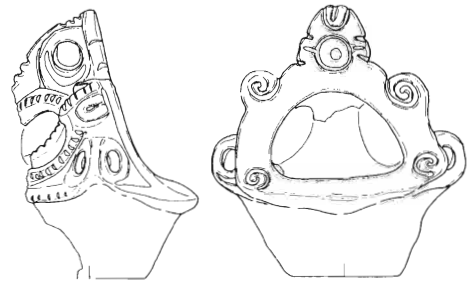


1 伊勢原市御伊勢森

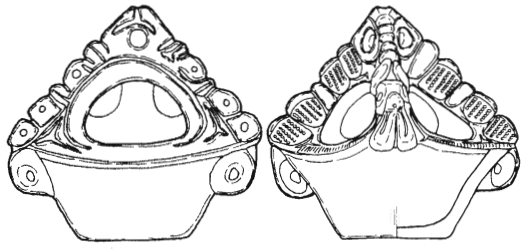
2 小田原市久野一本松



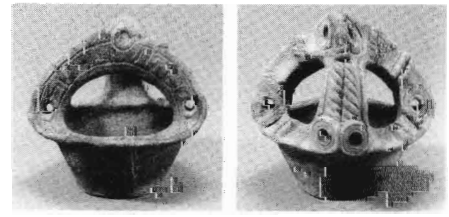
3 寒川町岡田（縮尺不同）



4 茱崎市石之坪西地区



5 川上村大深山



6 富士見町曽利（縮尺不同）

第6図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手と類似する装飾を持つ釣手土器（S=1:6）

頭髪部の波打ちが見られないが、沈線による連続三叉文は残されている。背面中央には上下の眼鏡状突起を結ぶ形で斜めに刻みを施した2本1組の隆帯があり、これまでの諸例から蛇体装飾が変化したものと推定される。同様の装飾は背面釣手部に4箇所認められ、大深山例の釣手部円文背面の装飾の性格をも示唆している。このほか、頭頂部が欠損している小田原市久野一本松遺跡例（第6図-2)、背面下部が欠損している韮崎市石之坪遺跡西地区例（同4）も同様の文様構成をとっていると推測される。これらの釣手土器は型式学的特徴と共伴資料から井戸尻式期～曽利Ⅰ式期と判断されるものである。

さて、6例の分布は神奈川県西部3例と八ヶ岳山麓3例（諏訪・南佐久・北巨摩）であり、この分布は前述の本例類似の顔面把手の分布範囲に近いあり方を示している。神奈川県においては当該期の釣手土器の全てがこの文様構成ということになる。

顔面把手・釣手土器の一部類型の分布が類似したあり方を示すことは当該地域を考える上で重要な意味を持つと思われる。このことはまた、土器の一部とそれに関わる儀礼のあり方が、地域と密接に関わって展開していたことを窺わせるのである。

展望－顔面把手と釣手土器－

本稿では、三之宮比々多神社所蔵の顔面把手の再紹介とともに、その出土地の検討を行ない、類似する装飾を持つ一群を抽出できること、その装飾の組み合わせは同じ伊勢原市内の御伊勢森遺跡出土例をはじめとする釣手土器においても認められることを確認し、両者の分布が同様のあり方を示すことを指摘した。そもそも顔面把手と釣手土器の形態上の類似については冒頭で紹介したように鳥居龍蔵（1924）によっていち早く指摘され、八幡一郎（1937)、小林公明（1991）が続いた。これに対し、具体的に装飾上の類似に言及したのは諏訪市博物館で釣手土器展を開催した田中総（1999）である。田中は同展図録において、諏訪市荒神山遺跡の顔面把手と、富士見町井戸尻遺跡の釣手土器を並べ、読者にその共通点を探すよう求めた。第7図-1・3にそれを再掲し、筆者なりの回答を示した。即ち、頭頂部・主窓頂部の三叉文（a)、頭髪部・主窓の交互刺突文と類似する文様構成（b)、裏面頂部の眼鏡状突起（c)、中央部の十字状文とそれを分割した形態の窓部（d)、その左側の三（二）本指文[註11]（e）などである。類例として厚木市恩名沖原遺跡の顔面把手と南箕輪村久保上ノ平遺跡の釣手土器を加えておきたい（第7図-2･4)。前者では、上記a・c・d・e、後者においてもd・eの特徴が看取される。

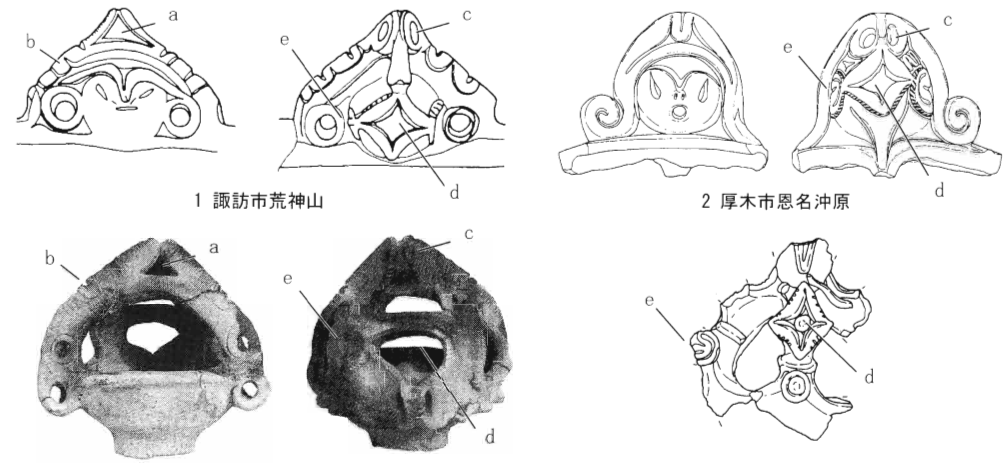
顔面把手と釣手土器で装飾の組み合わせが類似する例をいくつか挙げておこう。1つは背面の玉抱き三叉文である。もともと後頭部の玉抱き三叉文は藤内式期から続く土偶の代表的な装飾であり（今福1998)、顔面把手では数は少ないものの野呂原遺跡に目口鼻を省略したものが見られる（第7図-5)。釣手土器においては最古例とされる富士見町札沢遺跡例（藤内Ⅱ式　第7図-6）や岡谷市目切遺跡例（同7)、茅野市中ッ原遺跡例（同10)、杉並区井草八幡宮所蔵例、

三島市観音洞遺跡例（以上、井戸尻式期）など一定数の事例が粘土紐を掛け渡すことによって玉抱き三叉文を形づくっている。もう1つは、頭頂部の三叉文とその両脇の縦位の沈線文である。顔面把手では富士見町九兵衛尾根遺跡（同8）、釣手土器では同町藤内遺跡（同9）、上記中ッ原遺跡（同10）に例をみる。

縄文土器の文様・装飾が土偶と共通することは古くから指摘されてきたが、谷口康浩（1998）は土偶文様と土器文様の関係性の強弱が勝坂式・曽利式と加曽利E式とで異なっていることを指摘し、こうした関係性が土器に対する社会の指向性・認識の差異と関わるという解釈を示した。本稿で扱った釣手土器の装飾も同様の問題として位置づけることが可能である。その起源が顔面把手にあり、さらに土偶とも関係することが、装飾の組み合わせというレベルにおいて認められたのである。重要なのは、土偶・顔面把手と釣手土器の関係が一対一（器種レベル）の関係ではなく、複数の組み合わせが存在したことである。本稿ではその一端を示したに過ぎないが、三者間での具体的な関係が明らかになったことは、その性格や、釣手土器出現の経緯などを検討する上で重要な手がかりを得たものと考えられる。少なくとも今回扱った三之宮比々多神社所蔵例の類例については顔面把手・釣手土器ともに、神奈川県西部～長野県諏訪地域という範囲で重なっており、筆者の目標とする土器・地域・儀礼の関係性の把握のうち、土器と地域との関連については一定の見通しをたてることが可能となった。

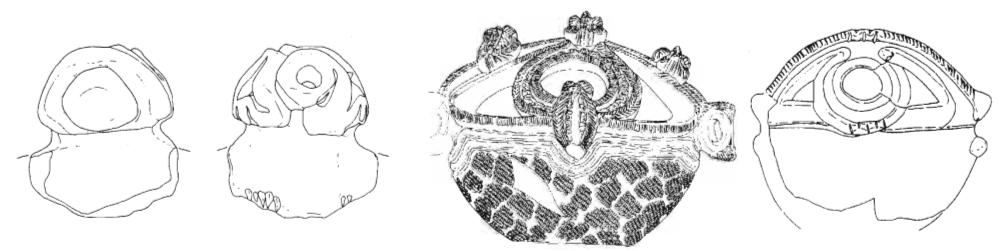
冒頭で述べたように顔面把手は器体から離れた後も単独で取り扱われた（藤森1968）。また、顔面把手に対する具体的行為として顔面の打ち欠きがある（吉本2003、吉本・渡辺2004）。その好例は本例に近接する秦野市鶴巻上ノ窪遺跡例であり顔面全面が失われている（第8図）。同じく近接する原口例や杉久保例は目口鼻を省略している（第4図-1･3）。こうした顔面把手の取り扱いを踏まえると、勝坂期の釣手土器の形態が顔面把手の顔面を打ち欠いた形態であるという鳥居龍蔵（1924）の指摘は、単に形態的な類似としてのみならず、実際の儀礼行為を踏まえた関連性として改めて評価されるべきであろう。すなわち器体から離れ顔面を打ち欠かれた球胴の顔面把手の存在が、釣手土器という新しい土器形式のモデルとなり、その装飾が受け継がれた、という推定を可能にするのである[註12]。本稿では、比々多神社所蔵例の再紹介を第一とし、近隣例をもとに論を進めた。他の顔面把手や釣手土器の関係性については稿を改めたい。

2008年2月15日～17日の3日間、伊勢原市中央公民館を会場に市内の縄文時代の精神文化に関わる資料を集めた「第21回考古資料展　縄文時代の祈り―池端・金山遺跡を考える―」が開催され筆者もそれに関わることができた（伊勢原市教育委員会2008）。そこで三之宮比々多神社所蔵の顔面把手と御伊勢森遺跡出土の釣手土器を並べて展示する機会を得た際、両者の装飾の類似に気づいたことが本稿執筆の契機である。資料の調査・公表にあたり三之宮比々多神社（永井治子氏）、三ノ宮・宮ノ上遺跡発掘調査団（林原利明氏）、伊勢原市教育委員会、並びに厚木市教育委員会、井戸尻考古館、岡谷美術考古館、神奈川県立埋蔵文化財センター、川上村教育委員会、國學院大學学術資料館、寒川町教育委員会、産業能率大学、諏訪市博物館、韮崎市教育委員会の皆様より格別の配慮を賜った。小林達雄名誉教授、谷口康浩准教授、諏訪間伸、立花実、田中総、阿部昭典、永瀬史人、徳留彰紀の各氏からは有益なご教示をいただいた。なお、本稿は筆者に与えられた平成20年度加藤建設株式会社学術奨励助成金による研究成果の一部である。記して感謝いたします。

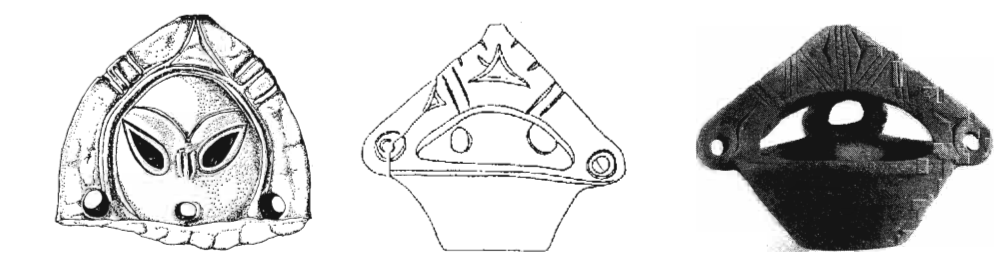


1 諏訪市荒神山　　2 厚木市恩名沖原

3 富士見町井戸尻　　4 南箕輪村久保上の平

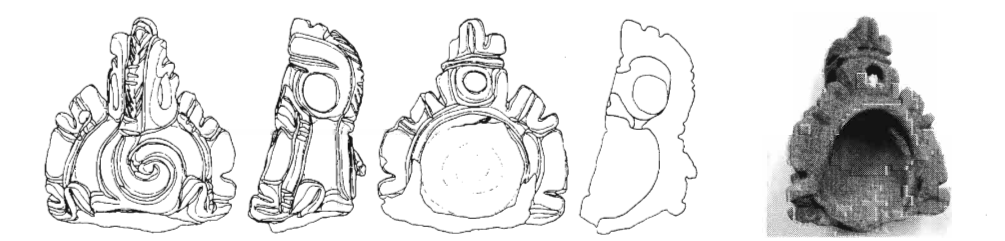


5 甲州市野呂原　　6 富士見町札沢　　7 岡谷市目切



8 富士見町九兵衛尾根　　9 富士見町藤内　　10 茅野市中ッ原

第７図　顔面把手と釣手土器の装飾パターンの類似（縮尺不同）



第８図　顔面を打ち欠かれた顔面把手（秦野市鶴巻上の窪）（S=1:6）

註

(1) 顔面把手は研究当初からの呼称であるが（江見1909、鳥居1922、江坂1960、藤森1968ほか）、近年「人面装飾付土器」（上川名1983、吉本・渡辺1994、山梨県立考古博物館2004ほか）と呼称されることが多い。しかしながら、本稿では人面装飾一般ではなく、従来概念化されてきた勝坂式後半期の一群に限定して検討するため「顔面把手」を用いる。また、土器の一部分に過ぎないものの、その部分のみ特別に扱われた可能性があること、釣手土器との形態比較においては当面把手部分のみが対象となることなどから土器器体から独立して検討することは妥当と考える。但し、顔面把手を持つ土器の性格を明らかにするためには器体の装飾・使用状況などを検討する必要があることは藤森栄一（1968）・渡辺誠（1992・1995）の研究が示すとおりである。

(2) 顔面把手12例を含むこの絵葉書集は後藤守一の企画した帝室博物館における土偶の展覧会陳列品を中心に編纂されたもので、その目録は別に神林淳雄（1943）が府県別に整理している。なお、國學院大學で所蔵する神林淳雄旧蔵資料（神林淳雄資料研究委員会2005）には本例の記録類は見られないが、長野県四つ塚例、東京都草花例、西山野例など複数の顔面把手の実測図が残されている。神林の名は従来の顔面把手研究史上には殆ど登場しないが、研究の一端は遺著『土の文化』（神林1959）に「土器の把手と土偶」として掲載されており、その中で、上記絵葉書をもとに土偶・土版の特徴を抽出した上で、顔面把手と中期の土偶の関係を課題の一つとして掲げ、顔面把手5例（中越・湯川・草花・穂坂）と土偶（広見・黒駒）を挙げて類似を指摘していることを書き添えておきたい。同様の指摘は既に上記目録にも認められる。

(3) この背面スケッチには後述する横位の隆帯上の綾杉状短沈線や頭髪部裏側の短沈線が表現されていない。

(4) 複数時期の遺跡が連続して展開するため「本来の遺跡の範囲」による区分は困難であり、近年伊勢原市では原則として、「大字」・「小字」を遺跡名とし、その小字範囲での調査順に地点名を付している。

(5) 伊勢原市教育委員会の諏訪間伸氏のご教示による。

(6) 赤星ノートによると考古部門では、大山山頂遺跡、尾根山古墳群の発掘調査と伊勢原町内出土遺物の所蔵調査が行なわれ、各発掘報告と地名表からなる報告書が予定されていた。

(7) 二宮森腰遺跡は旧称二宮神社（境内）遺跡、屋敷山遺跡は旧称村山第三小学校遺跡。本稿では吉本・渡辺（1994）の呼称に従った。

(8) このほか、頭頂部文様が渦巻文の川崎市子母口富士見台遺跡例（村田1933）や狭山市宮地遺跡例（山梨県立考古博物館2004：No.115)、横位（V字形）に蛇体装飾が施される富士見町下原遺跡例（同書：No.170）なども近似した文様構成といえる。これらの存在は、特定の装飾の組合せのみが特化していたわけではないことを物語っており、本稿で抽出した一群は、そうしたバリエーションの1種類と捉えておきたい。なお、原口・津金御所前・海戸の3例は器体を伴うが、第4図では顔面把手部のみ示した。

(9) 実測図・写真・実見等で確認できたものに限られる。

(10) 小松学（2008）の集計による顔面把手数は長野県・山梨県計219例、東京都・神奈川県計92例で、本群の割合は前者で1.8%、後者で7.6%である。

(11) 荒神山例は二本指文の付根に2本の沈線があり、背面図では三本指のように見えている。

(12) 既に小林公明（1991）は形態を根拠として、「女神の首」としての顔面把手・釣手土器の共通の性格を主張しているが、筆者は、両者の媒介としての顔面把手の打ち欠きという行為の存在を重視したい。

引用・参考文献

赤星直忠　1979「比々多神社境内遺跡」『神奈川県史』資料編20　考古　神奈川県
伊勢原市　1996「新編相模国風土記稿　三之宮村」『伊勢原市史　資料編近世2』伊勢原市（原本は1841年成立）
伊勢原市教育委員会　2002『三ノ宮・前畑遺跡』いせはらの遺跡Ⅲ
伊勢原市教育委員会　2008「第21回考古資料展　縄文時代の祈り－池端・金山遺跡を考える－」（パンフレット）http://www.city.isehara.kanagawa.jp/bunkazai/
伊勢原町勢誌編纂委員会　1963『伊勢原町勢誌』伊勢原町
今福利恵　1998「中部高地の中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平2』勉成社
江坂輝弥　1960「顔面付土器・獣面把手・顔面把手」『土偶』校倉書房
江坂輝弥　1970「顔面把手新例紹介」『月刊考古学ジャーナル』第44号
江見水蔭　1909「珍品集」『探検実記　地中の秘密』博文館
大場磐雄　1961『大場磐雄著作集』第7巻　雄山閣出版
岡本　勇　1979「比々多神社境内遺跡」『神奈川県史』資料編20　考古　神奈川県
岡谷市教育委員会　1991『榎垣外・広畑・新井南遺跡発掘調査報告書（概報）』

神奈川県立埋蔵文化財センター　1997 「寄贈資料紹介　赤星ノート」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』16
かながわ考古学財団　2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 76
上川名昭　1973 「顔面装飾についての一考察」『論叢　玉川学園女子短期大学紀要』第 3 号
上川名昭　1983 『中期縄文文化論』奈良明新社
神林淳雄　1943 「帝室博物館発行土偶土版絵葉書集に就いて」『考古学雑誌』第 33 巻第 2 号
神林淳雄　1959 『土の文化』國學院大學考古学資料室
神林淳雄資料研究委員会　2005 「資料紹介　神林淳雄資料」『上代文化』第 39 輯
黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム　縄文中期集落研究の新地平　発表要旨・資料』縄文中期集落研究グループ
小出義治　1967 「縄文後期の石造遺跡群－神奈川県伊勢原町三の宮下谷戸遺跡－」『月刊考古学ジャーナル』10 号
國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト　2005 『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ』國學院大學日本文化研究所
小林公明　1991 「火の神」『富士見町史』上巻
小林達雄　1981 「縄文土器の用途と形」『縄文土器大成 2』講談社
小林達雄　1982 「総論」『縄文文化の研究 3　縄文土器Ⅰ』雄山閣出版
小松　学　2008 「顔面把手」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
サントリー美術館　1969 『春の特別展　土偶と土面』
諏訪間伸　1990 「三ノ宮・宮ノ前遺跡」『文化財ノート』第 1 集　伊勢原市教育委員会
立花　実　1993 「三ノ宮・宮ノ前（Ⅴ）遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35
立花　実　2001 「相武国の確立」『相模国のはじまり－相模地方の豪族と相模国の成立－』平塚市博物館
立花　実　2003 「埒面古墳」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45
田中　総　1999 『縄文土器のふしぎな世界　第二章－中部高地の釣手土器展－』諏訪市博物館
谷口康浩　1998 「土偶型式の系統と土器様式－勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係－」『土偶研究の地平 2』勉成社
帝室博物館　1930 『石器時代土偶土版絵葉書集』
鳥居龍蔵　1924 「顔面把手」『諏訪史』第 1 巻　信濃教育会諏訪部会
永瀬史人　2006 「山梨県上野原遺跡出土の人面付土器と蛇体装飾－青山学院大学所蔵の縄紋時代未報告資料－」『青山考古』第 23 号
永瀬史人　2007 「勝坂式土器終末期の蛇体表現」『青山史学』第 25 号
中村耕作　2008a 「葬送儀礼における土器形式の選択と社会的カテゴリー縄文時代後期関東・中部地方の土器副葬と土器被覆葬－」『物質文化』第 85 号
中村耕作　2008b 「釣手土器」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
中村耕作　2008c 「墓壙への埋納」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
中村日出男　1973 「顔面把手（三）」『郵政考古』第 3 号
中山真治　2000 「顔面把手付土器小考－勝坂式後半の顔面装飾の付く土器について－」『東京考古』18
西田長男　1976 「神社の起源の古さ　式内比比多神社を一例に」『式内社のしおり』第 2 号
藤森栄一　1965 「釣手土器論」『月刊文化財』第 19 号
藤森栄一　1968 「顔面把手付土器論」『月刊文化財』第 61 号
藤森栄一編　1965 『井戸尻－長野県富士見町における中期縄文遺跡群の研究－』中央公論美術出版
蜂屋孝之　2008 「釣手土器の誕生」『平出博物館ノート』22
林原利明　2002・2003 「三ノ宮・宮ノ上遺跡（第 1 次）～（第 3 次）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』44、45
宮城孝之　1982 「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会
村田文夫　1993 「川崎市域出土の装飾把手付き縄文土器」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 5 集
山梨県立考古博物館　2004 『縄文の女神－人面装飾付土器の世界－』
八幡一郎　1937 「釣手土器の型式」『人類学雑誌』第 52 巻第 3 号
吉本洋子・渡辺誠　1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第 1 号
吉本洋子・渡辺誠　1999・2005 「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補・追補 2）」『日本考古学』第 8 号、第 19 号
吉本洋子・渡辺誠　2004 「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集Ⅴ』山梨県考古学協会
吉本洋子　2003 「顔を壊された女神」『史峰』第 30 号
渡辺　誠　1992 「人面把手付き土器の廃棄」『史峰』第 18 号
渡辺　誠　1995 「底を抜かれた人面装飾付土器」『梅原猛古稀記念論文集　人類の創造へ－梅原猛との交点から－』中央公論社
綿田弘実　1999 「長野県富士見町札沢遺跡の釣手土器」『長野県立歴史館研究紀要』第 5 号

綿田弘実　2002「縄文中期の釣手土器－長野県の事例－」『土器から探る縄文社会　2002年度研究集会資料集』山梨県考古学協会

挿図出典

【第1図】上：国土地理院1/50000地形図（1997年修正測量）、下：伊勢原市教育委員会提供

【第3図】1：筆者撮影、2：國學院大學学術資料館提供、3：神奈川県立埋蔵文化財センター提供、4：渡辺忠胤1963「八王子市中原遺跡調査報告」『多摩考古』第5号

【第4図】1：かながわ考古学財団2002『原口遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告第134集、2：厚木市文化財協会1987『厚木の考古資料Ⅰ』厚木市文化財調査報告書第30集　厚木市教育委員会、3：日本窯業史研究所1992『杉久保遺跡Ⅰ』、4：横浜市埋蔵文化財調査委員会1984『上白根おもて遺跡発掘調査報告、5・6：上川名1973、7：山梨県教育委員会1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集、8：須玉町1998『須玉町史　史料編1』、9：藤森編1965、10：長野県考古学会1967『海戸・安源寺』長野県考古学会研究報告書2、11：山梨県埋蔵文化財調査センター2005『原町農業高校前遺跡（第2次）』山梨県埋蔵文化財調査センター調査報告第221集　山梨県教育委員会

【第6図】1：御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会1973『神奈川県伊勢原市御伊勢森遺跡（傳上杉定正館址）の調査』産業能率大学、2：県営岡田団地内遺跡発掘調査団1993『岡田遺跡発掘調査報告書』、3：玉川文化財研究所2002『久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ』小田原市文化財調査報告書第101集　小田原市教育委員会、4：韮崎市教育委員会2001『石之坪遺跡（西地区）』、5：八幡一郎1976『大深山遺跡』川上村教育委員会、6：田中1999

【第7図】1：長野県教育委員会1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　昭和49年度　諏訪市その3』、2：恩名沖原遺跡発掘調査団2000『恩名沖原遺跡』、3：田中1999、4：南箕輪村教育委員会1997『久保上ノ平遺跡』、5：山梨県教育委員会1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集、6：綿田1999、7：岡谷市教育委員会2005『目切・清水田遺跡』郷土の文化財26、8：藤森編1965、9：宮城1982、10：茅野市教育委員会1993『中ッ原遺跡』

【第8図】図：かながわ考古学財団1998『不弓引遺跡（No.21・22）、鶴巻大椿遺跡（No.23）、鶴巻上ノ窪遺跡（No.25上）、北矢名南蛇久保遺跡（No.25下）、北矢名矢際遺跡（No.26）』かながわ考古学財団調査報告32　写真：筆者撮影

三浦半島における宮ノ台式土器の編年と様相

白石　哲也

はじめに
1. 研究略史
2. 分析の方法と視点
3. 属性の変遷過程
4. 三浦半島における宮ノ台式土器の編年
5. 本稿の成果と展望

はじめに

これまで「宮ノ台式土器」が出土する時期は、南関東地方において西日本的弥生社会の要素が定着した時期であると考えられてきた（岡本 1980）。もちろん、神奈川県中里遺跡（呉地・河合 1997）や埼玉県池上遺跡（中島 1984）といった宮ノ台期に先行する西日本的な諸要素を持つ集落も確認されている。しかし、大型環濠集落や本格的水田経営及び鉄器保有率の増加などからも、宮ノ台期がいわゆる西日本的弥生社会の定着期であるという評価は、今後も大幅には変化しないだろう。

これまで宮ノ台期の生業形態は、水田経営を中心とした生業形態と考えられてきた。しかし、現在でも漁業が盛んな神奈川県三浦半島などでは、当該期においても漁労活動が盛んであったことを示す考古学的証拠や研究が蓄積されつつある（釼持 1989・00、設楽 2005）。このような重要な成果を受けて、筆者は海蝕洞穴や貝塚の利用を通じた漁撈活動を取り上げることで、これまでの生業観に対して再考を図るつもりである。

こうした具体的な検討を進めるためには、何よりもまず詳細な時間軸が必要である。三浦半島では、これまで半島南端の中心的集落である三浦市赤坂遺跡出土土器を基に中村勉氏や諸橋千鶴子氏により編年研究が行われてきた（中村・諸橋 2001・04・06）。また、逗子市持田遺跡の岡本勇氏の考察（岡本 1975）や同市池子遺跡群における谷口肇氏の成果（谷口 1999）もある。しかし、これらの先行研究は、1遺跡内での編年であり、三浦半島全体を俯瞰した考察ではない。そこで本稿では、三浦半島全体[註1]の編年構築を試みることとした（第1図）。

1. 研究略史

ここでは、宮ノ台式土器の研究史を概観することで、現在の研究状況及び課題などの抽出を行う。宮ノ台式については、杉原荘介氏の調査（杉原 1935）以降、江藤千萬樹氏（江藤 1937・38）や神沢勇一氏（神沢 1966・68）をはじめとして、多くの研究蓄積がなされてきた。そうし

た1980年以前の研究のついては、泉谷憲俊氏によって詳細にまとめられている(泉谷1980)。そのため本稿では、1980年以降の研究を中心に取り上げる。

折本西原遺跡以前の宮ノ台式土器細分研究

宮ノ台式土器の細分研究のはじまりは、横浜市三殿台遺跡の調査（和島1968）に端を発する。その数年後には、高度経済成長のため国や企業の建設工事の増加などによって考古学的な発掘調査が以前より大幅に増加した。そのため、該期の遺跡だけでも千葉県大厩遺跡（三森・阪田1974）や同県菊間遺跡（斎木1974）及び横浜市大塚・歳勝土遺跡（武井1991）や同市上倉田遺跡（高杉1982）といった集落の全体像が分かる大規模な調査が多く行われた。そして、資料の爆発的な増加にともない細分研究の機運が高まってくることとなった。

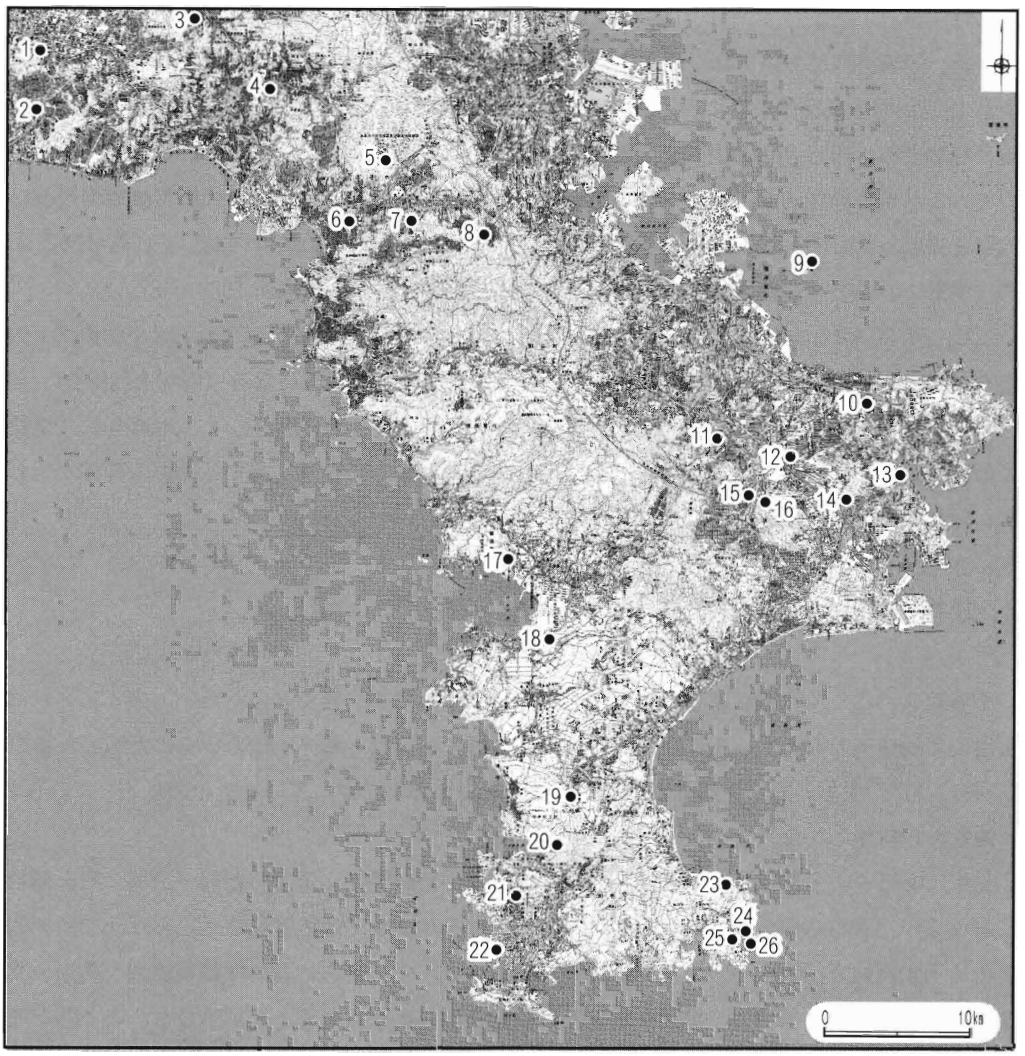
岡本勇氏は、逗子市持田遺跡（岡本1975）の調査報告において、宮ノ台式がⅠ～Ⅲ期に区分できるとの認識を示した。しかし、それらの具体的な型式学的考察を提示することはなかった。1978年には、斎木勝氏が宮ノ台式の3様相を提示している。その中で小田原式は宮ノ台式の一類型に内包されると論じた（斎木1978)。一方、熊野正也氏は杉原荘介氏の考えを踏襲して、小田原式と宮ノ台式を時期差と捉えた。そして、甕形土器の器面装飾及び器面調整から細分が可能であるとの認識を示したものの、具体的な様相把握には至らなかった（熊野1983)。

このように編年細分に関する論考が、僅かながら提出されたものの、あまり進展は見られなかった（大島1983)。こうした状況を打破したのは、石井寛氏であった。

折本西原遺跡以後の細分研究

1980年になり石井寛氏は横浜市折本西原遺跡（石井1980）の報告において、出土土器を用いて宮ノ台式土器の編年を行った。石井氏の用いた方法とその成果は、以下の通りである。その方法は、まず住居址の切りあい関係から住居址ごとの新旧をつかむ、そして、住居址の新旧関係に基づいて一括出土土器を比較して、変化の方向性を導いた。石井氏の様式論的な方法を用いた研究は、土器の実態に即した極めて精緻なものであり、現在も編年的齟齬は見られない。また、この中で石井氏は、それまで須和田式に含まれていた土器の一部を宮ノ台式の古段階に含め、宮ノ台式の型式範囲を拡張した。このように今日の宮ノ台式土器範疇についての考え方は石井論文により成立したと言える。その後1988年には、石井氏の研究成果をもとに松本完氏が『折本西原遺跡Ⅰ』(松本1988）の中で、特に甕形土器を中心として詳細な細分を提示された。

1990年代になると、安藤広道氏が石井氏の検討を基盤として、その成果を下末吉台地一帯に広げて宮ノ台式土器の変遷を示した（安藤1990)。その後、安藤氏は1996年に下末吉台地・相模湾沿岸・市原台地・印旛沼周辺・大宮台地・三浦半島を下末吉台地の時期区分を編年の基準として時間的対応関係をまとめたことで、宮ノ台式の全体像を示した(安藤1996)。こうした一



1. 手広八反目遺跡　2. 津西白山遺跡　3. 台山藤源治遺跡　4. 大倉南御門遺跡　5. 池子遺跡群
6. 被露山C遺跡　7. 持田遺跡　8. 沼間台遺跡　9. 猿島洞穴遺跡　10. 矢ノ津坂遺跡　11. 蛭畑遺跡
12. 小橋遺跡　13. 鴨居上ノ台遺跡　14. 吉井城山遺跡　15. 佐原泉遺跡　16. 佐原城跡遺跡
17. 高原遺跡　18. 大木東根遺跡　19. 赤坂遺跡　20. 藤ヶ崎遺跡　21. 海外洞穴1・3遺跡
22. 西ノ浜洞穴　23. 雨崎洞穴　24. 間口東洞穴　25. 間口洞穴　26. 大浦山洞穴

第１図　三浦半島における主な中期後半の遺跡

連の研究は、宮ノ台式細分研究における一つの到達点として認識され、その後の遺跡報告や宮ノ台式関連の論考においても安藤論文に依拠したものが多く見られるようになる。

一方で、こうした安藤論文に対して秦野市砂田台遺跡を調査した宍戸信悟氏は、砂田台遺跡出土土器をもとに相模湾沿岸地域の宮ノ台式土器を５期に区分している（宍戸 1992）。さらに、黒沢浩氏が同地域において土器を東海地方の土器との関係から宮ノ台式土器の成立の問題に言

及した（黒沢 1993)。

また、千葉県域においては、柿沼修平氏や小倉淳一氏の大崎台遺跡の研究（柿沼 1984・1991・小倉 1993）や小高春雄氏による道庭遺跡・滝ノ口向台遺跡の検討（1983・1993）が行われている。なかでも、1996 年の小倉氏による東京湾東岸地域の細分案は、安藤氏の方法を応用したもので、これまで具体的な様相が不明であった千葉県域ではじめて、宮ノ台式の具体的変遷及び内容を提示したものとして評価できる。こうした安藤氏や小倉氏の論考に対して、黒沢浩氏は、房総半島において一遺跡単位での検討をもとに編年構築を行った（黒沢 1997・98)。

こうした 90 年代の細分を中心とした研究に対して、鈴木正博氏に代表される「小田原式」の再考と宮ノ台式の定義に関して疑義を投じる論考が提出されるようになる（飯塚 1993・94、黒沢 1996、鈴木 2000・03、小倉 2005)。こうした研究課題をまとめる形として、2004 年に「南関東の弥生土器」と題したシンポジウムが開催され、現状の宮ノ台式に関する問題の確認が行われ、以後の研究の方向性が明らかにされた。

2. 分析の方法

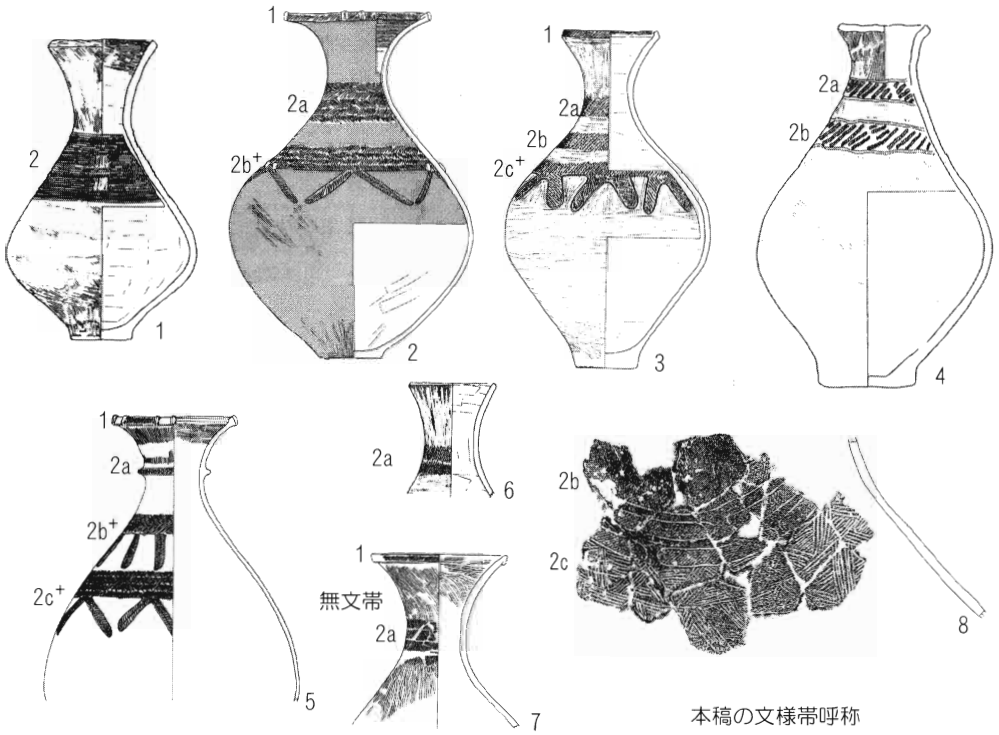
それでは、ここで本稿における宮ノ台式の分析について述べることにしたい。まず宮ノ台式土器の器種組成であるが、主に壺形土器・甕形土器・広口壺・高杯・鉢の５つに大別できる[註2]。特に、壺形土器と甕形土器は出土量が多く分析対象として適している。そのため、これら 2 器種を分析対象とした。

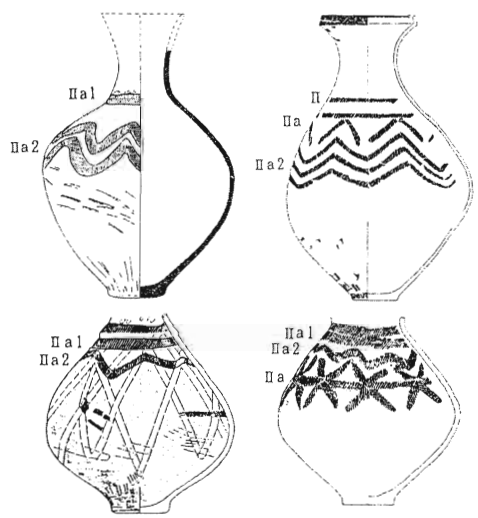
分析にあたり、石井氏及び安藤氏と同様に、土器の同時期性に留意した同一遺構、同一層位における一括資料の集成を行う[註3]。そして、これらの一括資料を相互に比較した上で時間的変化を示す属性を抽出する。時間的変化を示す属性は、先行研究において器種構成、器形、文様帯、文様構成、文様要素、器面調整などの諸属性取り上げられてきた。筆者も、こうした先行研究に倣い、分析をおこなう。ただし、時間的まとまりについては、文様帯の変化を基準とした。

壺形土器の分析視点と方法（第 2 図）

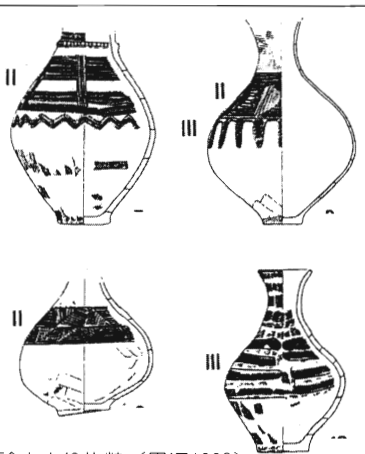
壺形土器の時間的属性として、器面調整と文様帯及び文様要素・文様構図などを取り上げる。まず器面調整では、ナデ・刷毛目・ミガキといった 3 つの属性が見出せる。また、調整ではないが「赤彩」の有無も重要な型式学的要素として分析対象とした。

宮ノ台式における壺形土器の文様帯の検討に関しては、これまでにも様々な検討が行われてきた（犬木 1992、黒沢 1996、鈴木 2000・01・05、安藤 2002・05)。しかし、その理解は研究者によって異なる。まず、犬木努氏は「文様帯」を使用せず、「施文帯」という用語を用いて、宮ノ台式から後期土器への変化を結紐文から幾何学文に至る体部施文帯Ⅱａの変遷を下に説明し

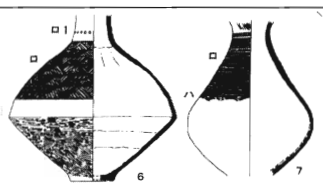




犬木論文より抜粋（犬木1992）



黒沢論文より抜粋（黒沢1998）



安藤論文より抜粋（安藤2004）

第２図　文様帯構成図（縮尺不同）

た（犬木 1992)。また、黒沢浩氏は宮ノ台式の成立前後の時期に関して、文様帯という用語については問題があることを指摘しつつも、「ここで扱うのは中期のごく限られた時期と地域のもの」とすることで文様帯を用いた検討を行っている。そして、「中里式」の文様帯から宮ノ台式の文様帯成立までを論じた（黒沢 1996)。こうした検討に対して、安藤広道氏は自身の「仮称イロハ文様帯」を用いて、白岩式の文様帯が有東式・宮ノ台式の成立・展開に重要な役割を果たしたことを述べた (安藤 2004)。また、鈴木正博氏は山内清男博士の文様帯系統論に立脚し、「小田原型文様帯」を設定することで「小田原式土器」に言及し、また「宮ノ台型文様帯」の成立についても考察を加えている（鈴木 2000・01・04)。ここでは、こうした先行研究に学びつつ、宮ノ台式土器の成立及び後期との繋がりを検討するための属性として「文様帯」を分析対象とした[註4]。

本稿では、文様帯区分について以下のように捉え名称を付す（第2図）。まず、壺形土器の口縁部端面および外面を1文様帯と呼ぶ。次に、口縁直下の頸部から胴部最大径までを2文様帯と呼び、胴部最大径下部を3文様帯と呼ぶ。ただし、宮ノ台式では3文様帯は認められない。2文様帯は、いくつかの文様帯に分割されることがある。分割された文様帯は、上から2a、2b、2c…とする。また、2文様帯においては、主文様帯に対して結紐文帯など付加的な文様を構成するものがある。こうした付加的なものは、主文様帯に対する付加文様帯として「＋」と表記する (2・3・5)。このように文様帯概念を規定した上で、文様帯構造を把握していく。具体的には、「1+2a」、「1 ＋ 2a ＋ 2b+」のように表記する。なお、文様が施文されない部位は「無文帯」と呼び、文様帯構造を表記する場合には基本的に除外する。

また、文様要素・文様構成については、先行研究より古段階には櫛描文が多く、新しい段階になると文様が簡略化され、羽状縄文が出現・定着することが指摘されている。また、櫛描文の減退とともに縄文が増加することなども、すでに確認されている。本稿も、こうした先行研究に従って論じていく。

壺形土器においては、上記の分析の視点・方法をもとに各土器群の属性を抽出し、比較検討を行った上で考察を行っていくものである。

甕形土器の分析視点と方法

甕形土器では、器面調整と器面装飾及び口唇部装飾の3つの属性抽出が可能である。まず、器面調整では、胴部外面及び内面に刷毛目調整、ナデ調整とミガキ調整が確認できる。次に、器面装飾においては口唇部装飾と胴部装飾の2種が認められる。さらに、口唇部装飾では有文と無文に分類が可能となり、有文では指頭押捺と刷毛状工具もしくはヘラによる刻み、縄文の4種に分類が可能である。そして、胴部器面装飾では、ヘラ及び櫛による羽状文の2種が確認できる。なお口唇部内面には、櫛目鎖状文が形成される土器が存在するため、櫛目鎖縄文もまた考察対象となる。

以上、甕形土器の属性分析は、上述した属性を中心に検討を行う。

3. 各属性の変遷過程

(1) 壺形土器における各属性の変遷過程

【文様帯構成の変遷過程】

ここでは文様帯及び文様要素の考察を行う。宮ノ台式土器は、これまで先行研究において古相の土器ほど多くの櫛描文が施文されることが指摘されてきた（石井 1980・松本 1988)。

鎌倉市手広八反目遺跡 15 住居址出土土器（第 3 図）は、櫛描文施文率が非常に高く、東海地方西部の土器との関連性を強く想起させる土器群として、これまでも分析対象とされてきた経緯がある（安藤 1990ab・91 黒沢 1993)。安藤氏は、遠江に分布する白岩式古段階の土器群（第 12 図 7 ～ 8) と手広八反目遺跡の土器が文様帯・文様構成レベルにおいて類似することを挙げ、白岩式土器が宮ノ台式土器に直接的な影響を与えたと述べている。一方、黒沢氏は瓜郷中層第 1 様式の成立によって、櫛描文が東に拡散してく中で白岩式・有東式・宮ノ台式に浸透したという見解を示した（黒沢 1993)。両氏の見解には、いくつかの点で相違がみられるが東海地方の影響のもとに宮ノ台式土器の櫛描文が成立したという点では一致を見る。

宮ノ台式土器の櫛描文が東海地方の直接的な影響を受けて成立したという見解は、上述したように明らかである。本稿では、このように成立した宮ノ台式土器が、三浦半島において、どのように変化していったのかを検討する。この問題を考察する上で、手広八反目遺跡と逗子市池子遺跡群旧河道出土土器（第 8 図 3 ～ 6）が重要な手がかりとなる。両遺跡で出土する櫛描文土器は、文様帯構成では基本的に「1 ＋ 2」の構成を取る土器であり、2 文様帯はすべて櫛描文で構成される。成立時の宮ノ台式では、東海的な櫛描文を多く含み、文様施文幅も広く文様要素も基本的に櫛描文施文のみとなる。

次に、安藤氏によって Sa Ⅲ期とされた持田遺跡池状遺構（第 4 図 10 ～ 20) や近年調査された佐原城跡遺跡 Y3 住・Y7 住出土土器（第 4 図 1 ～ 9) においては、文様施文幅は広くとるが 2 文様帯内が分帯化したものとなる。櫛描文では、振幅の広いものが認められる（14、第 8 図 19・20）また、持田遺跡では縄文施文を中心とした在地系土器（10・11・16）が手広八反目遺跡より増加する。しかし、縄文主体の土器において帯縄文＋結紐文が主体的な点では同様である。

また、谷口肇氏によって池子Ⅲ期に比定された池子遺跡群旧河道 C-XI-55･65 グリッド出土土器（以下「65G」と省略する）（第 5 図）では櫛描文の比率が減少し、在地系土器が主体となっている。また、文様帯の分帯化が持田遺跡などよりも顕著になり、在地の 2 b ＋を持つ土器 (7･9・10・11) が多くなる。そして、縄文主体の土器が顕著となったことを受けて、結紐文を施文がさらに目立つようになる。また、谷口氏の指摘（谷口 1999) にもあるように羽状縄文が認め

られるようになる (8) が、これを羽状縄文の本格化とは認めがたい。また、65G では結紐文はこれまでの沈線で区画されたもの (7・9・11) のみの構成から区画しないもの (10) が出現する。

赤坂遺跡 2 住（第 6 図 1）7 号住 (第 6 図 2 ～ 16) 及び鴨居上ノ台出土土器（大 8 図 43・44）では、櫛描文施文では、振幅の狭い波状文もしくは幅の狭い擬流水文が施される程度となる。そして、羽状縄文が本格化する（2・3・7)。また、文様も簡略化が進む。新たな要素としては、結節文が認められる (4) ようになるが、客体的である[注5]。

矢ノ津坂遺跡 14・15・17 住（第 7 図 8 ～ 16・20・21）や佐原泉遺跡 32B 住（第 7 図 1 ～ 5）では、文様帯構造に変容が認められ、２系統に分離される。一方は、1 帯頸部集中文様帯 (6・16) である。他方は、2 帯文様帯 (4・12・20・23) となる。これは、文様の簡略化と複雑化の 2 系統の動きと考えられる[註6]。

以上の考察から、三浦半島における宮ノ台式の文様帯構成の変遷過程が想定できる（第 9 図)。まず上記で考察したように、手広八反目遺跡や池子遺跡群旧河道では「1+ 無文帯＋ 2」となり 2 文様帯が幅広の構成となる。この構成は、東海地方の土器群と同様の構成をとる。また縄文主体の土器にも、頸部無文帯などの東海型文様帯構成の影響が認められる (5)。

そして、持田遺跡出土土器に見られるように、それまで 2 帯のみの幅広 1 帯構成を取っていたものが 2 文様帯内において文帯化を示すようになる。そして、分帯化と連動するように櫛描文の施文比率は減少し、櫛描文から変容した縄文を主体とした土器（2・6）が増加していく。その後、文様の簡略化の動きが強くなり文様帯は、2b 帯が消失するが 2a 文様帯 1 帯構成のもの（4）と 2a+2c 帯２帯構成（8）の２系統に分かれていく。また、1 帯構成のものは頸部羽状縄文施文が主体文様となり、２帯構成のものは 2a+2c+ 構成となる。特に、２帯構成の 2c+ 帯では結紐文を持つものが多く、さらに佐原泉遺跡 32B 住 (第 7 図 4) や矢ノ津坂遺跡 17 住 (12) のように結紐文から変化した沈線で区画し，縄文を充填した波状文をもつ個体が認められるようになる。これは、久ヶ原式に見られる 2c 帯下部に施文される山形文の祖形となるもの (犬木 1992) であり、こうした様相は宮ノ台式土器の最新相を示していると考えられる。

【器面調整の変遷過程】

手広八反目遺跡・持田遺跡池状遺構・佐原城跡遺跡 Y3 住・Y'7 住（第 4 図 1 ～ 9）では、刷毛目を明瞭に残す土器が多く認められる（第 3 図 12・13、第 4 図 2・3・11・13・21)。刷毛目を明瞭に残す土器については、安藤氏は『ハケ目を器面に残すという特徴は、須和田式土器に見られる条痕の系統とは考え難く、この点に関しても白岩式土器の影響を読み取ることができる』(安藤 1990) と述べている。

次に池子旧河道 65G では、文様帯の分帯化が顕著になると同時に文様の施文率が減少する。それと、並行するように器面調整はより丁寧になり、ミガキを行う土器が増加する（第 5 図 6・8 ～ 11)。また、赤彩された土器が増加する。

赤坂遺跡７住・２住では、刷毛目が明瞭に認められる土器は少なく、ほぼナデ消されるようになる。そして、ミガキを行うものが顕著になり赤彩された土器が大幅に増加する（第６図1・2・3・6～9)。このことに連動して、文様の簡略化がより顕著となる。

さらに、佐原泉32Ｂ住や矢ノ津坂遺跡では、ほぼ全ての土器でミガキを行い、多くは赤彩される（第７図)。この段階になると、器面調整においてもかなり後期的な様相を呈するようになる。

このように、刷毛目は文様の衰退とともに減少し、丁寧なミガキが増加するにつれ赤彩された土器の増加するようになる。こうした傾向は、宮ノ台式土器全体でほぼ同様の傾向をとる。

(2)　甕形土器の各属性の変遷過程

宮ノ台式の甕形土器は、装飾性が極めて低い。そのため甕形土器の変遷過程を追うためには僅かに残された口唇部及び器面の装飾、器面調整からの考察が重要となる。以下ではそれらの変遷過程を詳細に検討することとする。

【口唇部及び器面装飾の変遷過程】

まず、口唇部装飾について考察する。分析の方法でも述べたように、口唇部における装飾は、第一に有文と無文に区分される。そして、有文土器は指頭押捺・ヘラ状工具による刻み・刷毛状工具による刻み・縄文施文が認められる。

石井氏は「深鉢口縁部の装飾は刻み目の優勢から指頭押捺の圧倒的優勢への比率上の変化がある。」（石井 1980）との指摘している。また、安藤氏はこれを受けて折本西原Ｉ期以前にあたる手広八反目遺跡出土土器にも石井が指摘した傾向が当てはまることを指摘した（安藤 1990)。

この傾向は、三浦半島でもほぼ同様の傾向が読み取れる。三浦半島では、手広八反目遺跡（第３図17～19・20・22）に見られる刻み目が施された土器は、佐原城跡遺跡Y3住・持田遺跡池状遺構（第４図7・8・19）においても、指頭押捺のもの（第４図18・20、第８図25）と同程度の出土比率が認められる。池子遺跡群旧河道65G出土土器・赤坂遺跡８次７住でも、指頭押捺されたものに比べ、量的には減少するものの継続的に出土している。ただし、矢ノ津坂遺跡（第７図）などでは、すべて指頭押捺のものとなる。

また、口唇部装飾の系譜問題については、松本完氏により検討が行われている。松本氏は、宮ノ台式に先行する子ノ神遺跡や王子ノ台遺跡の検討から「須和田式土器→宮ノ台式土器」を前提とした単系内在的変化を否定した。そして、内在的変化及び他地域からの技術移入を想定し、いくつかの系統から一本化されると考察した（松本 1988)。三宅島坊田・大里東遺跡出土土器（第11図10・11・17・18）は、示唆的であろう。

また、口唇部内面においては櫛目鎖状文が形成されるものが存在する。これは、羽状文とともに宮ノ台式の古段階に施されるもので、新段階には消失していく要素であることが確認され

ている（安藤1990）。今回、三浦半島では良好な資料としては手広八反目遺跡（第3図14～18）や蛭畑遺跡がある。両遺跡以外では、赤坂遺跡や池子遺跡群、大倉幕府遺跡群においても破片資料ではあるが出土している。特に、赤坂遺跡では住居址覆土中からかなりの出土量が認められる。なお、諸戸邸内遺跡においては遺構不明だが、櫛描波状文を施した土器が出土している。

次に、比較的時期差がつかみ易いとされる器面装飾について検討を行う。神奈川県内においては、古相段階で羽状文が施文された土器は消失されることが確認されている（安藤1990･91）。三浦半島においても、基本的には同様である。三浦半島では、手広八反目遺跡に後出する佐原城跡遺跡Y10住や持田遺跡池状遺構及び溝状遺構でも羽状文を施した甕形土器が一般的に認められる（第3図14～16、第4図7・18、第8図23・25）。しかし、鴨居上ノ台遺跡100住や赤坂遺跡8次7号住でも、破片資料だが羽状文を残した土器が検出されており、僅かではあるが新段階にも散見される(註7)。これは、宮ノ台最終末まで羽状文が存続する房総の影響が、県内の他地域に比べ大きいためと考えられる。

池子旧河道65Gでは、例外が除いて基本的には文様が施されない。そして、前段階に多く認められる刷毛目甕が盛行する（第5図13～18・20）。また、赤坂遺跡8次7住で見られるように刷毛目をナデ消した土器が多くなる（第6図11・12・14～16）。矢ノ津坂遺跡11住・14住（第7図11・14・15）では、刷毛目をナデ消したものが大勢を占めるようになる。これは、久ヶ原式への移行を示していると考えられる。

4. 三浦半島における宮ノ台式土器の編年

ここで、上述した変遷過程の総括を行い、三浦半島における宮ノ台式土器を段階ごとに細分する。三浦半島における宮ノ台式土器は、4段階6細分される（第8図）。以下では、各段階における特徴を詳述する。また、厳密には宮ノ台式ではないが、その直前段階の土器群についても触れておきたい。

宮ノ台直前段階（第11図）

三浦半島で、この時期の土器を出土しているのは、池子遺跡群旧河道（1～4）・雨崎洞穴・間口洞穴の土器群があたる。また、周辺地域では房総半島の仮屋塚遺跡（第10図）や常代、菊間遺跡などで確認されている。また三宅島坊田遺跡（5～11）及び大里東遺跡（12～18）、厚木市子ノ神遺跡などでも認められる。特に、離島ではあるが三宅島大里東遺跡の土器群はその中でも最古に位置づけられるだろう。

これらの土器群は、宮ノ台式土器の範疇に含めることはできない。なぜなら、筆者は宮ノ台式土器の成立について「櫛描文と刷毛目の定着」が重要な条件と考えているからである。また、

この段階の壺形土器は1+2+3文様帯を形成し、1文様帯から2及び3文様帯へと連続した文様帯構造となり複雑な文様構成もつものが存在する。これは、前代の中里式（第13図）の影響と考えられ、東海地方西部の文様帯（題12図）の影響を受けて成立した宮ノ台式土器の文様帯とは異なる。この段階では、中里式の文様帯構成から完全には、脱却しておらず中里式の文様帯構成との混在が認められるのである。したがって、この段階の土器群を宮ノ台式の範疇には含めないこととした。

ただし、この時期の資料について若干の予察を述べておきたい。まず、先にあげた三宅島坊田遺跡出土土器（5～11）では、7に見られるように1+2文様帯構成を持つものが認められ、東海地方の土器の影響を強く受けていることが分かる。そうした中にも5のような前代様相が強い土器が出土しており、先述したように東海的様相をもつ土器と同時存在していることが判断できる。

次に、仮屋塚遺跡出土土器（第10図）では、刷毛目を明瞭に残すものが確認できる（3・4)。そして、器形的にも細頸で胴部がナデ形をしているため、宮ノ台式土器に近い器形を持つ。しかし、1の土器に代表されるような「1＋2a＋2b+」文様帯構成を持ち、三角連繋文など複雑な文様要素を内包するものもある。こうしたことから判断が難しいが、ここでは一応直前段階に含めた。ただし、1のような土器が宮ノ台式土器内部の地域差ならば、Ⅰ期に並行する可能性もある。

これまで、この段階の土器群は宮ノ台式土器に内包されてきた（安藤1990・91、小倉1996、黒沢1997・98)。しかし、本稿ではこの段階を宮ノ台式直前段階とした。筆者はこの段階について、中里遺跡の報告や当該期資料の蓄積がなされた後に、新たな型式を設定すべきだと考える(註8)。

Ⅰ期（第3図）

Ⅰ期の基準資料となるのは、三浦半島の基部に位置する手広八反目遺跡15住（第3図）である。Ⅰ期の壺形土器の最大の特徴は、従来から言われている櫛描文の施文率の高さと文様帯幅の広さ及び東海型文様帯の定着となる。この段階の櫛描文施文手法は、遠江の土器群と同様の手法を用いる。

この段階では、在地の縄文主体の土器に櫛描文を施文するといったことは行われず、櫛描文系土器（3・6・8・9・11）と在来系土器（13）は文様要素ではともに独立して存在するようである。ただし、文様帯構成は「1＋無文帯＋2」となり、両者とも同様の文様帯構成を持つ。比率としては、櫛描文施文のものが多い（第8図2～6)。なかには、櫛描文を列点で区画するもの（8、第8図5）があり、次段階の持田遺跡でも認められる（第8図15)。在地系土器には、前代からの名残としての結紐文など意匠文を形成する。ゆえに、この段階の文様構成は在地系土器が東海地方西部の直接的な影響を強く受け変容したことで、宮ノ台式土器が成立した時期

だと言えよう。

また器面調整では、この段階では刷毛目調整が主要な調整手法となっている。そのため、明瞭な刷毛目調整痕を残すものが多く見られる（20～23）。

甕形土器では、口唇部装飾においてヘラ刻みのものが数的優位を持ち、刷毛状工具によるものが次ぐ（15～20・22）。指頭押捺型は少ない（21・23）。また、口唇部内面に櫛目鎖状文（14～18）をもつがこれはⅠ期及びそれ以前に多く認められるようである。そして、条数の多寡により若干の時期差を示す（安藤1990）。諸戸邸内遺跡では、内面に櫛目波状文が認められる（第8図13）。胴部装飾では、ヘラ描き（14・15）及び櫛描きの羽状文（16）、そして刷毛目無文甕（20～23）が共存する。

Ⅱ期（第4図・第5図）

Ⅱ期は、器面調整において時期差が認められるが、文様帯構成においては画期と呼べるほどの差が見出せないので同時期内で前半・後半に区分とした。

まずⅡ期前半では、持田遺跡池状遺構（第4図10～20）及び佐原城跡遺跡Y3住（第4図2～9）やY７住の土器群（第4図1）、蛭畑遺跡3号方形周溝墓（第4図21～25）、南御門A地点1住（26・27）が該当資料となる。この段階では、東海地方西部の影響は残ってはいるものの、かなり薄くなる。変わりに、独自の発展過程を示す[註9]。

Ⅱ期後半では、池子旧河道65Gの土器群が基準資料（第5図）となる。これらは、壺形土器の文様帯構成においては前半期と明確な差を持たないが、櫛描文の減少や複合鋸歯文の定着などいくつか異なる様相を見せるようになる。以下では、こうしたⅡ期の様相を詳述する。

壺形土器の文様帯構成では、これまで幅の広い1帯構成の2文様帯が主体的であったのに対して2文様帯内で分体化の傾向が認められるようになる。これは、幅の広い1つの文様帯内に無文帯がいくつか貫入することで、Ⅰ期と同様に広い範囲での施文は変わらないが、文様帯が複帯構造に移行する。おそらく、白岩遺跡（第11図7～10）で見られるような櫛描文内に無文帯が入るものの在地化と考えられる。長伏溝状遺構（第12図4）のような同時期の他地域の影響も感化できない。また、分帯化に伴いⅡ期がもっとも結紐文を形成するようである。そして、文様帯を区画するといった手法も継続される。

器面調整では、前半期はⅠ期に比べ減少傾向が認められるが、刷毛目を明瞭に残した土器が多い（第4図1～3・11～13・21・24）。しかし、後半期になると刷毛目を明瞭に残す土器は減少し、ミガキ（第5図6～11）や赤彩された土器が増加する。文様要素でも、前半期には幅広の櫛描文が施され、櫛描文の比率も後半よりも高い。逆に後半では、それらの要素がなくなるものの、遺構外であるが前半期と考えられる佐原城跡遺跡において複合鋸歯文（9）など新出の文様要素が定着する。特に、櫛描文においては、前半には幅広の櫛描き波状文（14、第8図19）が認められるが、後半には消失してしまう。また、後半期からは、櫛描文＋縄文施文の文様

構成も見られるようになる。縄文は、羽状縄文（第5図8）が顕在化してくるものの谷口の指摘（谷口1999）にあるように、定着する段階とはいえない。

次に、甕形土器では、前半と後半では決定的な差が生じる。前半期は、器面装飾において羽状文（7・18、第8図24・25）が明確に残存する。そして、Ⅰ期と同様に刷毛無文甕（19・20）との共存が認められる。しかし、Ⅰ期で見られた口唇部内面の櫛目鎖状文は、ひる畑遺跡で認められるものの、ほとんどが破片資料である。また口唇部装飾では、指頭押捺と刻みのものが6:4の割合で共存する。だが、後半期になると羽状文は消失し、刷毛目無文の甕が圧倒的な数的優位に立つようになる。口唇部装飾においても指頭押捺型の甕が基本となり、刻み目をもつものは僅かになる。

このように、Ⅱ期は東海地方西部の影響が減少し、それらが在地化してくる段階といえるようである。

Ⅲ期（第6図）

この時期は赤坂遺跡2住（1）・7住（2～16）及び鴨居上ノ台遺跡100号住（第8図43・44）が該当する。本期の特徴は、赤彩された壺形土器の増加が顕著と言える。以下では、Ⅲ期の概要を考察する。

Ⅲ期の壺形土器の文様帯構成は、Ⅱ期における分帯化から2帯へ収縮する方向へ変化する。そのため、2b文様帯が消失する。さらに、文様要素では櫛描文はほぼ施文されなくなる。ただし、擬流水文（第8図43）に加えて直線文と波状文が若干であるが認められる。また、Ⅱ期後半から出現した縄文＋櫛描文の構成（2・3・6）は、Ⅲ期にも認められる。縄文施文では、Ⅱ期後半に顕在化してきた羽状縄文の定着化する（1・2・3・7）。これは、櫛描文が羽状縄文へと変容したものと考えられる。また、房総において顕著にみられる結節文（4）も出現してくる。ただし、施文としては主文様として施文されるが、客体的といえる。このように、文様施文範囲及び文様要素が限定的となる。こうした文様の簡略化の動きに連動して、赤彩された土器が増加することになる（1～3・6～9）。

甕は、Ⅱ期に比べ刷毛目無文の甕が減少する。そして、刷毛目をナデ消した甕の比率が高くなる。刷毛目が残る甕も、全体に明瞭に見られるものは少なく、一部をナデ消しているものが多い。器面装飾では、この時期までで三浦半島では羽状文が消失する。この段階では、破片資料であるが鴨居上ノ台遺跡100住や赤坂遺跡第8次7住で出土している。赤坂遺跡3次調査1A住では、床面直上資料も出土しているが、やはり破片資料である。口唇部装飾は、刻み（12）は散見される程度で、ほぼ指頭押捺のもの（11・13～15）に限られる。

Ⅳ期（第7図）

Ⅳ期もⅡ期と同様に文様帯以外の属性において一部時期差が見られるため、前半と後半に細

分した。Ⅳ期に該当する資料は、前半期を佐原泉32B住居址（1～5）、矢ノ津坂Y14・Y17住居址資料（8～15）とし、後半期を矢ノ津坂10・15住（16・20・21）、台山藤源治38号（17～19）、大倉幕府雪ノ下4丁目26住居址出土資料（22～25）が挙げられる。

Ⅳ期の特徴は、壺形土器の胴部文様帯に二つの系統が現れることである。まず1つは、2a文様帯が頸部もしくは肩部に集約される1帯構成をとるもの。この系統では、羽状縄文帯を持つものが多く、前半期には沈線での区画はあまり見られない（9、第8図51）。これは、文様の簡略化が、発達したものと考えられる。こうした土器は、下末吉台地においてSi Ⅴ期に普遍的に見られるようである。一方で、前代から継続して2a+2cもしくは2a+2c＋文様帯の2帯構成を取るものが認められる。文様帯を沈線で区画するもの（4・12・20・23・25）も見られる。この文様帯構成は、のちの久ヶ原式土器（第15図）の文様帯構成に継続されると考えられる。おそらく、前者の文様帯構成は後期に入ると消失し、後者が久ヶ原式土器の文様帯の祖形となるのであろう。

また、犬木氏によって宮ノ台式土器に施文される結紐文が後期の幾何学文の祖形であると指摘されている（犬木1992）。Ⅳ期では、特に結紐文から発達した山形文の直前段階と考えられる文様を施文した土器が出現する（4・8・12）。このように、文様帯構成とともに文様要素も後期的な様相を呈してくる。また、櫛描文も前半には消失するようである。ただし、擬流水文は最後まで残存する

器面調整は、Ⅲ期とほぼ同様である。ただし、赤彩比率は増加する。Ⅳ期後半には、口縁部形態にこれまで見られなかった複合口縁壺が現れる（第7図16・22）。

Ⅳ期の甕形土器は、前半・後半に明確には分離できない。また、口唇部装飾においても指頭押捺型のもののみとなる。器面調整でも、刷毛目を残すものはほぼ姿を消す。その代わりに、刷毛目をナデ消した甕が大半を占めることになる。なお、器形は後期前半の「長胴型輪積み甕」の祖形となる「長胴型無輪積み甕」の存在が顕著となり、胴中位が膨れた下膨れの甕が増加するようになる（19）。また、佐原泉33B住や台山藤源治遺跡では長胴1段輪積みのものも見られる（17・18）。それらは、後期の多段輪積み痕甕の祖形となる。

5. 本稿の成果と展望

ここで、これまでのまとめを行いたい。三浦半島における壺形土器の文様帯構成は、Ⅰ期の手広八反目遺跡の土器（第3図）に代表されるように、縄文系列及び櫛描文系列ともに文様構成を幅広く取ろうとする意図が見受けられ、白岩式（第11図7～10）や瓜郷式と同様に2文様帯1帯幅広構成のものを主体とする。次にⅡ期では、Ⅰ期に主体的に見られた櫛描文施文が減少し、在地の縄文施文を主体とするようになる。しかし、文様施文幅を広くとろうとする意

図はⅠ期同様に認められる。それは、1つの文様帯を幅広くしていた前代と異なり、1つの幅広の文様帯を分割することで複帯化させ、構造的な変容を遂げることになる。また、Ⅱ期は結紐文が最も盛行する時期と考えられる。そして、Ⅲ期では文様帯は文様要素の簡略化の傾向を受け2帯に収束しようとする。そのため、2b文様帯が消失する。この2帯化の流れは、Ⅳ期に2つの系統を生むこととなる。一つは、さらなる収束化としての頸部集中型である。この系統は、文様として羽状縄文などを施す。また、あまり沈線区画は行わない。もう一つは、2a＋2c+帯構成をとり文様を沈線区画するものである。これらは、2c文様帯に付加帯として結紐文・波状文などを持つ。比較的複雑な文様構成をとる土器群である。

上記が、三浦半島における壺形土器の文様帯の動きである。では、三浦半島の宮ノ台式土器はどのようにして久ヶ原式に変化するのであろうか。安藤氏によると、下末吉台地では後期との断絶はかなり明確であるとされている（安藤1990）。しかし、本地域では下末吉台地のように後期との断絶は想定しがたい。むしろ、比較的おだやかな連続性をもって後期に変化していくと想定できる。三浦半島では、佐原泉32B住（第6図4）や矢ノ津坂遺跡の資料（第6図8・12）からが示すように、結紐文から波状文、そして山形文への変化の過程を追うことが出来る（犬木1992）。

また、比田井克仁氏によると上総を久ヶ原式の出現地と考えた場合、三浦半島はかなり早い段階でそれらの要素を取り入れ久ヶ原式化するようである（比田井2003）。筆者も、ほぼ同様の見解をもっており、久ヶ原式の成立に房総地域の果たした役割は大きく、神奈川県内においては三浦半島がいち早く情報を入手したものだと考えられる。

以上本稿では、三浦半島という宮ノ台式土器分布圏でも比較的狭い地域での編年を行った。その結果、壺形土器における文様帯の変化を基軸として三浦半島の宮ノ台式土器はⅠ～Ⅳ期の4時期に細分することが考えられた。しかし、筆者の力量不足のため、房総や相模湾沿岸地域などの周辺地域の検討を行うことができなかった[註10]。今後は、宮ノ台式土器が各地域でどのように成立・変容していったのかを考察するためにも、地域ごとに詳細な検討を重ねていくつもりである。

謝辞

本稿は、2008年1月に明治大学文学部に提出した卒業論文の一部をもとに、再構成したものとなります。卒業論文及び本稿を作成するにあたっては、石川日出志先生・高瀬克範先生には多大なる御教授と御指導を賜りました。また、日頃より平田健氏・日隈広志氏をはじめとする明治大学考古学研究室諸兄には多くの御協力と激励を頂いております。さらに、岡本孝之会長をはじめとする西相模考古学研究会の諸兄には、本稿に関する発表の機会を頂き有益なご指摘を頂きました。そして、本稿の発表に際しては小滝勉氏・霜出俊浩氏に格別の御配慮を頂きました。その他、資料調査及び本稿の執筆に際しては、以下の方々、諸機関にご協力頂きました。御芳名を記し、皆様方には心より厚く御礼申し上げます。

阿部芳郎・安藤広道・石井寛・稲村繁・井上洋一・植木雅博・川口徳治朗・河野善映・忽那敬三・釼持輝久・小林康行・佐藤健二・汐見一夫・杉山祐一・杉山浩平・須田英一・谷口肇・中川二美・諸橋千鶴子・野内秀明（五十音順・敬称略）

赤星直忠博士資料館・厚木市教育委員会・小田原市教育委員会・かながわ考古学財団・神奈川県立歴史

博物館・鎌倉市教育委員会・三殿台考古資料館・逗子市教育委員会・逗子市郷土資料館・明治学院大学図書館・明治大学博物館・三浦市教育委員会・横須賀考古学会・横須賀市教育委員会・横須賀市自然人文博物館・横浜市歴史博物館・横浜市埋蔵文化財センター

註

(1) 地域設定については、三浦半島全体における編年構築を目的としたので、土器ではなく地形的条件から三浦半島という地域を設定した。
(2) 広口壺や台付甕、高杯といった、他の土器についても地域ごとに様相に違いが認められる。このことについては、別の機会に論じたい。
(3) 基本的には、住居跡一括資料を基準資料としたが、一部一括と考えられる土器については覆土のものも分析対象とした。
(4)「文様帯」については、山内清男氏以来の縄文土器における文様帯系統論（山内 1964）が存在する。「文様帯」という用語は、石川日出志氏の指摘（石川 2002）にもあるように「文様帯」の語を用いるには縄文土器の各文様帯とのつながりに十分な配慮が必要」である。その為、本稿における「文様帯」という概念は、縄文土器の「文様帯」とは異なるものである。
(5) 赤坂遺跡8次調査地点7号住で、出土している結節文土器は文様構成・胎土などから房総からの搬入品である。
(6) なお、口縁部から頸部につづく縄文施文（第8図65）は、相模から三浦半島には認められる。しかし、房総では、相模に比べ明らかに後出で、宮ノ台式の最終末になってから出現する（杉山祐一氏にご教示頂いた)。このことは、後期との関連性を考える上で重要である。
(7) ただし、破片資料のため流れ込みの可能性も捨てきれない。
(8) 本文中で触れることが出来なかったが、この段階は、少なくとも２段階の変遷が考えられる。現在、その最古段階にあたると考えられるのは、大里東遺跡出土土器の新段階のものであろう。そして、次の段階には坊田遺跡が当たると考えられる。三浦半島では、池子遺跡の資料が大郷東遺跡に、雨崎遺跡の資料が坊田遺跡の時期的に対応するのではないかと考えている。
(9) 佐原城跡遺跡では、伊藤淳史氏の言う磨消線文甕（伊藤 1996）や卓越した櫛描文手法を用いた壺形土器が出土しており、駿河地域との関係を示唆している。
(10) ここで周辺地域において最も重要と考えられる小田原谷津遺跡の土器（第14図）の時期について、言及を行っておきたい。2個体の土器は、分帯化しているもの（1）と文様帯が一帯のもの（2）がある。こうしたことから、筆者はⅠ期もしくは次のⅡ期前半に比定することが可能ではないかと考えている。

引用・参考文献

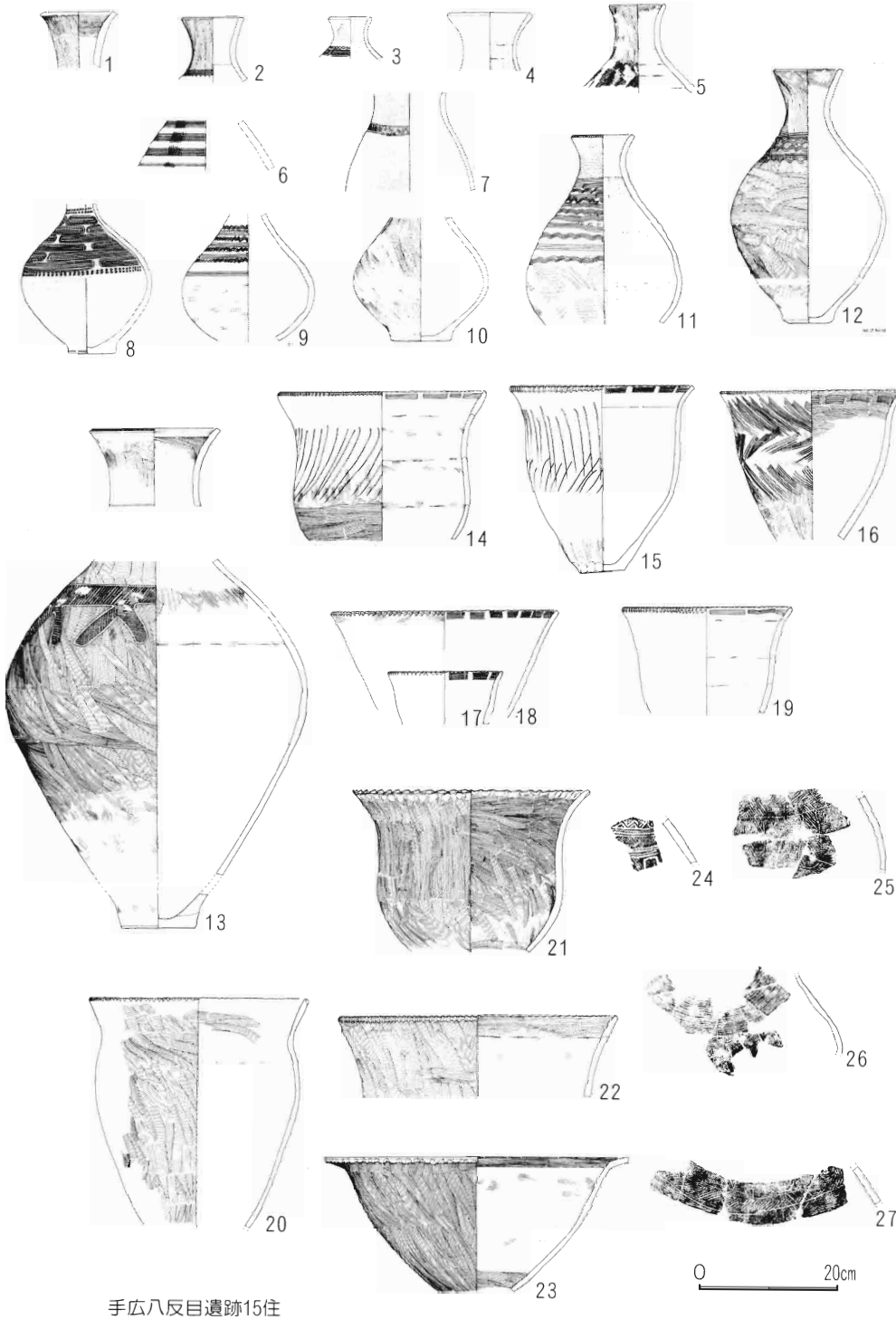
赤星直忠　1995 「考古編」『逗子市史』
安藤広道　1990a 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）」『古代文化』第42巻第6号　古代学協会
安藤広道　1990b 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（下）」『古代文化』第42巻第7号　古代学協会
安藤広道　1991 「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』　田原本唐古整理室OB会
安藤広道　1996 「南関東地方」『YAY!』　弥生土器を語る会
安藤広道　2002 「静岡県沼津市東椎路久保出土の弥生土器について」『民族考古』第6号
石井　寛（編）　1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
石川日出志　1992 「関東地方の弥生土器」「小田原式土器」「宮ノ台式土器」『日本土器事典』　雄山閣
石川日出志　1996 「東日本弥生時代中期広域編年の概略」『ＹＡＹ！』　弥生土器を語る会
石川日出志　2002 「栗林土器の形成過程」『長野県考古学会誌』長野県考古学会
石川日出志・伊丹　徹・黒沢　浩・小倉淳一（編）　2005 『南関東の弥生土器』六一書房
泉谷憲俊　1980 「研究史宮ノ台式土器」『法政考古学』第6集　法政考古学会
犬木　努　1992「　宮ノ台式土器基礎考」『考古学研究室研究紀要』第11号東京大学文学部考古学研究室
植山英史（編）　1997 『池子遺跡群Ｖ』財団法人　かながわ考古学財団調査報告書27
上田　薫・木村吉行（編）　2002 『佐原城跡遺跡』財団法人　かながわ考古学財団発掘調査報告130
江藤千萬樹　1937 「駿河矢崎の弥生式遺跡調査概報」『考古学』第8巻第6巻　東京考古学会
及川良彦　1987 「弥生土器の移動と地域性」『青山考古』第５号　青山考古学会
大島慎一　1986 「神奈川県における中期後半における弥生土器について」『第７回　三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会

大島慎一　1997 「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原市郷土文化館研究報告』№.33　小田原市郷土文化館
大渕淳志（編）　1994 『安房仮屋塚遺跡』三芳村教育委員会
岡本　勇（編）　1975 『持田遺跡発掘調査報告書』持田遺跡調査団
岡本　勇（編）　1981 『鴨居上ノ台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第 8 集
岡本　勇（編）　1989 『佐原泉遺跡』泉遺跡調査団
岡本　勇（編）　1992 『三浦市赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団
岡本　勇（編）　1994 『三浦市赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団
岡本孝之　1980 「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』第 1 号　神奈川県考古同人会
岡本孝之　2007 「小田原考古学のはじまり」『小田原市郷土文化館研究報告』№.42
小倉淳一　1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第 27 号　史館同人
小高春夫（編）　1993 『滝ノ口向台遺跡・大作古墳』千葉県埋蔵文化財センター調査報告第 232 集
柿沼修平　1984 「大崎台遺跡出土の弥生式土器ー特に中期後半から後期初頭にかけての弥生式土器について―」『奈和　15 周年記念論文集』　奈和同人会
神奈川県（赤星直忠・岡本　勇編）　1979 『神奈川県史　資料編 20　考古資料』
加納俊介・石黒立人（編）　2002 『弥生土器の様式と編年』木耳社
河合英夫　1988 「ひる畑」『第 9 回三県シンポジウム　東日本の弥生墓性』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
河合英夫　2008 「蛭畑遺跡の発掘調査」『市史研究横須賀』横須賀市教育委員会
神沢勇一　1966 「弥生文化の発展と地域性　関東」『日本の考古学　Ⅲ　弥生時代』　河出書房
神沢勇一　1968 「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」『神奈川県立博物館研究報告』第 1 巻第 1 号　神奈川県立博物館
菊川英政　1992 「諸戸邸内遺跡出土土器の概要」『鎌倉考古』NO.22　鎌倉考古学研究所
黒沢　浩　1993 「宮ノ台式土器の成立」『駿台史学』第 89 号　駿台史学会
黒沢　浩　1997 「房総宮ノ台式土器考」『史館』第 29 号　史館同人
黒沢　浩　1998 「続・房総宮ノ台式土器考」『史館』第 30 号　史館同人
釼持輝久　1996 「三浦半島南部の海蝕洞穴遺跡とその周辺の遺跡について」『考古論叢　神奈河』第 5 集　神奈川県考古学会
鯉渕義紀　2008 「鎌倉における弥生時代中期後半～後期の後期集落」『考古論叢神奈河』第 16 集
小林行雄　1939 『弥生式土器聚成図録正編解説』東京考古学会学報 1
小林青樹　1995 『大里東遺跡発掘調査報告書』大里東遺跡発掘調査団
小宮恒雄（編）　1975 『歳勝土遺跡』Ⅴ　横浜市埋蔵文化財調査委員会
呉地英夫・河合英夫（編）　1997 『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第 61 集
斎木秀雄（編）降矢順子　2007 『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書－雪ノ下 4 丁目 581 番地－』有限会社鎌倉遺跡調査会
斎木　勝　1987 「東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『研究紀要』3 千葉県埋蔵文化財センター
佐藤明生（編）　1991 『茅山貝塚』横須賀市文化財調査報告書第 23 集
佐藤由紀男　1986 「遠江の弥生時代中期後葉の土器」『第７回三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
佐原　真（編）熊野正也　1983 「関東南部」『弥生土器Ⅱ』ニュー・サイエンス社
宍戸信悟・上本信二　1989 『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 20
宍戸信悟・上本信二　1991 『砂田台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 20
宍戸信悟　1992 「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」『神奈川考古』第 28 号　神奈川考古同人会
新開基史・吉田政行（編）　2006 『高尾横穴墓群・矢ノ津坂遺跡』かながわ考古学財団調査報告 198
杉原荘介　1935 「上総宮ノ台遺跡調査概報」『考古学』第 6 巻第 7 号
杉原荘介　1936a 「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」『人類学雑誌』第 51 巻第 1 号　東京人類学会
杉原荘介　1936b 「相模小田原遺跡出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』第 51 号第 4 号　東京人類学会
杉原荘介　1968 「南関東地方」『弥生式土器集成　本編 2』東京堂
鈴木正博　2000 「「宮ノ台式」成立基盤の再吟味」『日本考古学協会第 66 回（2000 年度）総会　研究発表要旨』日本考古学協会
鈴木正博　2001 「『小田原式』研究序説―『十王台式』研究法である『土器 DNA 関係基盤』から観た『小田原式』の真相―」『茨城県考古学協会誌』第 13 号　茨城県考古学協会
鈴木正博　2004 「隠蔽された「小田原式」－「小田原式の土器」の復権と「小田原式」研究の展望」『考古論叢神奈河』神奈川県考古学会
須田英一（編）　2001 『赤坂遺跡－個人専用住宅建築工事に伴う第 18 次調査地点の発掘調査－』三浦市埋

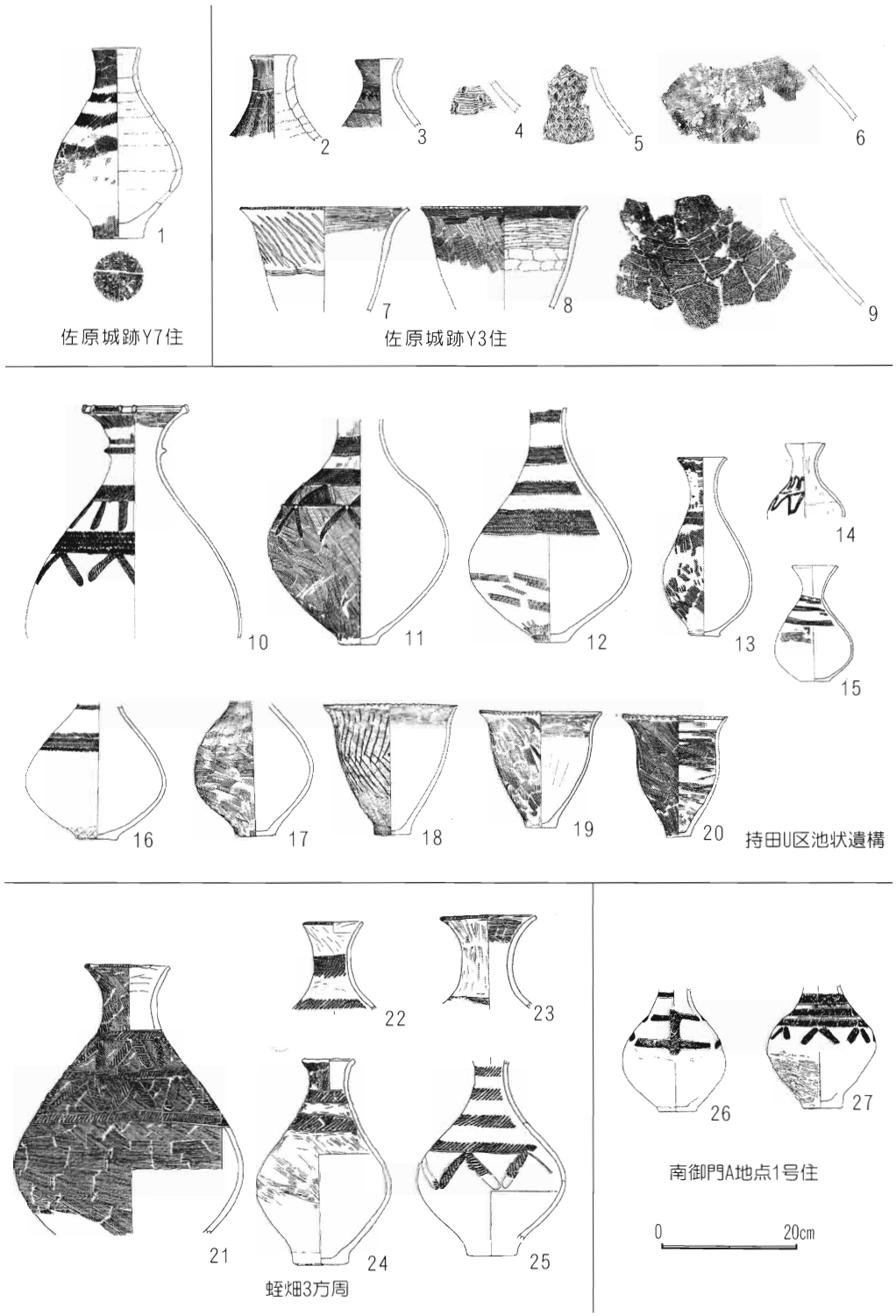
蔵文化財調査報告書第6集
高杉博章　1982 『横浜市上倉田遺跡』明治学院大学
武井則道（編） 1991 『大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ　遺構編－港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ』横浜市埋蔵文化財センター
武井則道（編） 1994 『大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ　遺物編－港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ』横浜市埋蔵文化財センター
谷口　肇　1999 「第3節」『池子遺跡群Ⅹ　第2分冊』財団法人神奈川県埋蔵文化財センター
玉川久子（編） 1997 『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市教育委員会
手塚直樹（編） 1985 『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団
内藤晃・市原寿文（編） 1968 「静岡県小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査概報」『東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告』日本道路公団・静岡県教育委員会
中村　勉・諸橋千鶴子（編） 1997 『大浦山洞穴』三浦市埋蔵文化財調査報告書第4集
永井正憲（編） 1984 『手広八反目遺跡』手広遺跡調査団
橋口尚武（編） 1975 『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島考古学研究
比田井克仁　2003 「久ヶ原式土器成立考」『法政考古学』第29集　法政考古学会
松本　完（編） 1988 『折本西原遺跡－Ⅰ』折本西原遺跡調査団
馬渕和雄（編） 1996 「大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番地5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　14』鎌倉市教育委員会
諸橋千鶴子（編） 2001 『赤坂遺跡－第8次調査地点の報告－』三浦市埋蔵文化財調査報告書第5集
諸橋千鶴子（編） 2004 『赤坂遺跡－天地返しに伴う第10次調査地点の調査報告－』三浦市埋蔵文化財調査報告書第13集
諸橋千鶴子（編） 2006 『赤坂遺跡－天地返しに伴う第11次調査地点の調査報告－』三浦市埋蔵文化財調査報告書第17集
野内秀明（編） 1997 『間口東洞穴遺跡』松輪間口東海蝕洞穴遺跡調査団
山内清男　1940 「弥生式土器」『日本先史土器図譜』第Ⅰ輯　先史考古学会
山内清男　1964 「縄文式土器総論　文様帯系統論」『日本原始美術　1　縄文式土器』講談社
山本輝久（編） 1999 『池子遺跡群ⅩNo.1－A地点』かながわ考古学財団調査報告46
弥生時代研究プロジェクトチーム　2006「　宮ノ台式土器の研究(5)」『かながわの考古学』財団法人かながわ考古学財団
横須賀考古学会　1984 『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』
横須賀市自然博物館（編） 1991 『三浦半島の自然環境』
横山太郎（編） 2003 『佐島の丘遺跡群』佐島の丘埋蔵文化財発掘調査団
和島誠一（編） 1965 『三殿台』横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告

挿図出典

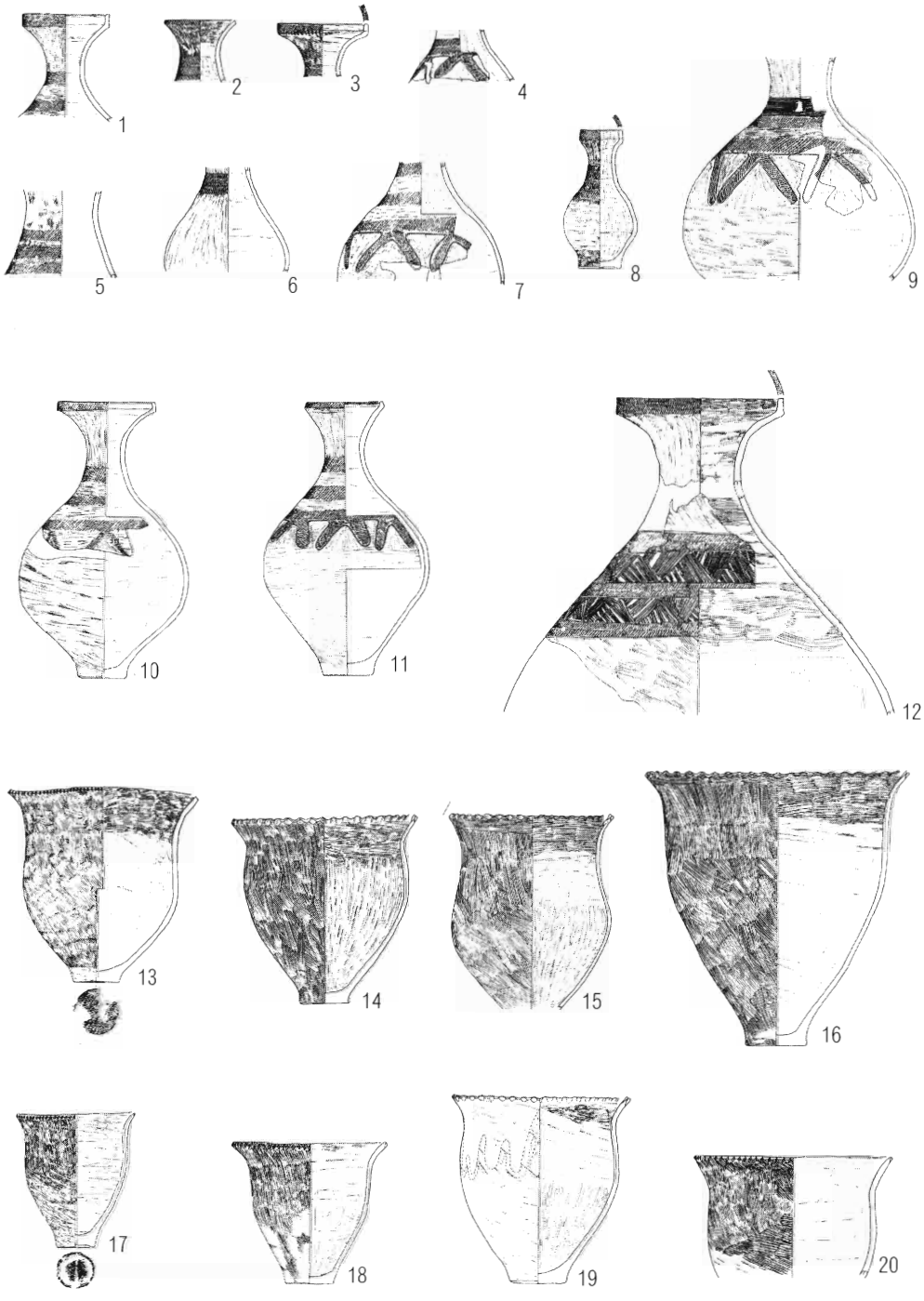
【第1図】国土地理院1/25000を改変
【第2図】1・2・5：谷口1999　3：河合2008　4：岡本1975　6：新開・吉田2006　7：上田・木村2002
【第3図】永井1984
【第4図】1～9：上田・木村2002　10～20：岡本1975　21～25：河合2008　26・27：及川1987
【第5図】谷口1999
【第6図】1：諸橋2004　2～16：諸橋2001
【第7図】1～5：岡本1989　6・7：谷口1999　8～16・20・21：新開・吉田2006　17～19：手塚1985　22～25：降矢2007
【第8図】1・7～13：永井1984　2：菊川1992　3～6・19・28～37・39～41・49・51・52・54・63・65：谷口1999　13：菊川1992　14・15・21～26：岡本1975　16・17：河合2008　18・27：植田・木村2002　38：諸橋2001　42・45～47：諸橋2001　43・44：岡本1981　48・53・55：岡本1989　50・59・61・62・64・66・67・68：新開・吉田2006　58・60・69：降矢2007
【第9図】1～4・6：谷口1999　5：永井1984　7：諸橋2004　8：新開・吉田2006
【第10図】大渕1994
【第11図】1～4：谷口1999　5～11：橋口1975　12～18：小林1995
【第12図】石黒・加納2002



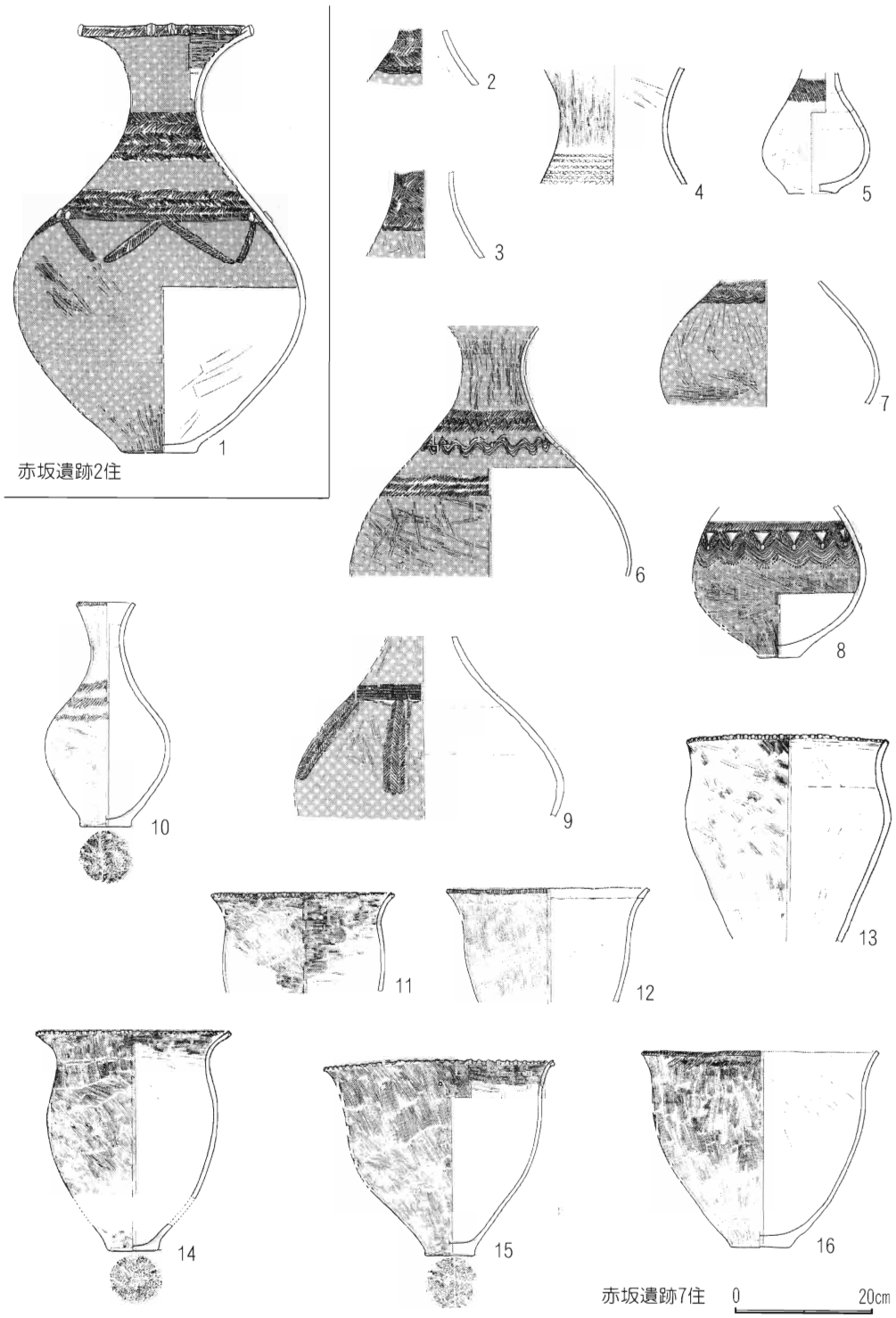
第３図　Ⅰ期の代表的な資料



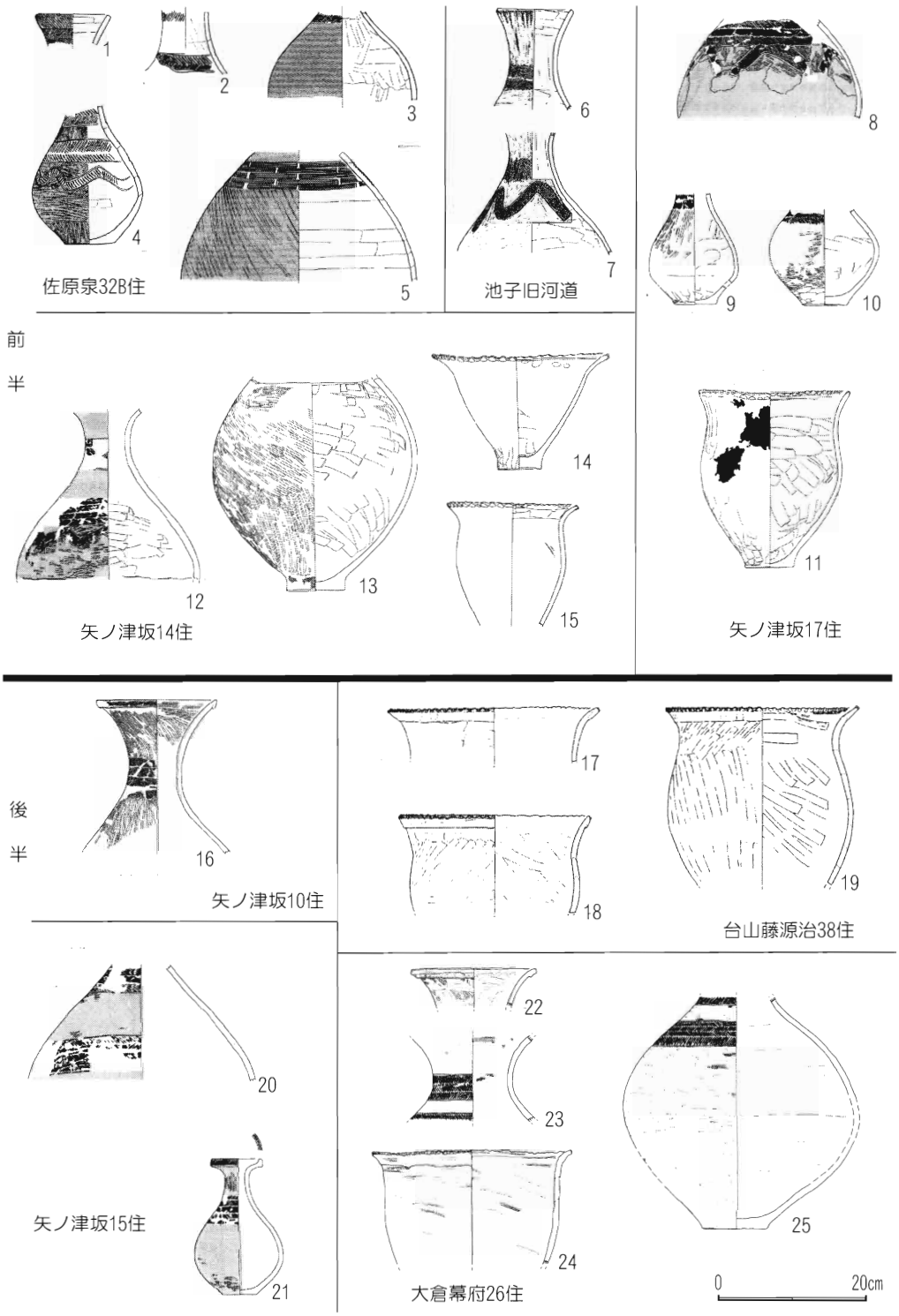
第4図　Ⅱ期前半の代表的な資料



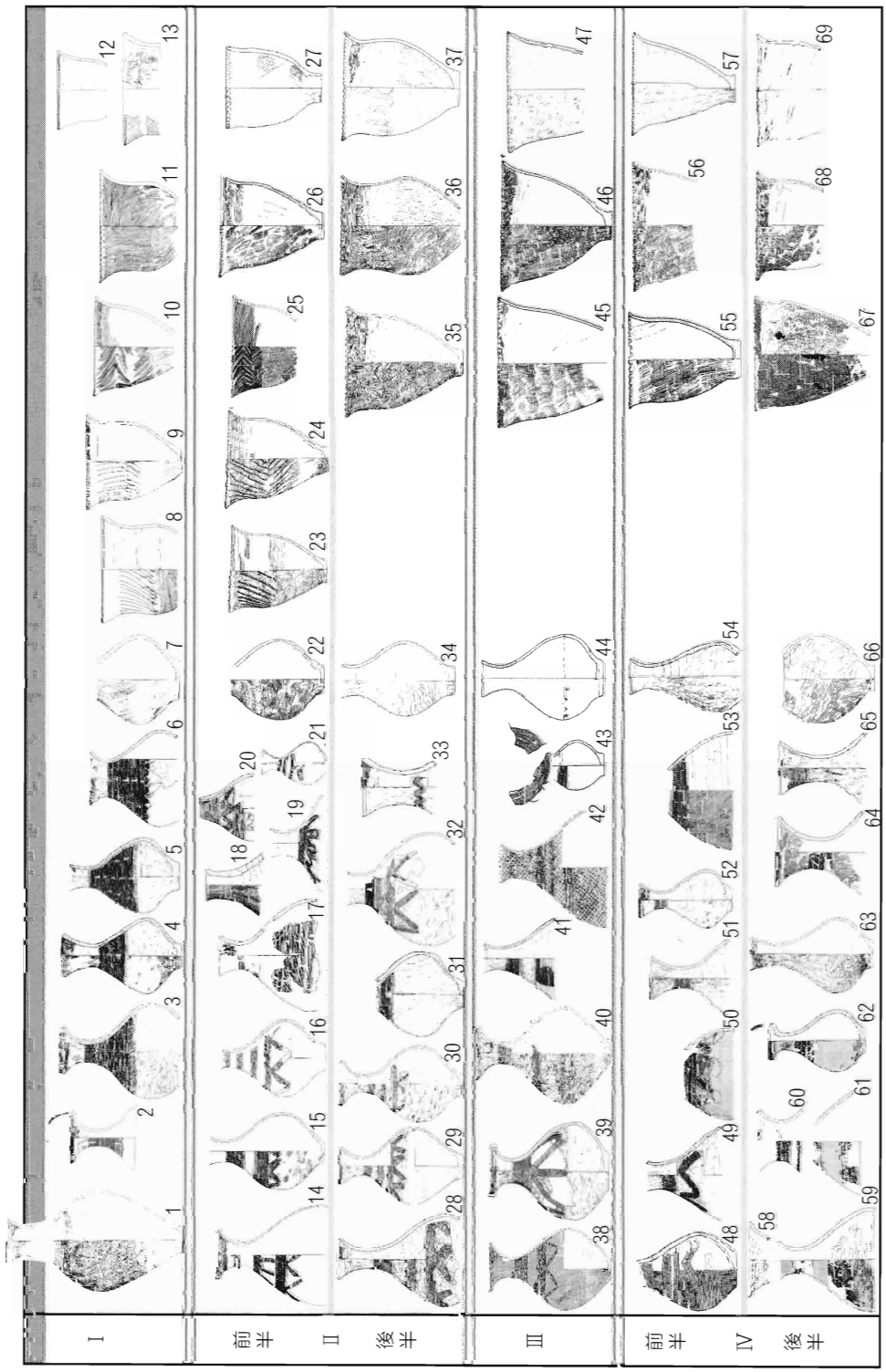
第５図　Ⅱ期後半の代表的な資料



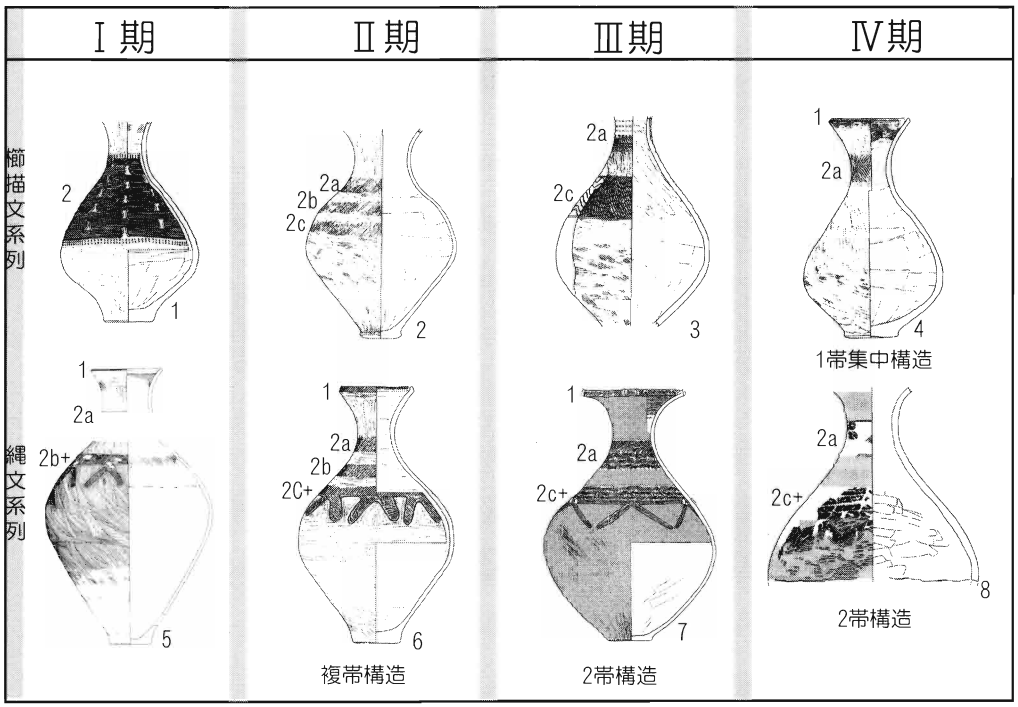
第6図　Ⅲ期の代表的な資料



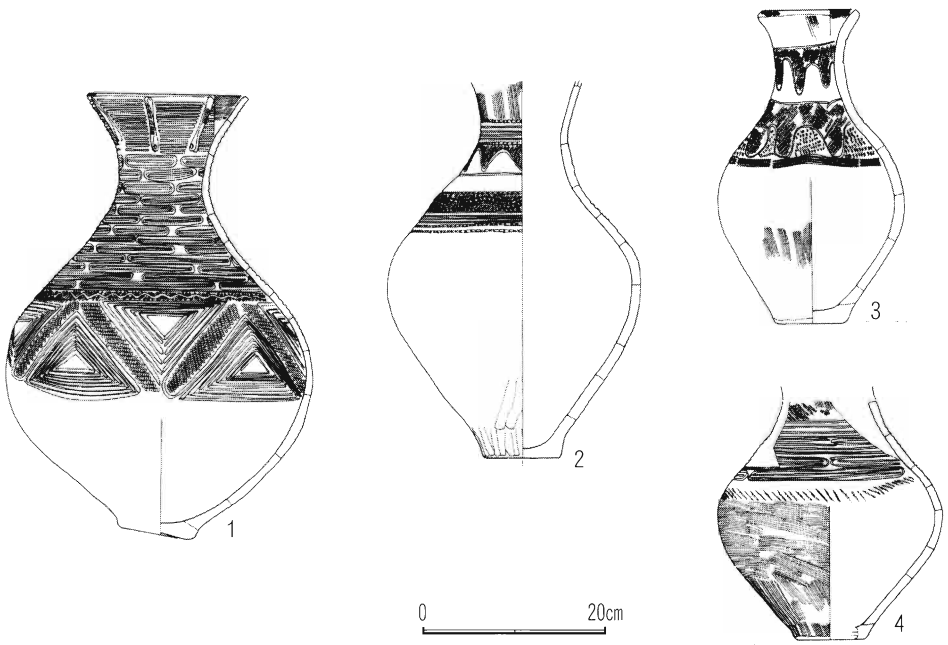
第７図　Ⅳ期前半及び後半の代表的な資料



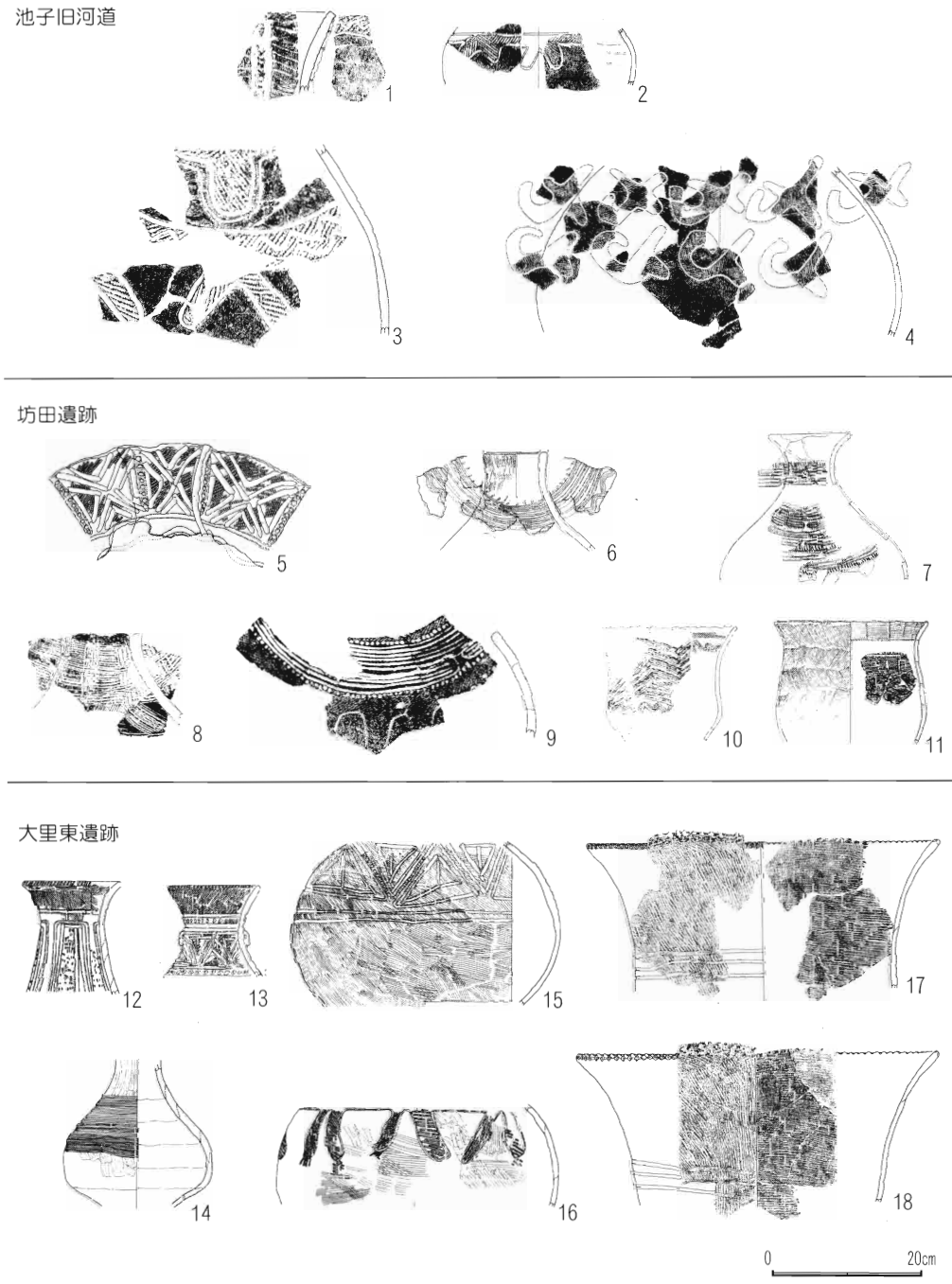
第8図　三浦半島における宮ノ台式土器の編年（縮尺不同）



第 9 図　施文帯変遷図（縮尺不同）



第 10 図　千葉県仮屋塚遺跡出土土器



第 11 図　宮ノ台式直前段階の土器群

若宮大路側溝の再検討

宇都　洋平

はじめに
1. 各調査地点の概要
2. 若宮大路側溝の構造
3. 木組み構造側溝の修理・浚渫と人名木簡
4. 若宮大路側溝の変遷
おわりに

はじめに

若宮大路は養和二(1182)年に北条政子懐妊の祈りとして、それまで曲横していた道を鶴岡八幡宮の参道として源頼朝が自身で沙汰し整備したと『吾妻鏡』にみえる。この記事が若宮大路の初現であるが、若宮大路が当初から都市計画の中心的施設として存在していたかについてはさまざまな議論がなされている。

大三輪龍彦は鎌倉がある程度京都の町並みを意識したと推定し、縮尺一万分の一の地図を使用し、図上で鎌倉中心部の道路と地割を復元している。その結果一部例外を除き図上に若宮大路を中心として、東西二百丈、南北三百丈、積六万丈の丘陵による障害を受けない地割が可能との結論づけている(大三輪　1986・1989a,b)。また馬淵和雄も条尺制・戸主制がはじまった嘉禄年間に地割の大きな画期があったとしつつも、「古代宮都がいずれも地形を利用した厳密な設計に基づいて造営されている以上、明らかにその模倣である鎌倉が、無造作な線引きで造られたと考えることこそ無理がある」とし、頼朝の時代の都市計画として、天台山・衣張山の頂上を結ぶラインを都市計画の基軸、それに平行した十王岩・三ノ鳥居を結ぶラインを都市の中軸線と推定している(馬淵　1992・1994)。これに対し、山村亜希は都市鎌倉の成立期に古代都城的都市計画は存在せず、若宮大路が鎌倉の都市軸として機能するのは宇津宮辻子幕府への移転を画期とし、鎌倉内部の道路については「生活の必要より生じた自然発生的な道」を踏襲したと指摘している(山村　1997)。

このように若宮大路は鎌倉の地割を考える上で大きな役割を担っているが、考古学の立場で若宮大路そのものについて論じられるものは少ない。これは若宮大路の遺構の大半が現在も使用されている道路下にあるため調査する機会が少なく、不明な点が多いことに起因すると思われる。しかし発掘調査により若宮大路の側溝は現在までに西側で7地点、東側で8地点の検出事例が報告されている。この各地点で検出された側溝は報告書ごとに近接する大路側溝が検出された調査地点との対応が検討されているが、これらは平面図から同軸・同規模の溝を周辺の調査地点から見つけるという方法であり、調査地点ごとではなく数時期にわたり作り変えられ

てきた大路側溝全体の変遷について触れているものが少ない。本稿では検出された若宮大路側溝の構造や規模・変遷などを再精査し、改めて検出された大路側溝について考察してみたい。

1. 各調査地点の概要

若宮大路の側溝は現在までに15調査地点で検出されていることは前述したが、本章ではこれらのうち、中世段階の若宮大路側溝として明確な13地点の検出状況を概観していくことにする。

（1）若宮大路西側　北条時房・顕時邸跡（№278）

①雪ノ下一丁目264番4地点

2面および3面から二時期にわたる若宮大路の側溝が確認されている（大路側溝Ⅱ・大路側溝Ⅲ）。2面検出の大路側溝Ⅱからは地覆材が東側より一本検出されているが、枘穴の間隔は不明。3面検出の大路側溝Ⅲは東西ともに地覆材が検出されており、地覆材間の芯々距離は約285cm。なお大路側溝Ⅲからは控え梁が2本検出されており、うち1本には三つ鱗の線刻が施されている。

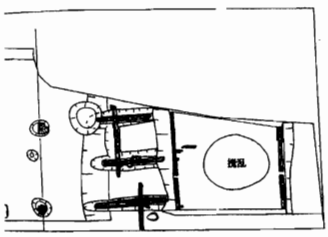
また報告書によれば大路側溝Ⅲの下に4面～6面に対応する側溝があったと考えられるが、大路側溝Ⅲの掘り方により失われたとされている。

②雪ノ下一丁目265番3地点

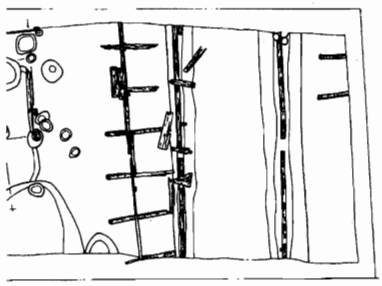
三時期の若宮大路の側溝が確認されている（南北溝Ⅰ期・南北溝Ⅱ期・南北溝Ⅲ期）。第2面南北溝Ⅰ期は枘穴間の芯々距離が50cm、地覆材間の芯々距離は推定296cm。南北溝Ⅱ期・Ⅲ期は第3面の遺構。南北溝Ⅱ期は枘穴間の芯々距離が50cm、地覆材間の距離は不明。南北溝Ⅲ期の枘穴間は芯々距離で約56cm、地覆材間の芯々距離は約275cmである。この南北溝Ⅲには先述の雪ノ下一丁目264番4地点大路側溝Ⅲ同様、控え梁を持ち、三つ鱗の線刻や梅花文・花菱文の焼印が施されている。なお、第3面木器層から「口二丈あかき□□入道」と墨書された人名木簡が出土している。

③雪ノ下一丁目271番4地点

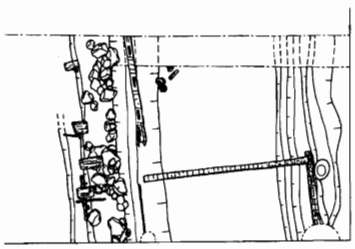
五時期の中世若宮大路の側溝が検出されている（若宮大路側溝3・4・5・6・7）。若宮大路側溝3は報告書によれば土層からの判断であり、規模など仔細は不明。若宮大路側溝4は東西の地覆材が検出されているが、大幅に原位置より移動していると思われ、地覆材間の芯々距離は不明。枘穴間の芯々距離は約50cm。この側溝4からは梁が検出されている。側溝3・4ともに1面からの検出。2面からは側溝5が検出されているが地覆材は西側のみで検出されているため溝幅は不明。枘穴間は約51cm。側溝6・7は3面からの検出。ともに対になる地覆材を欠く。側



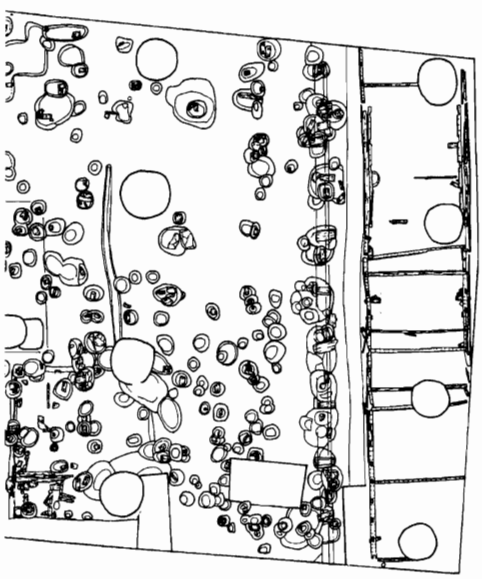
①雪ノ下一丁目264番4地点



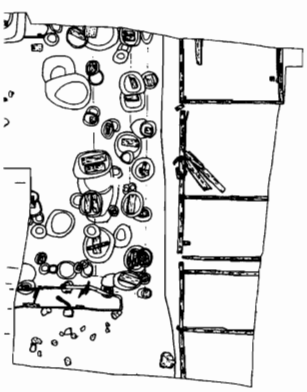
②雪ノ下一丁目265番3地点



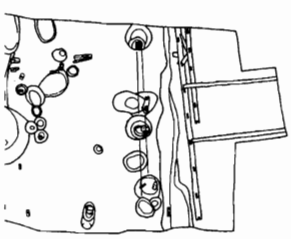
③雪ノ下一丁目271番4地点



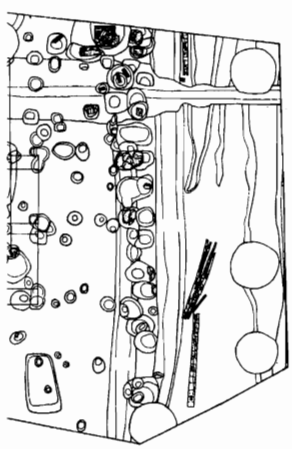
⑤雪ノ下一丁目273番ロ地点



④雪ノ下一丁目272番地点



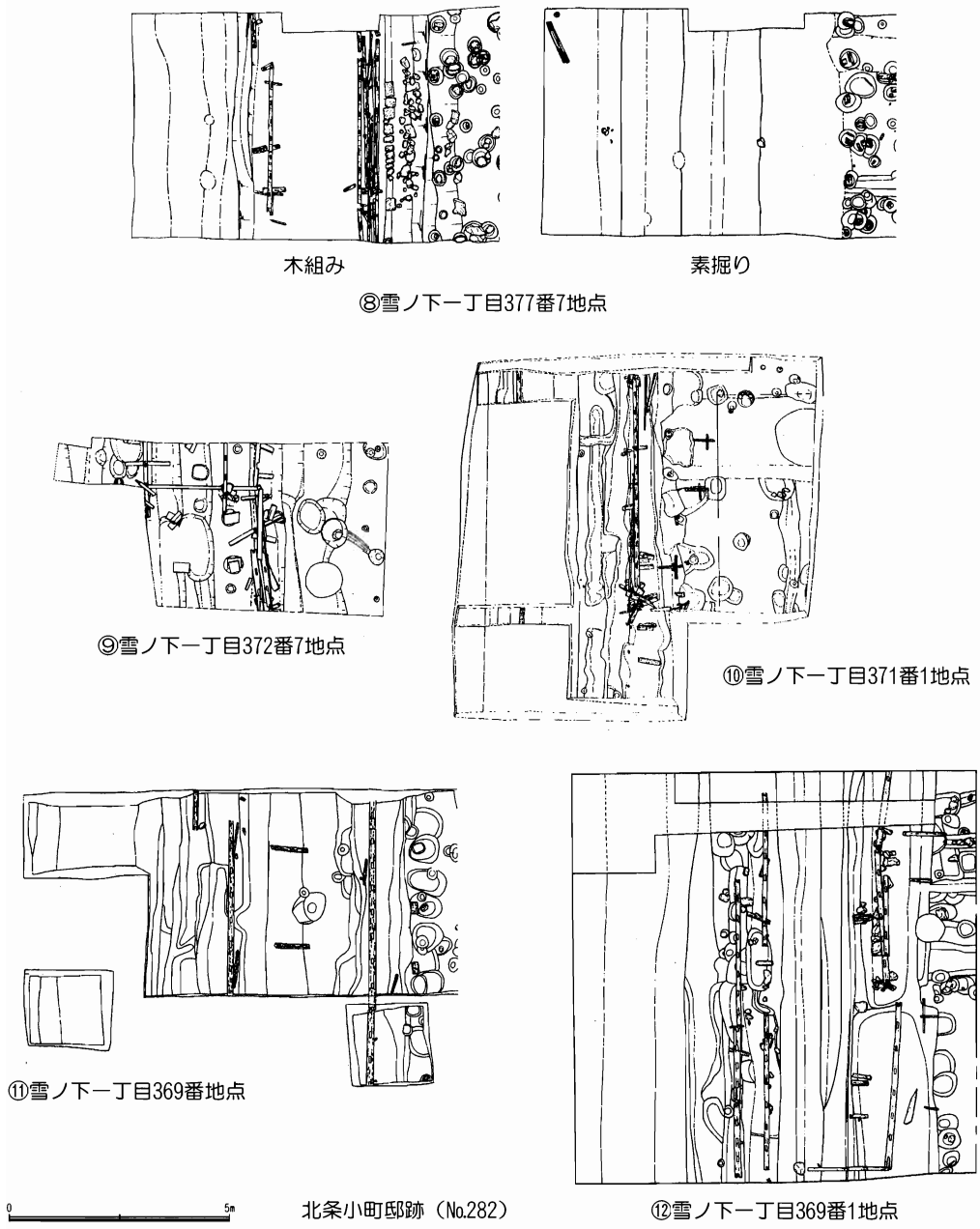
⑥雪ノ下一丁目273番イ地点



⑦雪ノ下一丁目274番2地点

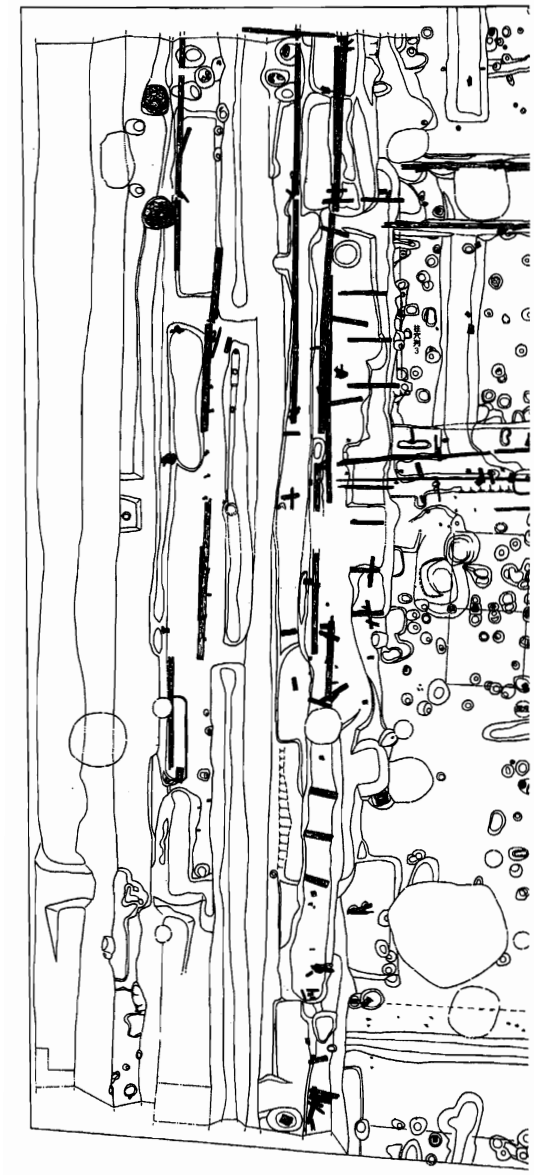
北条時房・顕時邸跡（No.278）

第１図　若宮大路側溝西側



第2図　若宮大路側溝東側（1）

溝6からは地覆材が二本検出されており、一本は枘穴全てが貫通しているが、もう片方は枘穴が貫通、不貫通の交互で構成されている。前述の地覆材の枘穴間の芯々距離は約51cm、後述の地覆材の枘穴間の芯々距離は約54.5cmと、同一の溝の地覆材ではあるが枘穴間の距離が異なる。



⑬雪ノ下一丁目367番1地点・368番1地点

5m　北条小町邸跡（No.282）

第3図　若宮大路側溝東側（2）

④雪ノ下一丁目272番地点

三時期の中世大路側溝が検出されている（溝8・7・11）。溝7と11は同一の溝ながら、改修前を溝7、改修後を溝11としている。この溝からは地覆材及び梁が検出されている。地覆材間の芯々距離は約260cm、地覆材の枘穴芯々距離は約50cm。溝8からは地覆材は検出されていないが、地覆材を設置した際の掘り込みが確認されており、溝幅は約300cmほどであったと推測される。

⑤雪ノ下一丁目273番口地点

二時期の若宮大路側溝が検出されている（南北溝Ⅰ・Ⅱ）。南北溝Ⅰからは東西地覆材および梁・横板が検出されている。地覆材間の芯々距離は約265cm、地覆材の枘穴芯々距離は約50cm。横板は幅約30cmを測る。

南北溝Ⅱからは西側地覆材および梁・束柱・横板が検出されている。南北溝Ⅱは検出された地覆材が西側のみであるが、東側地覆材を設置した際の掘り込みが検出されており、溝幅はおおよそ296cmと考えられる。地覆材の枘穴芯々距離は約70cm。束柱は合計八本検出されており残存長は145～150cm、横板は長さ約210cm、幅20～25cmである。

⑥雪ノ下一丁目273番イ地点

三時期の若宮大路側溝が検出されている（3面若宮大路側溝・溝1a・1b）。3面若宮大路側溝については仔細不明。溝1a・溝1bともに東側が調査区外である為に溝幅は不明。溝1aからは西側地覆材、梁が検出されており地覆材の枘穴芯々距離は約50cm。溝1bからも溝1a同様、西

側地覆材および梁が検出されている。地覆材の枘穴芯々距離は約70cm。

⑦雪ノ下一丁目274番2地点

二時期の若宮大路側溝が検出されている（溝2a・溝2b）。溝2a・2bともに東側が調査区外であるために溝幅は不明。溝2aからは西側地覆材が検出されており地覆材の枘穴芯々距離は約51cm。溝2bからも溝2a同様、西側地覆材のみが検出されている。地覆材の枘穴芯々距離は約70cmである。

（2）若宮大路東側　北条小町邸跡（No.282）

⑧雪ノ下一丁目377番7地点

十時期の若宮大路側溝が検出されている（溝4・4′・5-Ⅰ・5-Ⅱ・5-Ⅲ・6-Ⅰ・6-Ⅱ・6-Ⅲ・7・8）。溝4・4′はⅠ面から検出されており、溝4′は溝4を浚渫したものとされている。木組みの部材は残存していないが、調査担当者は木組み溝であった可能性を指摘している。溝5-Ⅰ・5-Ⅱ・5-ⅢはⅡ面より検出。溝5-Ⅲは溝4と同様、部材が未検出であるため規模は不明。溝5-Ⅱは東側地覆材のみ検出で、枘穴芯々距離は約51cm。溝5-Ⅰは東西地覆材が検出されており、地覆材間の芯々距離は約296cm、地覆材の枘穴芯々距離は約49cm。なお西側地覆材には丸の印刻が二箇所施されている。溝6-Ⅰ・6-Ⅱ・6-ⅢはⅢ面よりの検出。溝6-Ⅲが報告書中では東側に地覆材が残存しているとの記載があるが図示された地覆材のいずれが溝6-Ⅲのものであるかは不明。溝6-Ⅰ・6-Ⅱからは木組みの部材は検出されていないため溝幅は不明である。なお、溝6-Ⅱから「二けん　まきのむくのすけ」・「二けん　かわ志りの五郎」と墨書された二点の人名木簡、溝6-Ⅲから「二けん　おぬきの二ろう」と墨書された人名木簡が出土している。溝7・8はⅣ面より検出の素掘りの溝。溝7は上部を溝6によって削平されているが、確認幅で2.2m、深さ1.1mある薬研掘りの溝。溝8は西肩が調査区外に延びているため溝幅は不明である。深さは1.7m。

⑨雪ノ下一丁目372番7地点

報告書では10回近い改修があったとしているが、仔細は不明。地覆材は西側一時期、東側三時期分が検出されている。

⑩雪ノ下一丁目371番1地点

第Ⅱ面より12条の若宮大路側溝が検出されている。このうち溝8からは三時期、溝10からは一時期の地覆材が検出されている。仔細は不明であるが、溝8の最も新しい時期の地覆材の枘穴芯々距離は図面から推定すると約50cmである。

⑪雪ノ下一丁目 369 番地点

16 条の若宮大路側溝が検出されている。このうち 9 溝・10 溝から地覆材が検出されている。9 溝の地覆材の枘穴芯々距離は約 61cm、また 10 溝の地覆材の枘穴芯々距離も同一である。このほかに検出溝名は不明であるが、もう一本枘穴芯々距離が約 50cm の地覆材が検出されている。調査担当者は 9 溝・10 溝からの出土遺物の同時期性、また地覆材の検出レベルの同一性から二つの溝が同時期に構築された可能性を指摘している。

⑫雪ノ下一丁目 369 番 1 地点

中世遺構確認面から六時期の若宮大路側溝が検出されている（溝 3・4・5・6・7・8)。溝 3 からは西側からのみ地覆材が検出されているため溝幅は不明。覆材の枘穴芯々距離は約 50cm。この溝からは控え梁が検出されている。溝 4 は東側からのみ枘穴芯々距離約 61cm の地覆材が検出されている。枘穴は貫通したものと不貫通のものが交互に設けられている。溝 5 からは東西の地覆材が検出されている。地覆材間の芯々距離は東側地覆材が原位置を保っていないため不明であるが、320cm 以上はあると思われる。枘穴間の芯々距離は約 61cm。この溝 5 からは地覆材が四本検出されており、全ての枘穴が溝 4 と同様に貫通したものと不貫通のものが交互に設けられている。またこの溝からは梁が検出されている。溝 6・7 は断面逆台形状と薬研堀の溝 。

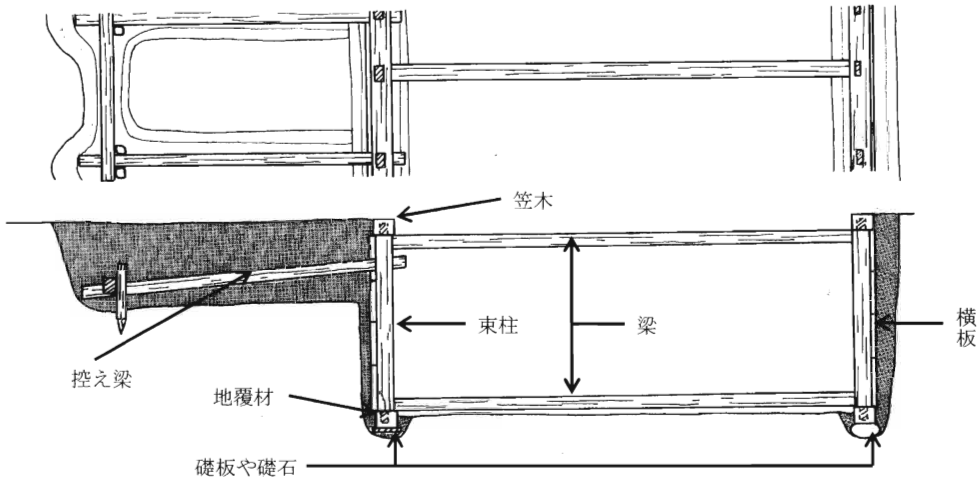
⑬雪ノ下一丁目 367 番 1 地点・368 番 1 地点

五時期の若宮大路側溝が検出されている（溝 1・2・3・4・5)。溝 5 からは東西地覆材が検出されており、地覆材間の芯々距離は 305 ～ 312cm、枘穴間の芯々距離は約 50.5cm。溝 4 からは東側のみから地覆材が検出されている。枘穴間の芯々距離は約 52cm。なお、この溝からは地覆材が四本検出されているが、うち一本から側面に菱形に梅模様の印刻が施されたものがある。溝 3 からは東西地覆材及び束柱・控え梁が検出されている。地覆材間の芯々距離は 295 ～ 308cm、枘穴間の芯々距離は約 61cm。検出された八本の地覆材のうち、三本が枘穴が貫通したものと不貫通のものが交互に設けられている地覆材である。溝 2・1 は素掘りの溝。溝 2 は薬研掘りの溝で上部推定幅は約 300cm 。溝 1 は断面逆台形状で上部西肩は調査区外に延びているため溝幅は不明。下部幅は 110 ～ 160cm、残存高は 120 ～ 150cm を測る。

2. 若宮大路側溝の構造

前章で若宮大路側溝の検出事例をみてきたが、これらをみると大路側溝の構造は大きく以下の二つに分類できると思われる。

A 類：素掘り構造



第 4 図　若宮大路側溝Ｂ類模式図

現在のところ若宮大路東側調査地点のみで検出されている。構造は断面逆台形状のもの（A1 類）と薬研掘りのもの（A2 類）に細分できる。A1 類は最も現在の若宮大路に近い位置で検出されており、出土遺物から 12 世紀末～ 13 世紀初頭の年代と複数期検出されている側溝の中では一番古い年代が考えられる。上部は後世に掘削されているが、確認された最大幅は約 320cm、底部幅約 160cm。

A2 類は出土遺物から A1 類と並存していたのではなく、A1 類が廃絶した後に掘られたものと考えられる。検出されている位置は A1 類より東側で、次段階にあたる木組み構造の側溝とほぼ同位置に掘られている。出土遺物から 13 世紀初頭から 13 世紀前半が考えられ、上部残存幅は最大約 190cm、残存高は最大約 90cm。

B 類：木組み構造

若宮大路東西両調査地点から検出されている。A2 類とほぼ同位置で検出されており、A2 類以降の若宮大路側溝はこの構造を採用している。『北野天神縁起絵巻』の菅原是善邸門前や『蒙古襲来絵詞』の安達泰盛邸門前に B 類と同様の構造の溝が描かれており、松尾宣方は当該期における都市部の大型溝の典型的な構造であった可能性を指摘している（松尾 1990）。鎌倉では若宮大路以外にも横大路（手塚 1991・1993）や小町大路（菊川 1989、田代 1994、原 1999）など主要道路の側溝の構造として採用されていたほか、鶴岡八幡宮寺三方堀や幕府の中核施設、北条氏邸宅の区画溝にも採用されていた事が確認されている（原 1999、馬淵 2002・2003）。

B 類の構造は、最初に地覆材を設置する箇所を全体より深くした掘り方を作り、そこに礎板や礎石で安定させた地覆材を設置する。地覆材にはおおむね等間隔に枘穴が空いており、この枘穴に束柱を差込み上部に地覆材と同型の笠木を差込み、束柱の裏側には横板を並べ土砂で裏込

めをしたと考えられる（第4図）。笠木の検出事例は現在のところ確認されていないが、米町遺跡（大町二丁目2320番1地点）や今小路西遺跡（扇ヶ谷一丁目131番1地点）など、若宮大路や小町大路の側溝より小規模かつ簡易な木組み構造の溝から笠木が検出されている点、また前述の絵巻に笠木が描かれている点から若宮大路側溝の木組み溝においても笠木が存在していた可能性を指摘しておきたい。

以上が若宮大路側溝B類の構造であるが、すべての部材が各調査地点で等しく検出されているわけではなく、梁は15調査地点中6地点（西側4地点・東側2地点）、控え梁は5地点（西側2地点・東側3地点）からしか検出されていない。地覆材を設置するための掘り込みからみると西側側溝では掘り込みが浅く、地覆材に直に梁を掛けていたことが検出事例からうかがえる。しかし大路東側では掘り込みが深く西側のように地覆材直上に梁を設置することはできない。土圧から溝の崩壊を防ぐには梁か控え梁を設置しなければならないが、東側側溝からは控え梁が検出されている側溝は2地点であることから西側側溝と同様に梁を設置したと思われる。以上のことから大路東側では梁は地覆材よりやや高めに設置されていたと考えられ、今までの調査で梁が検出されていない理由として、改修の際に前段階の梁を取り除かなくてはならなかったからと考えられる。

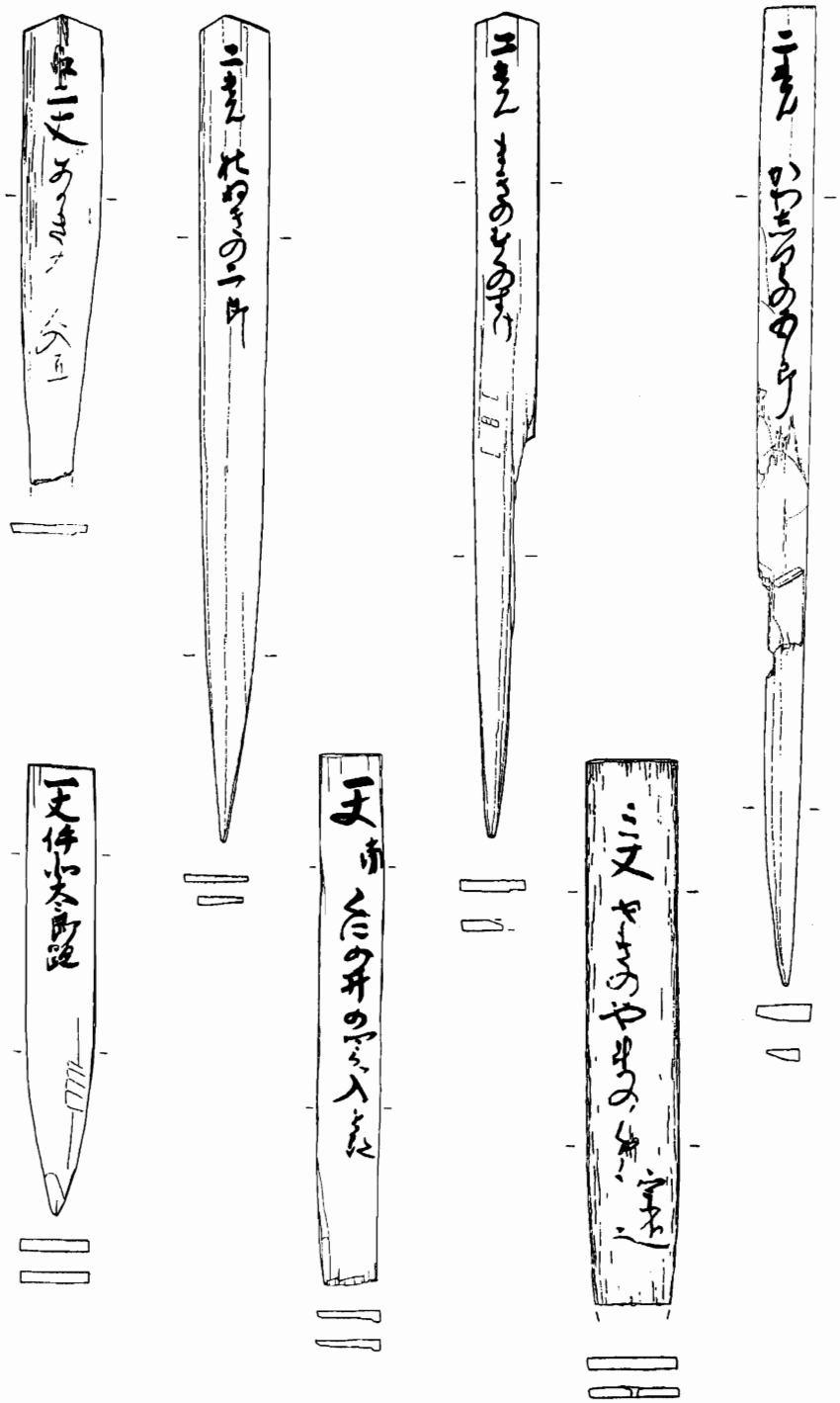
次に控え梁であるが、控え梁は東西の側溝を合わせて4条の側溝から検出されているが、特定の時期の溝にだけ設置されていたわけではなく、部分的に設置されていたがわかる。大路東側の場合は先述のとおり梁を確認することは不可能であるが、西側の場合、控え梁が検出されている側溝から梁が同時に検出されている事例は現在のところない。控え梁が設置されている場合、梁が何らかの理由で設置されていなかった可能性を指摘しておきたい。

3. 木組み構造側溝の修理・浚渫と人名木簡

検出された木組み構造の溝には修理・浚渫や改修された痕跡が残っているものがある。側溝の全面的な改修については次節にふれることとし、本章では部分的な修理や浚渫について考えていく。また若宮大路では御家人と思われる人名が記された木簡が出土しており、あわせて本章で扱うことにする。

修理・浚渫

まず修理についてである。通常地覆材の寸法は3～4mほどの部材が使用されているが、北条小町邸跡（雪ノ下一丁目369番1地点）からは長さが2m弱の地覆材が検出されている。この短い地覆材は両端が鋭利に切断されており、腐食した地覆材とつけ替えがおこなわれたものと考えられる。 このほかには北条小町邸跡（雪ノ下一丁目371番1地点）から1つの側溝から複数の地覆材が検出されている事例があり、部分的修理の痕跡として挙げられる。また複数の調査



第5図　若宮大路側溝および周辺出土人名木簡

地点から浚渫した形跡がみつかっている。

以上の検出事例から若宮大路側溝は日常的な維持管理がなされたと考えられる。ただし部分的修理では足りなくなった時や、政治的な動きがあった際に全面的な改修がされたと考えられる。なお改修については次節で詳しくふれることとする。

人名木簡

若宮大路側溝からは6点の若宮大路側溝の普請を割り当てられたと思われる御家人の名前が記された木簡が出土している。ここでは出土した各調査地点から出土した人名木簡を紹介し考察を加えたい。

北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目265番3地点）（第5図-1）

第3面木器層から「ロ二丈　あかき□□入道」銘の木簡が出土している。寸法は残存長25.1cm、最大幅4.2cm、厚さ0.5cmあり、頂部は山型に成形されている。この木簡の『ロ二丈』は若宮大路と交差する道路か溝の周辺二丈分の意味と考えられ、『あかき』は『赤木』であろうと推定されているが、赤木氏については相模の御家人という以外は分かっていない（河野1995）。

北条小町邸跡（雪ノ下一丁目377番7地点）（第5図-2·3·4）

宮大路側溝である溝6-Ⅲから「二けん　おぬきの二郎」、溝6-Ⅱから「二けん　まきのむくのすけ」・「二けん　かわ志りの五郎」銘の人名木簡が出土している。寸法は第5図-2が長さ44cm、最大幅3.5cm、厚さ0.3cm、第5図-3は長さ43.8cm、最大幅3.5cm、厚さ0.7cm、第5図-4は長さ52.2cm、最大幅2.9cm、厚さ0.85cm、であり、2と3は頂部が山型に成形されているが、4は平坦である。

当調査地点で出土した人名木簡に書かれた人名は松吉大樹により陸奥国石河荘に総領制を展開していた石河氏の可能性が指摘されている（松吉2002）。松吉によれば比定された人物として『北条貞時十三年忌供養記』に記載がある「石河牧木工助又太郎」・「石河河尻六郎」が挙げられ、また「おぬきの二郎」については比定される人物は『北条貞時十三年忌供養記』の記載にはないが、石河荘内に小貫村が存在していたことが確認されてとのことである。

なお、溝6-Ⅲは若宮大路Ⅳ期に相当し、13世紀後半から13世紀末の年代が考えられる。また溝6-Ⅱについては今回同定できる側溝はみつからなかったが、溝6-Ⅲの年代との年代差は少ないと思われえる。

この調査地点出土の木簡の最大の特徴は普請で割り当てられた幅の単位が「丈」ではなく「間」であり、同じ若宮大路側溝でも異なる単位を使用している点である。

雪ノ下一丁目371番1地点（第5図-5·6）

溝8から「一丈伊北太郎跡」・「一丈南　くにの井の四郎入道跡」銘の人名も間が検出されている。寸法は第5図-5が長さ24.2cm、最大幅3.8cm、厚さ0.7cm、6は残存長28.5cm、最大幅3.4cm、厚さ0.6cmであり、頂部は共に平坦に成形されている。

伊北氏は上総介広常の一族であり上総国夷伊隅荘に総領制を展開していた家で、国井氏は常陸国国井保に総領制を展開していた一族と考えられている（馬淵1989）。この2つの木簡が出土した溝8は若宮大路東側側溝Ⅲ期に相当する。

若宮大路側溝から出土した人名木簡をみると大路側溝東側が木組み構造の溝になったⅢ期からすでに木簡の検出事例があり、当初から木組みの溝は御家人への賦課により構築されたことがわかる。このほかに人名木簡は宇津宮辻子幕府跡小町二丁目373番1地点からも出土している（第5図-7）。ここからは若宮大路の側溝と同一構造をもつ小町大路の側溝と、同じく同一構造を持ち若宮大路に並行する溝が検出されている。人名木簡はこのうち溝2とされている若宮大路に平行な溝から出土しており、調査担当者は若宮大路と同様に御家人への賦課にこの溝が造られたと推定している（原　1999）。また、この溝2と直行するかたちの同一構造の木組みの溝が北条小町邸で検出されており、これらも含め幕府中枢域で検出される若宮大路と同一構造の木組み溝は御家人役として賦課された可能性が考えられる。

4. 若宮大路側溝の変遷

本章では前章にみた若宮大路側溝の分類をふまえた上で大路側溝の変遷について詳しく触れていくこととする。

若宮大路西側（第6図）

西側の側溝は各調査地点により、2～5回の作り替えが報告されている。これらの溝は溝幅、地覆材の枘穴芯々距離、溝底のレベル及び地覆材検出レベルから判断すると以下のような変遷が考えられる。

Ⅰ期

海抜6.6m前後で検出され、地覆材の枘穴間芯々距離は約70cmと、他の時期の地覆材の芯々距離より20cmほど長い。溝幅は約296cm前後。出土遺物から13世紀前半から後半が考えられる。このⅠ期と考えられる溝は雪ノ下一丁目264番4地点及び雪ノ下一丁目265番3地点からは検出されていない。雪ノ下一丁目264番4地点の報告書中では検出された最も古い3面大路側溝Ⅲより前の側溝の存在を示唆しており、Ⅰ期の溝が存在していた可能性は高い。なお、この溝は南にいくにつれ若干低くなる傾向がある。

Ⅱ期

海抜7.0m前後で検出され、地覆材の枘穴間芯々距離は約50cmとⅠ期に比べ短くなっている。溝幅約265cm前後とⅠ期と比べやや小ぶりになっている。Ⅱ期と考えられる側溝は雪ノ下一丁目271番4地点溝6、雪ノ下一丁目272番地点溝7、雪ノ下一丁目273番ロ地点南北溝Ⅰ、雪ノ下一丁目273番イ地点溝1b、雪ノ下一丁目274番2地点溝2bである。出土遺物から13世紀後半から13世紀末の年代が考えられる。

Ⅲ期

海抜7.2m前後で検出され、地覆材の枘穴間芯々距離は約50cmとⅡ期と同様の規格になっている。しかし溝幅は約275cm前後とⅡ期よりやや大きい。Ⅱ期と考えられる側溝は雪ノ下一丁目264番4地点溝若宮大路側溝Ⅲ、雪ノ下一丁目265番3地点南北溝3、雪ノ下一丁目271番4地点溝5、雪ノ下一丁目273番イ地点3面若宮大路側溝である。出土遺物から13世紀末から14世紀初頭の年代が考えられる。

Ⅳ期

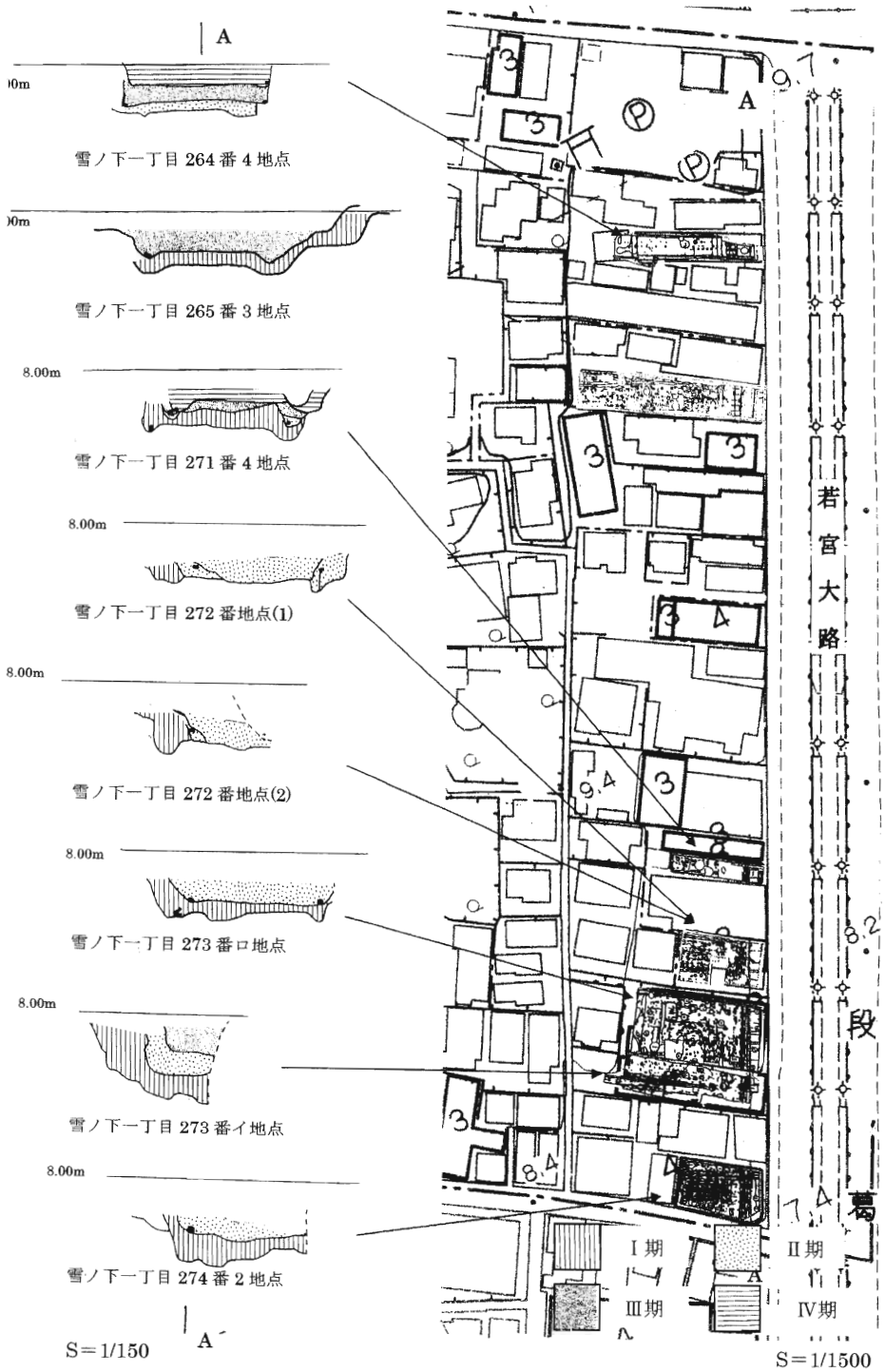
海抜7.5m前後で検出され、地覆材の枘穴間芯々距離は約50cmでⅡ期およびⅢ期と同様の規格になっている。しかしながら溝幅は約280cm前後とⅢ期とあまり変わらない。出土遺物から14世紀初頭から14世紀前半の年代が考えられる。ちなみに雪ノ下一丁目271番4地点より南の調査地点は標高7.5m前後で近世の掘削を受けており、この溝は検出されていない。

これら四時期の溝のほかに雪ノ下一丁目271番4地点からはⅢ期とⅣ期の間にもう一時期、雪ノ下一丁目265番3地点からはⅣ期以降の溝が検出されており、今回の変遷よりさらに細かく分けられる可能性はある。

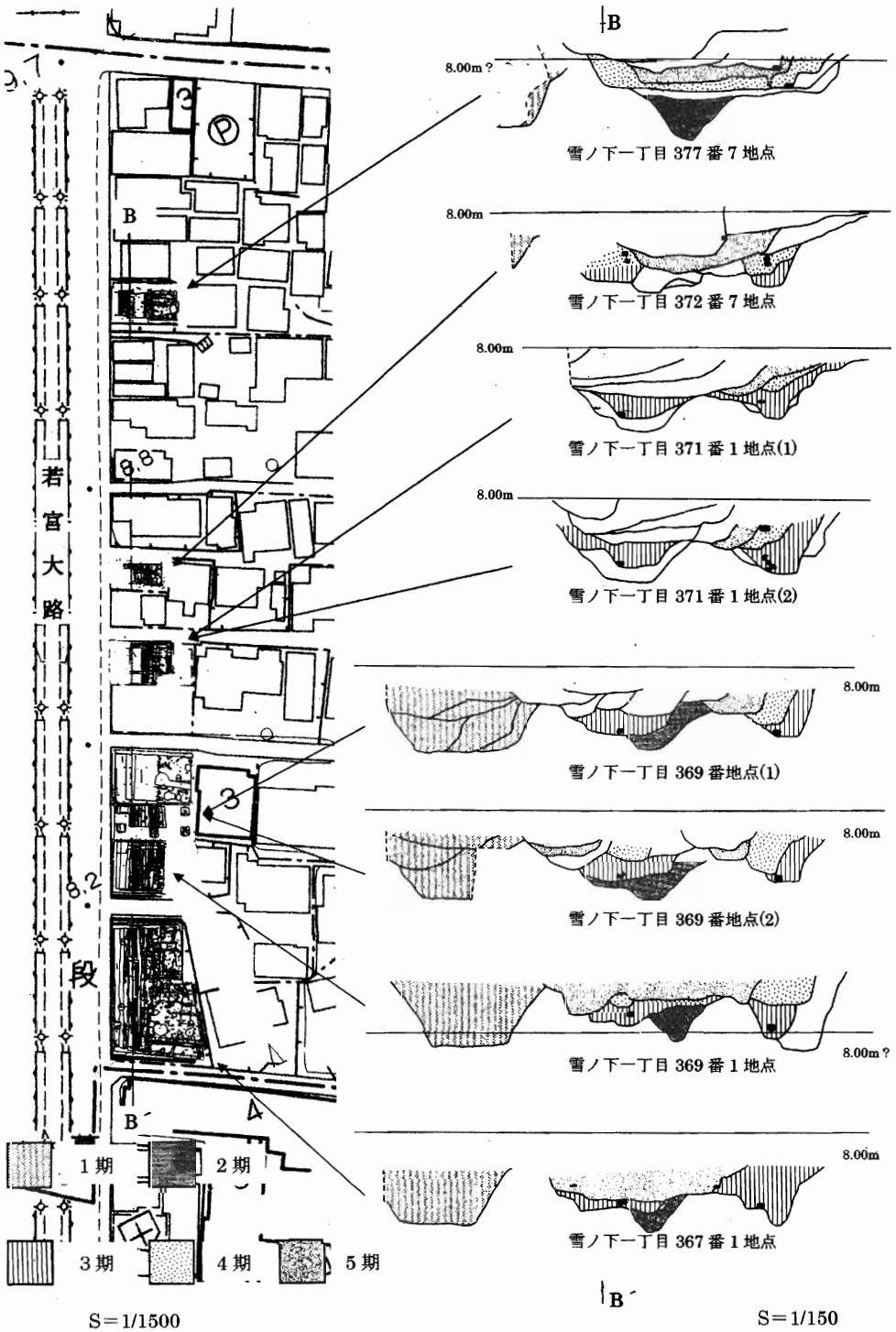
若宮大路西側側溝の変遷として、Ⅰ期が構築された場所から時代が下るにしたがい、現在の若宮大路側（東側）へ移行していくことがわかる。また使用される木組みの部材もⅠ期では地覆材の枘穴間芯々距離が約70cmのものが検出されているが、それ以降の地覆材の枘穴間芯々距離は約50cmとⅠ期に比べ束柱が並ぶ間隔が短くなるという特徴がある。

若宮大路東側（第7図）

大路東側の木組みの側溝は西側側溝と比べ、掘り方内の地覆材を設置する箇所が深く、これが数回にわたり切り合っているため、どの落ち込みが一つの溝か判断するのが困難である。よって木組みの溝については一番古い溝からの切り合いと溝底のレベル及び地覆材検出レベルから木組みの溝を再現し、変遷をたどっていくことにする。



第6図　若宮大路西側側溝検出地点



第７図　若宮大路東側側溝検出地点

1期

A1類。底部幅は160cm前後、上部幅は320cmほどあったと考えられる。雪ノ下一丁目371番1地点以外の調査地点から検出されており、年代は12世紀末から13世紀初頭が考えられる。調査区がほかの地点より東に位置している雪ノ下一丁目371番4地点以外のすべての調査地点から検出されている。

2期

A2類。溝最大確認幅は190cm、残存最大高は約90cmである。雪ノ下一丁目372番7地点及び雪ノ下一丁目371番1地点からは検出されていない。年代は13世紀初頭から前半が考えられる。

3期

海抜6.6m前後で検出され、地覆材の枘穴間芯々距離は約60cmで溝幅は308cm前後。この3期に対応するものとして雪ノ下一丁目371番21地点の溝8および溝9、雪ノ下一丁目369番地点の9溝・10溝、雪ノ下一丁目369番1地点の溝5、雪ノ下一丁目267番1地点・1368番1地点の溝3が考えられる。年代は13世紀前半から後半と考えられる。

4期

海抜7.0前後で検出され、地覆材の検出事例がないために規模は不明。雪ノ下一丁目377番7地点溝6－Ⅲ、雪ノ下一丁目372番7地点11b層・13層、雪ノ下一丁目371番地点溝7、雪ノ下一丁目369番地点4溝・8溝、雪ノ下一丁目369番1地点溝4がこの4期に該当すると思われる。年代は13世紀後半から13世紀末の年代が考えられる。

5期

4期とほぼ同レベルで検出されている。地覆材の枘穴間芯々距離は約50cmで溝幅は調査地点の報告ごとに若干の差異があるが、おおよそ300cm前後と考えられる。この5期に該当する溝は雪ノ下一丁目377番7地点溝5－Ⅰ、雪ノ下一丁目372番7地点9層、雪ノ下一丁目371番地点溝6、雪ノ下一丁目369番地点3溝・7溝、雪ノ下一丁目369番1地点溝3、雪ノ下一丁目267番1地点・1368番1地点の溝5が考えられる。年代は13世紀末から14世紀初頭が考えられる。

これら五時期の溝のほかに西側側溝と同様今回の変遷にはあてはまらない側溝が数条あり、さらに細かく分けられる可能性はある。若宮大路西側側溝の変遷として、若宮大路の初期の側溝であると思われる1期から2期に移行する際、若宮大路側溝が東側に移動し、木組みの溝に変わった後も2期が掘られた位置を踏襲したかたちをとっている。しかし木組みの溝に変化し

たのちは時代が下るに従い西側側溝と同様現在の若宮大路側（西側）へ移行していく傾向にある。また使用される木組みの部材は大路西側ではⅠ期からⅡ期へ移行する際地覆材の枘穴間芯々距離が縮小する傾向がみられたが、東側では木組みの溝構築当初の3期の地覆材の枘穴の規格は4期までは維持されている。

おわりに

最後に第3章・第5章を中心に改めて整理し、若干の考察を加えたい。まず若宮大路側溝の構造については素掘りのもの（A類）と、木組みのもの（B類）のふたつに大きく分けることができ、A類は断面逆台形状の形体を持つもの（AⅠ類）と断面V字状の薬研掘り（AⅡ類）に細分することができる。12世紀末から13世紀初頭の年代が考えられ、年代から考え若宮大路が初めて造られた養和二年段階の側溝の可能性がある。AⅠ類は大路東側のみでしか検出例が現在のところ確認されていない。このAⅠ類は検出された若宮大路側溝のうち、一番現在の大路に近い位置に掘られており、AⅡ類以降の側溝は素掘り・木組みの側溝ともにやや東側に場所を移され設置されている。

木組み構造をもつB類はおおよそ13世紀前半頃から出現すると考えられ、以降の若宮大路側溝は鎌倉幕府滅亡後も同一の構造で作り替えがおこなわれる。この構造は鶴岡八幡宮三方堀や若宮大路幕府周辺などから検出されており、宗臺秀明が述べているように主要施設の区画などに採用されたと考えられる（宗臺　1996）。ただし、年代から考えて当初から幕府がこの形体の側溝を採用したとは考えにくい。北条泰時が嘉禄元（1225）年に条尺制を採用しているが、遺構の年代から嘉禄以降に土地区画の一環として木組みの溝が採用されたと思われる。またこれら側溝は人名木簡の出土から御家人への賦課により造られたと考えられる。なおB類の溝は検出されたすべての地点において側溝の位置が時代を下るにしたがい若宮大路を侵食し、造り替えられる傾向を確認できた。

次に若宮大路の側溝から若宮大路の道路幅について考察をしてみたい。A類とした素掘りの溝は現在のところ東側のみでしか検出されていないことは先に述べた若宮大路が造られた当初から道路幅が変化していない（もしくは規定されていた）のであれば、大路西側の調査地点で、木組みの溝の西側に位置するかたちで検出されるはずであるが、現在までにAⅠ類・Ⅱ類ともに検出された事例がない。このことから素掘りの段階の大路西側側溝は側溝が検出された調査地点より東側に位置していると考えられる。この時期の道路幅は不明と言わざるをえない。木組みの溝については東側B類3期と西側B類Ⅰ期を木組みの最古のものと考えるのであれば、その距離は約33mということになる。馬淵和雄は鎌倉時代中期の若宮大路の道幅を約33m（十一丈）と推定しているが（馬淵1989・同ほか1996・2003）これと矛盾しない。若宮大路は当初から十一丈という幅にしたのではなく木組み構造の側溝を採用した段階から意識されたものと

考えられる。しかしこの数値も当初木組み溝を設置した時以外は特に意識されなかった、もしくは幕府の規制が行き届かなかったと思われ、改修をするにしたがい大路幅は減少していくことになる。

また大路幅と並ぶ問題になるのは若宮大路側溝がどこまで南に延びるかという点である。若宮大路の側溝であるのならば本来は一の鳥居周辺 においても側溝の検出事例があるはずであるが、現在までに二の鳥居以南で若宮大路の側溝は検出されていない。西側側溝については二の鳥居以南は発掘調査により近世・近代の段階に河川が流れ込んでいることが確認されており（田代ほか　1990・斎木ほか　2000・宮田ほか 2008)、このため中世の遺構は削られたと思われる。

以上若宮大路の側溝について再検討をくわえてみた。今回大路の側溝を東西ごとに複数の時期にまとめてみたが、この時期にあてはまらない側溝が残ってしまったこと、また二の鳥居以南の側溝がどのようになっていたか不明な点が大きな課題となった。またB類とした木組みの溝で使用されていた地覆材の寸法や枘穴芯々距離から竪穴建物に使用される部材との比較検討も今後必要と思われる。

本稿を作成するにあたり以下の方々に御教示を賜った。篤く御礼申しあげる。
河野眞知郎・斎木秀雄・瀬田哲夫・手塚直樹・原廣志・福田誠・藤原良章・馬淵和雄・宮田眞（五十音順、敬称略）

註

(1)「吾妻鏡」養和二年三月十五日条
(2) 若宮大路は修景計画に伴い50地点近く発掘調査がおこなわれているが、後世の攪乱が激しく中世段階の若宮大路には不明な点が多い。ただし若宮大路東側に接する北条小町邸跡の調査では若宮大路が数地点で検出されている。
(3) 東側側溝のうち宇津宮辻子幕府跡では2地点で若宮大路側溝が検出されているが1地点が未報告、1地点が断面図に不明な点があるため本稿では扱わないこととする。
(4) 報告書中では土層堆積図と平面図の溝6と7の名称がそれぞれ異なる。どちらが正しいかは文中にこれら二つの溝の記載がないために不明。
(5) 調査担当者の原廣志氏の御教示による。
(6)「丈」と「間」については、岡陽一郎 1996「人名木簡について」『鎌倉市緊急調査報告 12-2　北条小町邸跡　雪ノ下一丁目 377 番 7 地点』に詳しい。
(7)「吾妻鏡」嘉禄元年十月四日条
(8) 道路幅は地覆材のうち、若宮大路に近いほうの地覆材間の距離を測った。なお本稿でしめした約 33m という数値は北条
子町邸跡雪ノ下一丁目367番1地点と北条時房・顕時邸跡雪ノ下一丁目273番ロ地点の位置をおとした1/200の地図を作成
し、計測をおこなった。算出した数値は 32.7m であったが、誤差を考慮し約 33m とした。
(9) 現在の一の鳥居は寛文八 (1668) 年に造られたものであるが、平成元 (1989) 年の修景計画に伴う調査でこの鳥居から北に約 180m の位置で天文二十二 (1553) 年に建てられたと推定される鳥居の基礎部分が検出されている。少なくとも戦国期においてはこの鳥居より北側までが若宮大路であったと思われる。

引用・参考文献

秋山哲雄　　1997「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史學雜誌　第 106 編第 9 号』史學會
秋山哲雄　　2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館

網野善彦　1976 「鎌倉の「地」と奉行について」『三浦古文化　第19号』 三浦古文化研究会
石井　進　1989 「大路・小路・辻子・辻」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』 平凡社
石井　進　1990 「中世の木簡」『木簡―古代からのメッセージ―』川崎市市民ミュージアム
伊藤正義　1991 「鎌倉・大倉幕府から宇都宮辻子幕府へ　御所の破却と政権の再生」『「吾妻鏡」の総合的研究』
大三輪龍彦　1986 「中世都市鎌倉の地割制試論」『佛教藝術164』
大三輪龍彦　1989a 「都市鎌倉の道と地域」『中世日本の諸相』吉川弘文館
大三輪龍彦　1989b 「鎌倉の都市計画」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
大三輪龍彦ほか　1991『若宮大路遺跡発掘調査報告書Ⅴ』史跡若宮大路遺跡発掘調査団
岡陽一郎　1998 「泰時以前の鎌倉」『鎌倉　88号』
岡陽一郎　2004 「義朝以後の鎌倉」『三浦一族研究　第八号』三浦一族研究会
岡陽一郎　2005 「中世都市鎌倉の成立と変貌」『中世都市研究11　交流・物流・越境』新人物往来社
河野眞知郎　1989 「発掘された道」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
河野眞知郎　2005 『中世都市鎌倉　遺跡が語る武士の都』 講談社
河野眞知郎ほか　1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団編
河野眞知郎ほか　1993 『今小路西遺跡発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団編
菊川英政　1989 「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告5』鎌倉市教育委員会
斉木秀雄　1989 「溝の流れが語る地形と町割」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
斉木秀雄　2004 「出土遺物から見る鎌倉の開発」『国立民俗博物館研究報告第118集』 国立民俗博物館
斎木秀雄ほか　1999 『神奈川県・鎌倉市　北条時房・顕時邸跡7』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
斎木秀雄ほか　2000 「若宮大路周辺遺跡群の調査－第84次概要報告－」『鎌倉考古45』鎌倉考古学研究所
宗臺秀明　1996 「中世都市と排水施設」『日本考古学　第3号』日本考古学協会
宗臺秀明ほか　1999 『神奈川県鎌倉市　北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点』東国歴史考古学研究所
宗臺富貴子ほか　1997 『神奈川県鎌倉市　北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
宗臺富貴子ほか　1998 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告14-1』鎌倉市教育委員会
瀬田哲夫　1991 「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目369番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告7』鎌倉市教育委員会
瀬田哲夫ほか　1999 「北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目273番イ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告15-1』鎌倉市教育委員会
高柳光寿　1954 『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
田代郁夫ほか　1990 「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目280番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告6』鎌倉市教育委員会
田代郁夫ほか　1990 「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告6』鎌倉市教育委員会
田畑佐和子　1991 「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第1回　鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所
土屋浩美ほか　1998 「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目370番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告14-1』鎌倉市教育委員会
手塚直樹　1991 『政所跡　雪ノ下三丁目987番1・2地点』政所跡発掘調査団
手塚直樹　1993 「政所跡　雪ノ下三丁目988番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告9-3』鎌倉市教育委員会
手塚直樹　1994 「中世都市鎌倉の成立」『中世都市鎌倉を掘る』日本ｴﾃﾞｨﾀｰｽｸｰﾙ
原廣志　1999 「神奈川・宇津宮辻子幕府跡」『木簡研究　第二十一号』木簡学会
原廣志ほか　1988 「北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目273番ロ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告4』鎌倉市教育委員会
原廣志ほか　1988 『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
原廣志ほか　1989 『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目271番1地点発掘調査報告書』北条時房・顕時邸跡発掘調査団
原廣志ほか　1996 「神奈川県鎌倉市　宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書　小町二丁目361番1地点」宇津宮辻子幕府跡発掘調査団
原廣志ほか　1997 「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目361番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告13-2』鎌倉市教育委員会
原廣志ほか　1998 「北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目369番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告

14-2』鎌倉市教育委員会
福田豊彦　海老名尚　1992「「六条八幡宮造営注文」について」『国立歴史民俗博物館研究報告第45集』国立歴史民俗博物館
福田誠ほか　2005「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目264番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告21-1』鎌倉市教育委員会
藤原良章　2004「中世都市と交通体系」『日本史講座4　中世社会の構造』東京大学出版会
松吉大樹　2002「鎌倉・北条小町邸跡（泰時・時頼邸）雪ノ下1丁目377番7地点出土の人名木簡についての考察」『鶴見考古　第2号』鶴見大学文学部文化財学科河野ゼミ
馬淵和雄　1985「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目372番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告1』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄　1985『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番1地点』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄　1989「切岸と地業　中世の土木工事」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
馬淵和雄　1989「若宮大路　都市の基軸を掘る」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
馬淵和雄　1989「若宮大路側溝から出土した木簡」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
馬淵和雄　1989「大路の側溝　若宮大路」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
馬淵和雄　1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉　69号』
馬淵和雄　1994「武士の都鎌倉　その成立と構想をめぐって」『中世の風景を読む2』新人物往来社
馬淵和雄　2002「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告18-2』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄　2003「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目401番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告19』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか　1996「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告12-2』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか　2000「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告16-2』鎌倉市教育委員会
宮田眞ほか　2008『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書（鎌倉市小町一丁目83番3・83番32地点-東昭ビル用地）』博通
森孝子ほか　2000『北条小町邸跡（泰時・時頼邸）発掘調査報告書　ー鎌倉市雪ノ下一丁目267番1、368番1ー』北条小町邸跡発掘調査団
山村亜希　1997「中世鎌倉の都市空間構造」『史林80-2』史学研究会

北条時房・顕時邸跡					
調査地点名	遺構名	種別		年代	
		溝幅	地覆材　長	地覆材　幅	地覆材　厚
		枘穴芯々距離	束柱	梁	控え梁
①雪ノ下一丁目 264 番 4 地点	大路側溝Ⅱ	木組み		14 世紀前半	
		－	－	－	－
		（約 50cm）	×	×	×
	大路側溝Ⅲ	木組み		13 世紀末～ 14 世紀初頭	
		約 280cm	－	－	－
		（約 50cm）	×	×	○
②雪ノ下一丁目 265 番 3 地点	第 2 面若宮大路側溝	木組み		近世	
		（約 285cm）	393cm	11cm	8cm
		約 50cm	×	×	×
	第 3 面若宮大路側溝（Ⅲ期）	木組み		13 世紀末～ 14 世紀初頭	
		約 275cm	－	10cm	6cm
		約 56cm	○	×	○
	第 5 面若宮大路側溝	木組み		13 世紀中頃	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
③雪ノ下一丁目 271 番 4 地点	若宮大路側溝 3	木組み		－	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	若宮大路側溝 4	木組み		－	
		－	－	10cm	2.5 ～ 5.0cm
		約 50cm	○	○	×
	若宮大路側溝 5	木組み		鎌倉時代中～後期	
		－	－	－	－
		約 50cm	×	×	×
	若宮大路側溝 6	木組み		－	
		－	－	9.9cm	9 cm
		約 51cm	×	×	×
	若宮大路側溝 7	木組み		－	
		－	－	11.5cm	7.5cm
		約 75cm	×	×	×
④雪ノ下一丁目 272 番地点	溝 7・11	木組み		鎌倉時代後～末期	
		約 260cm	379cm	－	－
		（約 50cm）	○	○	×
	溝 8	木組み		－	
		（約 300cm）	－	－	－
		－	×	×	×

第 1 表　各調査地点検出若宮大路側溝一覧（1）

北条時房・顕時邸跡					
調査地点名	遺構名	種別		年代	
		溝幅	地覆材　長	地覆材　幅	地覆材　厚
		枘穴芯々距離	束柱	梁	控え梁
⑤雪ノ下一丁目 273 番ロ地点	南北溝 I	木組み		14 世紀前半代前後	
		約 270cm	394 ～ 397cm	9 ～ 12cm	7 ～ 9cm
		(約 50cm)	×	○	×
	南北溝 II	木組み		14 世紀前半代前後	
		約 296cm	400 ～ 430cm	12cm	7 ～ 9cm
		(約 70cm)	○	×	×
⑥雪ノ下一丁目 273 番イ地点	3 面若宮大路側溝	木組み		－	
		－	－	－	－
		－	－	－	－
	溝 1a	木組み		－	
		－	－	10cm	5cm
		約 50cm	×	○	×
	溝 1b	木組み		－	
		－	429cm	13cm	7cm
		(約 70cm)	×	○	×
⑦雪ノ下一丁目 274 番 2 地点	溝 2 － A	木組み		13 世紀～ 14 世紀前半	
		－	－	12cm	9cm
		(約 50cm)	×	×	×
	溝 2 － B	木組み		13 世紀～ 14 世紀前半	
		－	－	12 ～ 14cm	7 ～ 9cm
		(約 70cm)	×	×	×
北条小町邸跡					
⑧雪ノ下一丁目 377 番 7 地点	溝 4	木組み		南北朝後期以降	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	溝 4 ′	木組み		南北朝後期以降	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	溝 5 －Ⅲ	木組み		南北朝後期以降	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	溝 5 －Ⅱ	木組み		鎌倉末～南北朝前期	
		－	－	－	－
		(約 51cm)	×	×	×
	溝 6 －Ⅲ	木組み		1225 年～鎌倉後期	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	溝 6 －Ⅱ	木組み		1225 年～鎌倉後期	
		－	－	－	－
		－	×	×	×

第 2 表　各調査地点検出若宮大路側溝一覧 (2)

北条小町邸跡					
調査地点名	遺構名	種別		年代	
		溝幅	地覆材　長	地覆材　幅	地覆材　厚
		枘穴芯々距離	束柱	梁	控え梁
⑨雪ノ下一丁目 377番7地点	溝6－Ⅰ	木組み		1225年～鎌倉後期	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	遺構名	種別	断面形状	年代	
	溝7	素掘り	V字	1182～1225年	
	溝8	素掘り	逆台形	1182～1225年	
⑩雪ノ下一丁目 372番7地点	溝	木組み		－	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
⑪雪ノ下一丁目 371番1地点	南北溝Ⅰ群	木組み		13世紀中葉	
		－	－	－	－
		（約60cm・約50cm）	×	×	×
	南北溝Ⅱ群	木組み		13世紀中葉～後半	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
⑫雪ノ下一丁目 369番地点	Ⅰ溝群	木組み		13世紀中葉～16世紀	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	Ⅱ溝群	木組み		13世紀中葉～16世紀	
		－	－	－	－
		－	×	×	×
	遺構名	種別	断面形状	年代	
	Ⅲ溝群	素掘り	逆台形	13世紀中期	
⑬雪ノ下一丁目 369番1地点	溝3	木組み		鎌倉中期～南北朝期	
		約308cm	400.5cm	12cm	9cm
		（約50.5cm）	○	×	○
	溝4	木組み		鎌倉中期～南北朝期	
		－	－	14cm	9cm
		（約61cm）	×	×	×
	溝5	木組み		鎌倉中期～南北朝期	
		（約320cm）	－	14cm	10cm
		（約61cm）	×	×	×
	遺構名	種別	断面形状	年代	
	溝6	素掘り	V字	溝7と同時期かやや後出	
	溝7	素掘り	逆台形	鎌倉時代初期	
	溝8	記載なし	－	－	

第3表　各調査地点検出若宮大路側溝一覧（3）

北条小町邸跡					
調査地点名	遺構名	種別		年代	
		溝幅	地覆材　長	地覆材　幅	地覆材　厚
		枘穴芯々距離	束柱	梁	控え梁
⑭雪ノ下一丁目 367 番 1 368 番 1 地点	溝 5	木組み		－	
		約 308cm	407cm	11.0 ～ 13.5cm	4 ～ 6cm
		50.5 ～ 52cm	×	×	×
	溝 4	種別		年代	
		－	305cm	13.5cm	6.5 ～ 7.5cm
		約 52cm	×	×	×
	溝 3	木組み		－	
		約 302cm	423cm	16cm	10.5 ～ 13.5cm
		59 ～ 61cm	×	×	○
	遺構名	種別	断面形状	年代	
	溝 2	素掘り	V 字	－	
	溝 1	素掘り	逆台形	－	

第 4 表　各調査地点検出若宮大路側溝一覧 (4)

※年代は各報告書による．

※※ () 内数値は発表者が報告書から測った数値

『考古論叢 神奈河』投稿規定

『考古論叢 神奈河』は、みなさまで育てる会誌です。

考古学会に衝撃を与えるような論文も歓迎しますが、身近にある資料の紹介や、研究ノートも気軽に投稿してください。投稿を希望される方は8月末までに役員へお申し出ください。なお、規定は下記の通りです。

1. 投稿資格

原則として神奈川県考古学会会員であること。但し、編集委員からの依頼原稿に関してはこの限りではない。

2. 原稿の種類と頁数

論文（20～30頁以内）、研究ノート（10～20頁以内）、資料紹介（数～10頁以内）等

3. 投稿手続

投稿希望者は役員まで連絡をとり、申込書を提出してください。後日、編集委員から執筆要項と割付用紙等を郵送します。なお、執筆者の人数が多い場合は、次号以降に掲載をお願いする場合があります。

4. 原稿の採否

原稿の明らかな誤りや、他人を誹謗中傷するような不適切な表現などがあった場合には、執筆者に訂正をお願いすることがあります。また、レイアウトの都合により原稿の変更を求めることがあります。最終的な採否は、編集委員に一任下さい。

5. 英文題目

裏表紙に英文目次を掲載するため、執筆者は各自で論文の英文題目を作成して下さい。

6. 別刷

会誌執筆者には、次のとおり雑誌・別刷を進呈します。

論文　　：本誌5冊・別刷50部
研究ノート：本誌3冊・別刷50部
資料紹介　：本誌3冊・別刷50部

※別刷を上記以上に希望する場合の費用は、執筆者の負担とさせて頂きます。

執筆者紹介　中村耕作（國學院大學大学院博士課程後期）
白石哲也（明治大学大学院博士課程前期）
宇都洋平（藤沢市教育委員会）

編集委員　佐藤仁彦・川嶋実佳子・滝澤晶子・霜出俊浩

考古論叢神奈河第17集

平成21年3月31日　印刷
平成21年3月31日　発行

編集・発行　神奈川県考古学会
事務局　〒252-8520　藤沢市遠藤5322　慶應大学岡本孝之研究室　気付
郵便振替　00240-9-71208
e-mail　soumu@koukokanagawa.net
URL　http://www.koukokanagawa.net
印刷　株式会社神奈川機関紙印刷所（きかんし印刷）

KOKO-RONSO KANAGAWA

vol.17

CONTENTS

Kousaku NAKAMURA — Relations of the decoration between a human face-shaped protrusion of deep pot and the vessel of the incense lamp form in the Middle Jomon

Tetsuya SHIROISHI — Chronology and Phase of Miyanodai Type Pottery in Miura peninsula , Knagawa Prefecture , Japan

Yohei UTSU — Reexamination of gutter running through Wakamiya-Oji

2009.3